

カラーピンナップ

うるし原智志

FCT

天海雪乃

カグユツ

二次元

平成26年6月1日発行第11巻第3号通巻89号

2D DREAM MAGAZINE

cover illustration by カグユツ

成年向け雑誌

えっちマンガ&4コママンガ

好評連載中!

『監獄戦艦3』

楠木りん 原作: Anime LiLiTH

『思春期なアダム』

EVIL EYES

天海雪乃

おおたけし

ばふえ

stem

冬扇

ふみひろ

嘉納あいら

連載&読み切り小説

上田ながの×A.S.ヘルメス

高岡智空×からすま式

新居佑×sian

倉田シンジ×牡丹

桜空×sa ku

火村龍×ユズリハ

空蟬×カグユツ

千夜詠×夜風ジャパン

今号の特集

異種交配

立ち読み版

DIGITAL
EDITION
デジタル版

vol.76

2014

06

表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス

新米ハンター
アイリ

～強制異種
交配に堕ちゆく高飛車娘～

うつせみ
小説 NOVEL 空蟬

挿絵 ILLUSTRATION カグユヅ

気高き女ハンターがおぞましき
オークたちに孕ませられる！



うっそうと生い茂る森林を二人の女が歩いていった。「上機嫌ですね、アイリ様」

「昨日に続いて今日も仕事が無い込んだのよ。当然じゃない」

あどけなさの残る童顔に左右に結わえた長髪をなびかせながら、アイリは真後ろに立つパートナーを振り返った。

「ミラ。貴女、なかなかいい情報網持ってるのね」勝気ぶりが色濃く覗く表情を喜びに染めてはしゃぐ様が、いつそう幼さを際立たせる。ミラと呼ばれた妙齡の女魔導師は、一回りほど年下の娘の上から目線にいつけなささえ覚え、目深にかぶったフードの下で密かにほくそ笑んだ。

「貴女の実力が昨日の仕事ぶりで認められた。だから新しい仕事も無い込んだのですわ。アイリ様」

煽てれば目に見えて凶に乗って、前を行く少女のしなやかな肢体はウキウキと弾みだす。初めて満足のいく相棒を得て気が緩んでいる部分もあるだろうが、死と隣り合わせの仕事に挑む覚悟と経験、実力のなさが窺える。

「ふふっ。ま、当然よね。さて、今日もサクッと獲物仕留めて帰るわよっ」

ミラの言葉が世辞であると気付きもせず、手にした得物の大鎌を振り振り、嬉々とした様子を隠そうともしない。はち切れんばかりに実った若々しい肉体を見せつけるかのようにピキニ状の衣装をまとう一方で、すらりと伸びた四肢を頑強な具足に覆わせた少女。アイリ・マクスは魔物狩りを生業とするハントーとしてはまだまだ新米の部類だ。

素質はあるが、私の強い性格が災いしてなかなかチームを組めず、組んでもすぐいざこざを起こして解散を繰り返していた問題児。そんなアイリとチームを組んでまだ二日目だが、その瑞々しく張り詰めた乳と尻を見るにつけ、ミラは抑えきれぬ昂揚に密

かに身を焦がしていた。

（本当に……美味しそうな身体つき。これを手に入られるのなら、おべっかを使う苦労なんてどうってことないわ。ああ、楽しみね——）

背後の女魔導師の不穏な気配に勘付く事なく、新米ハントーは洋々たる前途を信じて、前のみを見据え、地を踏みしだく。綺羅星の如く輝く瞳には、希望のみが映し出されているに違いなかった。

※

「くっ。もうっ、何なのよ、これはっ！」

新パートナーと共に意気揚々と進んだ魔物の巣穴。昨日同様、ミラの後方支援があれば事足りる程度の仕事。そのはず、だった。

が、そのミラの姿は今、アイリの傍らにない。代わりに豚鬼——オークと呼ばれる異形の悪鬼の群れが、瑞々しい新米ハントーの周りを取り囲んでいた。

「チッ……ゾロゾロゾロゾロとっ。何匹連れ立ってるのよこの豚どもっ」

すでに七体ほど斬り伏せていたが、視界に収まるだけでも後十数体。このままでは先にこちらが参ってしまう。

奇怪な咆哮を連ね囲みを狭めてくる異形の群れに対して、一定の距離を保とうとアイリが身の丈を超える大鎌を振りかざす。仲間を斬り伏せた得物による威嚇は一定の効果があるようで、豚鬼どもの歩みが止まった。

（さっさと来なさいよ、ミラ……）

巣穴内部ではぐれてしまったミラがこの場に駆けつけられ、この疎ましい膠着状態も動くだろうか。

背後から付いてきていたものとはか思い確認を怠った自分の不注意が招いた事態だ。——などと殊勝に考えるはずもなく、「勝手に消えた相棒」を心中で叱責する。この自分勝手な気性が原因で、アイリはこれまで同業者とチームを組んでは一方的に解

雇通達する、という事を繰り返してきた。

とうとう組む相手が見つからなくなり、ようやく己のわがままぶりを省みる機会が得られようとした矢先に、女魔導師のミラが現れ「一緒に仕事をしてほしい」と頭を垂れてきたのだ。

「これはこれは。ご尊顔麗しゅう、お嬢様」

——そう、こんな風に極端な猫なで声と卑屈とも取れる態度を伴って。

「ミラっ、どこ……」

ようやく逆転の時が来た。臭い豚鬼どもの群れの接近を鎌で阻みながら、声が響いた方へと期待のこもった目を向ける。その視界へと飛び込んできたのは、予想だにしない衝撃的な有様だった。

「私の用意した宴のお相手は気に入っていただけましたっ！」

一日半の付き合ひではついぞ見る機会のなかった悪辣な哄笑を浮かべ、ミラが数多の豚鬼に傳^{つた}られている。私の用意した——そう告げる彼女の指示に従い、豚鬼がミラの手にはロッドと鞭とを手渡した。

「どういう……事よ、ミラッ！」

「さあ踊って頂戴。可愛い可愛いアイリお嬢様」嵌められたのだ——理解した瞬間、血潮が脳天に上る。

「ゴブ……ぐぶふうううっ」

「臭い息吹きかけんなっ、屑豚アッ！」

進路を阻むように立ち塞がる一匹のオークを、怒り任せにないだ大鎌で斬り伏せた。

「あらあら。一匹だけじゃ物足りないのね？ 欲張りお嬢様」

「ミラアアアッ！」

この、煮えたぎるマグマの如き怒気を払うには、確かに一匹では事足りない。迫り来る異形の群れを次々に斬り伏せて、たどりがく先でニヤつく裏切り者を切り刻まなければ。

「ふざけるなつ、私を誰だと思ってる……」

「知っているわよ。代々優秀な騎士を輩出するマクス家の末子にして、出来そこないのお嬢様」

誰にも話した事のない出自をズバリ言い当てられ、今にも飛びかからんとしていた少女の身が強張る。

「親兄弟への劣等感から騎士ではなくハンターを志したものの、人望もなく腕を磨く以前の問題だった。そしてノコノコとやってきたオークの巣穴で、手加減されているとも知らずに戯れていた未熟者」

語るにつれ嬉々として声弾ませるミラ。巣穴に入る前と立場は入れ替わり。今は、優越感と嘲りとを無遠慮に浴びせてくる相手を、アイリが目で追う番だった。女魔導師の言葉に煽られるがまま、勝気な新米ハンターの感情は煮沸の一途をたどる。

「チームを募っても集まったのは、そのイヤらしい肉体目当てのカスハンターばかりだったのよねえ。でも、貴女もそうやって見せびらかしてる位だもの。餌にして男を手玉に取る算段だったのでしょうか？」

「……まれ」

「はあ？」

「黙れって言うてるのよ、二流魔導師！」

言葉で弄ばれているのだと勘付きながらも、怒鳴り返さずにはいられない。知られたくない恥をほじくり返され、ますます思考が乱れる。怒り任せに振り抜いた大鎌が不用意に近づいてきた豚鬼を一体、袈裟懸けに斬って落とす。

そんな状況下で、またも女魔導師の口から信じられない発言が飛び出した。

「おつむは馬鹿でも素材は一級品なんだもの。その優秀な血肉。私のために捧げて頂戴。斬り伏せた匹数分、いいえ、もつとたくさんの優秀なオークを孕み育んで頂戴」

「……な、に言ってる……る、のよ……っ」

——オークを孕む？ 育てる？ 誰が——私が？

「言葉通りよ。貴女とオークを交配させて、より優秀なオークを産んでもらう。そうして私は使える手駒を得るの。そのために貴女をここへ導いた」

ついに異に嵌めた理由を語り出したミラの口元が醜悪に歪む。その醜い本性を体現したような悪辣な嘲笑が、いつそうアイリの癪に障った。

「人とオークで交配ですって!? そんなのっ」

「許されないって？ ふふ、じきに考えが変わるわよ。その孕み頃の腰の奥へと、オークチンポをぶち込まれれば、きっと」

「……っ！ 頭わいてるわよお前っ……」

豚鬼との交配。人の道を外れた「外法」を嬉々として語るミラに嫌悪が湧き起こるのと同時に、囀いを狭めてくる周囲のオークどもの股間へと、自然とアイリの目が向いた。粗末な腰みのを押し上げて、どのオークも一様に膨らませた股間の逸物——人間の成人男性の腕ほどもありそうな生殖器官を屹立させている。

「ひっ………！」

「ひっ………ですって。可愛いわあ。まさか、そんななりしてる割に処女だったりするのかしらあ」

「う、うるさい卑怯者！ 正々堂々勝負しろ！」

「お馬鹿さん。私達は貴女の家族のように正義を尊ぶ騎士じゃないのよ」

——ばちゃん！

心底笑しげに高笑いしたミラが指を鳴らすと、アイリの前方に位置していた一匹のオークが頷く。

「——え」

一瞬、状況を理解する事を脳が拒否した。不用意に接近してきたように見えたオークの胴目掛け、これまでと同じ調子で振り落とした鎌の刃を、急加速でかわされた——その事を視界に捉えてはいたが、信じたくない。事実と認めてしまえば、己の苦境をも自覚せざるを得なくなるから。

「このっ……！」

再度手にした鎌を振りないで、豚鬼の囀いを突破しようと試みる。その刃先を容易くかわして、これまでとまるで違う俊敏さを見せつけた豚鬼どもが、我先にとアイリの下へ殺到した。

「手加減なしだと貴女程度、相手にならないわよ。さ、始めるのよ、私の可愛い豚ちゃん達」

「くっ！ 放せこのっ……汚い手で触れるな！」

瞬く間に四肢が丸太の如き豪腕に捕まえられ、力づくで拘束されてしまう。身じろぎすれば咎めるように掴む剛腕の圧が高まり、痛めつけられる。取り落とした鎌は豚足に踏み潰され、砕かれてしまった。「つう………いい加減にしなさいよ、この三流魔導師！ ……やつ!? ちょ、ちよつと、やめっ……」

追い込まれた現状を認めたくないがため、激情を露わとし悪態をつく。その直後に、報いは訪れた。

——パキンッ！

押し並べてがさつな性分のはずのオークらしからぬ加減ぶりで、左胸を覆う鎧部分が打ち壊され、右側は器用に爪を引っかけくり上げられた。繊細な手つきで、剥き出したばかりの両乳房が捏ねられる。そうして改めて「乳を晒している」事実を強く自覚させられたアイリの頬が、引き攣りながら羞恥の色に染まった。

「やつ、ん、っひ、ンン……ううっ！」

悔しげに嚙んだ唇は声を発すまいと躍起になっていたが、女体の機微を知り尽くしているが如き豚鬼の手指に翻弄され、どうしても甘い響きがぐぐもつた声音に混入する。今も乳首をつままれ、痺れるような刺激に背と尻を震わせてしまっていた。

（嫌っ！ 豚鬼相手に感じたく、ないいいっ！）

得物の鎌はすでになく、四肢も拘束され動かせない状況下。けれどまだ、動ける部位は、抵抗の余地は残されている。

唯一自由になる頭を振つて、乳を弄くる豚鬼の頭髪一本ない禿頭へと齒を立てた。慄きたじろぎ身を放してくれば、自由になった右手で活路が開けるかもしれない。

淡い期待に契つて噛みついた歯先に、予想外の硬い感触。豚の名を冠するだけにぶよついた肉体部分からは想像もできないほどに硬い頭皮に、淡い抵抗は食ひ入る事もできず跳ね返されてしまつた。

高みの見物に興じるミラの手指がクイツと動いて何がしか合図をした直後。囁みつかれたのとは別の豚鬼がアイリの髪——結わえたテール部分を——つかんで引き上げる。あつさりオークの頭部から引き剥がされた口腔に溜まっていた唾液が尾を引き漏れた。（やつぱりアイツが……ミラがこの豚鬼どもを操つてゐるんだ……！）

「ちゃんと感じてお股を濡らしておかないや、オクチンポ突っ込まれた時に痛い思いするだけよ？」

「誰がっ！ 私はオークの母胎になんかならないっ」

底知れぬミラの艶めいた微笑を見ていると、怒りと悔しさで頭が混濁し、対応を講じる事すらままならない。そうこうしている内にまたもミラからの指示が飛び、一段階強められた拘束の中で、左右の乳房にそれぞれ別の豚鬼の頭がすり寄ってきた。

「良い子豚を育むためにも母乳は大事よ。出が良くなるように、よく吸いしゃぶってもらいなさい」

「んばあつ……べちよつ、れぢゅううううつ」

右乳に吸いついた舌は乳肉を食らい尽くすつもり
 なのではないかと思うほどの勢いで吸引を始め、左
 乳にむしゃぶりついた舌は舐めるような動きで。どち
 らもミラの命じたと通りに大量の唾液を含み、ツンと
 上向く美乳にすり込んでくる。

「ふぐつ、う、うう！ やめつ、ろ……汚いよだれ
すりつけるなアツ！ 私は、私はあ……！」

「高貴な家のご令嬢でもなければ、ハンターでもないわ。オークの母胎。そのための優秀な血肉ではないの。心なんて要らないのよ」

いちいち感情を逆撫でするミラの発言を、浴びせられるに任せなければならぬ口惜しさ。それに加えて血の滲むほど食い締めた唇の内に押し殺される想いが、もう一つ。

「オッパイを愛されると、身体の芯から火照ってくるでしょう？ ふふ、子を育む準備を整えてるのよ。女の身体って、欲深で難儀よねえ」

同じ女だから、わかるわよ。そう付け加えたミラが艶めいた吐息を漏らす。

「そんなつ、わけ……なつ、あひいつ！」

心で懸命に拒んでみたところで、彼女の言葉通りだった。形が変わるほど吸い引つ張られた右胸が、切なく呻く。隙間なく舐られまぶされた唾液を滴らせる左胸は、乳首を舌先につねられ、より痛切な疼きに悶え泣かされていて。触れられてもないのに切なさを溜め始めた股の付け根がもどかしさに哭く。「ひつ！ あ、ああ、やあ……嫌つ、だ、ああ……ひんんつ！ 気持ち……悪い……」

膝が情けなく笑い出し、豚鬼どもの支えなくしては立つてゐる事もできそうにない。拒絶の言葉と裏

腹に、無意識の内に左右前後にくねり始めた少女の腰つきに無数のオークの視線が集中する。そんなさなか、ごくわずかな布に覆われるだけの臀部が、真後ろのオークの剥き出しの生殖器に触れ、擦れ合つてしまつた。

「安産型で、骨盤も良い形。良い子が産めそうないお尻ね。本当、母胎になるために生まれてきたよ
うなはしたない身体だわ」

「誰が……っ、痛っ！」

またミラの指示が飛び、テールを引かれて彼女の方を強制的に向かされる。不遜な態度で下卑た視線を寄こす女魔導師への憤怒は止め処なく湧き続けそれを発散できぬ苛立ちが、胸に生じた肉悦と絡み混ざって、焦れと化した。

「これから末永くお世話になる種付けチンポよ。お尻でも愛でておあげなさいな」

「ふざけないでっ！ これ以上変な指令出すとタダじゃつ、ひ……やあアッ」

ズリリ、密着してきた豚鬼の剛直が、弾力ある少女の尻肉を押し潰しながら、その谷間に挟まったビグビグと猛々しく脈打つ肉の棒は粘着質な熱を放散し続けていて、それがそっくりそのままアイリの尻に伝導する。生殖欲求の強さを具現化したかの如き鼓動と熱の勢い、執拗ぶりに、本能から慄き、新米ハンターの全身が強張った。

（こんな太いの……入るわけない。物理的にも生理的にも無理！無理に突っ込まれたら裂ける……）

尻の谷間で息づく男性器の幹には無数のイボ状突起がびっしりと備わっている。切っ先は凶悪な角度でエラを張っていた。アイリにはそれが、力ずくで女の穴をこじ開けるための鉤爪であるようにしか思えなかった。突拍子もなくも思えるこの想像は多分事実と相違ないのだ。少女はほくそ笑む年増魔導師の嘲笑を見、否応なく確信を得てしまう。

「やあだ、もう乳首ピンピン……♪ 嫌だ嫌だと
言いながら、感じちゃってるのねえ♪」

「……う、嘘。私は感じてなんかあひッツ！」
左右それぞれタイミングをずらしたオークの舌と
指が、執拗に乳首を捏ねくり回し、アイリの発言を
妨げた。不規則な攻勢になすすべく喘がされ、戦
いた背筋と痺れた腰とがひとりでに震えだす。

「やあ……お尻の谷間でビクビクしてる……！」

刺激を受けたオークペニスが膨張して、硬く反つ
た幹を擦りつけるペースも一段と速くなる。摩擦熱
に痺れた尻肉が蕩かされる——熱に浮かされ突拍子
もない錯覚に囚われた少女の唇のタガが緩みだし。

「ああ、はっ、ひ、いつ、うあ……んうっ！」

糸引くよだれと、甘さたつぷりの嬌声とが、半開
きの口腔より吹き漏れた。

「さ、お前達も空いてる場所に行つて、たつぷり愛
でおあげ」

ミラの指令に従つて、見ていただけだったオーク
どもが迫り来る。頬に、うなじ。鎖骨、二の腕、結
わえた髪の毛束。所構わず舌這わせ、唾液と吐息を
すり込んでくる醜悪な面の群れ。

「やつ……！ は、離れろ！ 離れろ離れろオッ！
臭い息吹きかけるなあ、汚らわしい……っ！」

身体は自然の反応で快感を得ても、心は相手の嫌
悪を催す外見と力ずくの状況に顕著な忌避を示し、
抵抗し続けていた。

「素直に食われちゃえばいいのに」

巢にかかった獲物の無駄な抵抗を嘲笑う女郎蜘蛛
の如く。酷薄な顔をしたミラが鼻で笑う。

「くう……今の内に精々勝ち誇っているといいわ
後で必ず……必ず命乞いさせてやるから！」

異種との交わりという常識外の行為に対する恐怖
心を押し殺すためにも、怒りを内に孕み続ける必要
があった。

「このままじゃ埒があかないから……少し、感じや
すく弄つてあげるわね♪」

「うう……あ……っ。はあ？ 何言つて……」

今度は一体何をしでかすつもりなのだろう。警戒
と怨嗟を絶やさぬようにしつ、身を這う数多の舌
の感触に耐え忍び見上げた先で——パチリ。またも
ミラの指が打ち鳴らされるのを、自然と——髪を引
き立てられるがまま見納める。

直後にまたベロリ。胸先と、これまで見逃されて
きた下半身。内腿付近を舐められた。

「ひひッツ!! イひやあひひひッツ!!」

途端、これまでにない苛烈な衝撃が——電撃のよ
うに鋭い肉の悦楽衝動が少女の身を奔り抜ける。ま
ず真つ先に腰の芯、次いで背から脳天に、終いに四
肢末端へと至り、無様な痙攣を引き起こす。

「豚鬼の乱暴な子作りピストンにも耐えられるよう、
感度を上げてあげたから。安心して貰えなさいね」

「あ、上げた、つて、どうやっ……ひやうっ！ あ
ひッツああアアッ！」

とうとう股間にまでオークの舌が張り付き、薄布
越しの割れ目を下から上に舐り上げられた。心地悪
いはずのそれが酷く強烈な肉悦衝動となつて、腰の
芯へと延々突き抜ける。

「んひやあつ、ひやつ、ああう……こん、なの、
やつ、つ、強すぎひひッ……」

先ほどまでと同様の強さで捏ねられた乳首が、自
分でも信じられぬほど硬く尖り立っていた。採み込
まれた乳房全体が火照りに見舞われ、異常発汗し始
める。指を這わされただけで内腿が歓喜に震え、声
に混じる甘みは一足飛びに膨張し。シヨーツには、
オークの唾液とはまた別の甘酸っぱい汁が染み出し
ていた。

「オークを操るのと同じ原理だね。私の目を見つめ
た瞬間に、貴女に暗示をかけてあげたの。貴女の身

体はもう、私の意のままとなつたのよ」

淡々と種明かしをしていく女魔導師に、怨嗟の言
葉を吐きつける余裕すら、少女にはすでになく。

「初めからこうしても良かったのだけれど。あんま
りにもアイリお嬢様の抗う姿がいとけなかったもの
だから、つい長引かせてしまったわ……♪」

（馬鹿に……してえええええっ！）

憤怒は絶えず湧き出し続けている。——が、それ
に倍するスピードで、快楽に身が焦がされてゆく。
「さ、お次はその邪魔なシヨーツを剥いて。じかに
孕み穴をほじくつてもらうのよ」

「グフッ、グフッ……おオオオオオ！」

「ひつ、やめ、なさい……来るな、触るなあつ……
嫌……絶対……ダメエエエ……ッ！」

よだれまみれにされ濡れ光り、たわまされて疼き
に悶える胸の内、けたたましく警鐘が鳴る。本能
からの怯えを少女の瞳に見て取ったミラの指先が再
度打ち鳴らされた瞬間。オークの手によりいともた
やすく、薄布は破り取られてしまった。

「自分の指で開いて見せるのよ。これから子豚を孕
む穴の奥の奥まで、きっちり検分してあげるから」

「嫌っ！ やだ、やつ……止まれ、止まってよお！」

憎い女の指示に従い動き出した己の指先を、ただ
恨めしげに見つめる事しかできない。射殺す勢いの
視線を向けたその先で、自らの指が濡れそぼつた陰
唇をつまみ開くのを見届けて。限度を超えた怒りと
口惜しさが涙となつてこぼれ出た。

「んふふ。さすがにトロットロだわねえ。濡れ濡れ
マ○コの甘酸っぱい香りが、ここまで匂つてきそう」

「うう……見るなあ……」

明け透けなミラの視線に加えて、獣欲に満ち満ち
た数多の豚鬼の熱視線に晒されて、余計に股肉の火
照りが増してゆく。あるじの意思に反してヒクつく
肉の穴の奥から、止め処もなく蜜が染み出てくる。

最終話

肉欲に堕ちる妖狐

気高き妖狐は悦獄に堕つ

あら い ゆう
小説 新居佑
NOVEL sian
挿絵
ILLUSTRATION

恋人と憎き男の狭間で……。
気高き牝狐は悦獄に堕つ！



登場人物紹介



綾辻藤香

最強の妖狐として君臨していた妖狐が転生した姿。現世では綾辻家の当主となり、前世と同様に圧倒的な力を持つ。

村里章伯

綾辻家当主だった綾辻章伯が現代に転生した少年。現世では藤香のお側付き兼恋人として支える。

法限

妖魔側についた陰陽師。前世の頃から藤香に邪な思いを抱いており、いまだにつけ狙う。

前号までのあらすじ

法限に敗北した藤香は、街に連れられて行かれ、触手スーツとパイプ責めにより大衆の前で痴態を晒す。さらに市民たちにまで犯されて発情した彼女は、自らを牝狐と認めて盛大にイキ狂うのだった。その姿を愛する恋人に見られているとも知らずに……。

「あつ、はあつ！ あんつ……おおつ！ いいわよ章伯っ！ んああつ、そこ……気持ちいいわあつ！」

「こ、こうかな藤香？ もっと速く突くよ！ んんつ、んああつ！」

退魔師の能力を発揮するときは、前世である九尾の力を宿した姿へと変身する藤香。だが今は、ピッチリとしたタイトなミニスカートを穿いた、うら若い人間の姿のままだ。

穏やかな郊外にそびえる和風屋敷。広大な庭園と、古き良き和の趣を備えた屋敷は、日本屈指の退魔師の名家である綾辻家の所有する屋敷である。

そこは、突如大量に発生し始めた妖魔による災害から人々を守る、退魔師一族の屋敷として、近隣の住人からは、丁寧に敬われている場所だ。

時刻はまだ陽も高い、平日の昼下がり。

十以上の大広間を持つ綾辻の屋敷の一部屋で、千

そして彼女が跨がり、ポリュームのあるお尻を下に大きく振りながら、獣のように牝の快楽を食っている相手が、現在では綾辻の下人であり、千年の昔から愛を誓いあつた仲である少年、章伯だ。

藤香は、高級な畳の上に寝そべった章伯の勃起しきつた巨根に、はしたなく跨がり、人目のないことをいいことに、まるで痴女のように腰を振りたくっている。

「ほおんんつ、ああつ！ んっひいいいっつ！！」

ズチュンツツ！ ズチュチュ！ パンパンツツ！！

腰までずり上がったボディコンミニスカートの下で露わになっている、藤香の熟れた牝の肉壺は、とつくの昔にムワツと熱を帯びた大量の本気汁でずぶ濡れになっている。

薄く生えそろうたエロティックな陰毛を備える、柔らかそうな女肉の唇は、パツクリと大きく淫靡な華を開花させている。

常人を上回る章伯の極太ペニスを、根元からおいしそうに咥えこみ、ズチュズチュといやらしい水音を立てながら、上下左右にグラインドする様は、発情した牝そのものだ。

「はあはあつ、イイツ、気持ちいいわよ、章伯のチンポおつ！ もっと突いて、突きなさいっ！ 私の発情マンコを満足させて。おほおほおんんつ！」

子宮の奥から放たれるような嬌声は、太く深い艶めかしいモノで、藤香が我知らず官能の奔流に溺れていることを示していた。

「すごい締め付けだ。藤香、感じてくれているんだね？ 僕のチンポで藤香が……ああつ！ まだ締まる……っ。藤香のマンコが……僕のチンポを、搾り取つて……っ！」

日が経てば経つほど、ますます女……というより、牝の魅力を増していく藤香のダイナマイトボディに思い切り跨がられている章伯が、折れんばかり

にギチギチと肉棒を締め付けてくる、藤香の肉壺の収縮に苦悶の声をあげる。

「おおんつ、ごめんなさい章伯っ。でも私のマンコが勝手にチンポ締めるの……っ。ほおんんつ、あいつに改造された私の肉マンコ、すっごく淫乱になっちゃてるのほおおつ！！」

ズンズンツツ！ とそのメリハリのあるグラマラスな女体を上下させながら、藤香の嬌声がより野太いものへと変わっていく。

肉棒と蜜壺の接合点から、ブシュウツツ！ とまるで熱湯のようにゆだつた本気汁が、ムワムワと噴出される。

藤香は着ていたピチピチのシャツのボタンを開け、扇情的なブラジャーの下に隠された、自身の爆乳を両手で握り潰すように揉み込んでいく。

「んおおつ！ たまにないっ！ 勃起乳首シコシコつてえつ、おっぱい揉むのが……ああつ、章伯あ、すごいわあつ。章伯とのセックススうっ、イイわよおつ！」

長く美しいブロンドの髪を振り乱しながら、藤香は汗だくの美貌で、艶やかに微笑んだ。

しかしその官能は、憎き陰陽師・法限によって施された肉体的、精神的な牝豚調教の結果でもあった。

「ぼ、僕もだよ藤香。ああつ、き、きついつ！ だめだ、藤香っ！ ばくも……もうっつ！」

ジュクジュクに濡れ、熱れきつた魅惑の膣壁が、さらなる快楽を求めて、ギギユウツツ！ と激しい収縮を強めていく。

まるで食欲な妖花に吞みこまれたかのような、章伯の男根が、敏感な雁首はもとより、包皮のめくれた剛直の快感神経すべてを、極小のブツブツした肉ビラに刺激される。

愛する人の男根を気持ちよくできる、それは恋を知らなかった九尾の妖狐の生まれ変わりである藤香

には、ひどく幸せなことだった。しかし……。

「え……うそつ、もう……なのっ!? ああつ……初

めて章伯とした時はあんなに満足できたのに……っ。身体がもつと気持ちよくしてほしいって疼いているわもうちょつと頑張つて章伯っ、お願い……こんなんじや私、全然物足りないのよおつ!!」

肉体改造された藤香の牝欲は、章伯の精力をはるかに上回るほど食欲になっていた。愛する少年が気持ちよくなつてくれるのはうれしいが、藤香自身は反対にたまらない肉欲の焦燥感に駆られ続けている。しかしその事実を章伯に告げることは、少年の男としてのプライドを傷つけることになる。それだけは恋する乙女として、口にしたいくはなかった。

「……そ、そう章伯、私もあなたのチンポでイキそうよつ!! は、ああつ……くるくるくるうううっ!!」

藤香は物足りなさで沸騰しそんな本音を隠し、腰がカクカク小刻みに動きながら、自らが一番感じるGスポット近辺を、章伯の膨れ上がった亀頭で激しく擦らせる。

それは巨根と若さに任せた単調な突き込みに満足しきれない自身の官能を、章伯に気づかれぬよう、早く限界まで押し上げる行為でもあった。

「あああつ、もうダメだつ!! 出すよ藤香つ!! 君の中に、僕の精子を……っ!! うおおおつ!!」

ドビュオオオオツツ!! ドブドブウウツツ!!

見初めた女に種付けするという、牡の本能に従つて、章伯の男根が、大量の愛蜜でヌメつく女穴の最奥、子宮の入り口にゴツンツと当たり、大量の牡汁をぶちまける。

「おおっひいひいっ!! きたあつ、章伯のザーメンっ!! ああつ、イグイグツツツ!! 私イクわ、章伯っ!! あなたのチンポでイクウウウウツツ!!」

藤香の気高いプライドを現すような騎乗位のまま、

女退魔師の豊満な肉体が、牝の絶頂アクメを決めて、大きく跳ねる。

背筋を折れんばかりに仰け反らせ、かつてとは比較にならない感度をもつように、淫靡な肉体改造を施された女体が、最愛の人の中出し射精に昇天する。「おおおおつ、ほおおんつ……おつ、おおつ……ひ、ひぐううつ!!」

（な、なんとか章伯と一緒にイケたわ……。ああ、でも章伯のチンポ、どんどん小さくなって……）

類まれな美貌と肉感的なボディライン、それに人間離れした妖狐の艶やかさを併せ持つ至極の美人退魔師が、舌を出しながら、派手なアクメ顔を見せつける。

背筋全部を痙攣させ、憎き陰陽師に改造された乳房からはプシュブシュッ!! と何筋もの淫乱母乳を噴出している。

しかし自分で無理に押し上げた絶頂では、女体が焦がす肉欲を満足させきけることは、まるでできない。

「ああ、はああ……よかつたよ藤香。ど、どう? 身体の方は満足した?」

藤香が深い絶頂の余韻から覚めた頃、あれほど膨らんでいた立派な男根を、すっかり萎えさせた章伯が問いかける。

「ああ。え、ええ……ひとまず落ち着いたわ。ありがとう、章伯……はあんつ、あ、くううつ」

そう言つて、シャツのボタンを嵌めて、スカートの下着を穿きなのおす藤香。しかしその美貌はいまだ紅潮したままで、唇からは熱っぽい甘い吐息が漏れ出ている。

「ごめんなさい……章伯。私が……その、快楽に負けてしまったせいで、あなたまでこんな目に……」身を整えた藤香が、いわゆる牡の不应期に入っている章伯に、申し訳なさそうに言う。

数週間前、法限によって市内で晒し者にされた藤

香は、章伯が見ているのも知らずに、悪の陰陽師が仕掛けた快楽に負けた。

退魔師として守るべき市民たちとの乱交に喜悅し、自らを変態の妖狐であると認めた藤香は、最強の妖狐退魔師という高慢なプライドをスタスタにされ、法限の目的である殺生石製造の賛として、章伯とともに命を奪われるところまで墮とされかけた。

（あのとき他の退魔師たちが駆けつけてくれなければ……私と章伯は……っ）

退魔師の名門・綾辻家の当主である藤香を助けに来た退魔師たちによって、法限は一時退けられ、どうにか難を逃れることはできた。

しかし法限にこれ以上の力を与えることを恐れた、綾辻と並ぶ他の名家たちの判断で、現在は結界に守られた、屋敷の中だけの生活を強いられる。

それは囚われの洞窟内で、藤香と同様、法限に殺生石を奪われた章伯も同様だった。

「仕方ないよ……。僕の覚醒がもう少し早ければ、藤香をこんな目には……。でも僕たちも落ち込んでばかりじゃだめだ。藤香がちゃんと回復したら、法限は僕たちが倒す。そう二人で決めたんだから」

他の名家が下したこの措置に不満がないわけはないが、藤香の身体は、常人ならばすでに何十回も魔人になっておかしくない量の魔媚薬を注入されている。常時発情状態にあるこの身体は早く完治させることが、まず最優先だ。

そうしなければ、この街、ひいては世界中を支配せんと、今なお暗躍する法限を、自分たちの手で倒すことができない。

「ありがとう、章伯。そうね、法限を止められなかったのは、元はいえは私たちのせい。必ず私たちが決着をつけましょう」

莫大な妖力の塊であり、千年前、瀕死の章伯の命を救い、藤香たちを現代に転生させた殺生石。それ

らを藤香たちの体内から奪っただけでなく、藤香たちの命を新たな石の原料にせんと企む陰陽師の悪事は、屋敷に軟禁されていても伝わってくる。
 「今度こそ負けないわっ！ 私たちが絶対にあいつを……くうっ、あ……はあっ、んんっ！」
 藤香は章伯を見ながら、そう決意を固める。しかし同時に、いまだ身体を渦巻く熱い牝の欲求を、どうにか章伯に悟られぬよう、必死に唇を噛みながら抑えつけていた。
 「ん？ 藤香、どうしたの？ どこか痛む？」
 「い、いえ……なんでもないわ。大丈夫よ。章伯がセックスしてくれたおかげで、身体の疼きもないわ。下人のくせに、当主様の心配なんかしないでもないわよ、バカ章伯」
 そう年上ぶりながら、心配そうな章伯の童顔の額を、細い指でピンつとこづく。
 「章伯には言えないわ。あ、あなたのセックスじゃ、全然満足できないなんて……ああ。そんなこと言えるわけじゃないじゃないっ！」
 基本的に温厚で奥手な章伯には、肉体改造をされた藤香の内に渦巻く牝欲の深さは、絶対にわからないだろうし、察することも無理だろう。
 いつともう終わりなのかと、ザーメンまみれの子宮がジンジンと身体の内側からせつてつてくるのだ。
 「章伯は頑張ってくれてるわ……。私を愛してくれてもいる。でも、まだオマンコ、熱くてたまらないのよおっ！」
 章伯はつい最近、童貞を失ったばかりでテクニクがないのも、元々性に積極的でないことも、重々承知している。
 けれど理性ではどうにもできない肉欲の疼きに、藤香は屋敷に閉じ込められてからというもの、毎日ずつと欲求のはけ口を探している。
 「はああ、チンポお。チンポほしいわあ。誰かこ

の疼きを満たして……っ。ダメよ……。私には章伯のチンポだけで、じゅう、ぶん……ううっ」
 章伯を愛しているから、こんなことは話せない。こんな自分を愛してくれる章伯を傷つけてしまう。
 「ね、ねえ……藤香……」
 「え……な、なに章伯？」
 ふいに章伯に声をかけられ、どうにか平静を装う。「僕、法限のせいと洞窟に囚われていたときに藤香と離れて……。そして力を失った君と一緒に何週間も過ごしてわかったんだ。ちよつと恥ずかしいけど、その……聞いてくれるかな？」
 そう告げる章伯の表情は、ひどく照れくさそうであだでさえ幼い顔立ちが、さらに幼く見えてしまう。しかしその雰囲気は真剣そのもので、藤香は章伯の瞳から、目をそらすことはできなかった。
 「……僕はきみをずっと守っていたいんだ、藤香。下人と当主さまじゃ格好がつかないかもしれないって、ずっと思ってきたけど、僕はやっぱりきみを手放したくない」
 「あ、章伯……。それって……っ」
 「うん、僕はきみを……綾辻藤香と結婚したい。きみが妖狐の生まれ変わりってことは、僕が一番知っているよ。なにせ僕は千年も前から、きみと添い遂げたかったんだからね。二人で幸せになろう、藤香」
 「あき、たか……。ああ、私……っ」
 藤香の瞳に、うつすらと涙が浮かんだ。
 章伯の前で、快樂欲しさに他の男たちにペニスをねだつたのを見ていたはずなのに……。
 自慢の絶大な妖力も殺生石ごと奪われ、今はただ当主の名前を冠しているだけにすぎない自分に、求婚してくるなんて……。
 胸の熱い高鳴りが、キュウっとなつて、胸が張り裂けそうになる。そして藤香は、微笑みながら唇を開いた。

「……私も、章伯。私もあなたと結婚したい。章伯……ああ、章伯っつっ！」
 「うわっ、藤香……っ!? ああ……っ」
 藤香は涙を浮かべたまま、章伯に抱きついた。その意外と小柄な肩を、章伯もそつと抱きしめ返してくれる。
 「私、なんて馬鹿なことを考えていたの？ 章伯はこんなにも私を想ってくれていたのに……っ」
 強力な結界を張られた屋敷に隔離されていることからわかるように、先日、守るべき市民の前で痴態を晒した自分……かつて妖狐であった藤香に對し、助けはしてくれたものの、他の退魔師たちは冷淡だった。
 そんな自分に対する章伯のプロポーズに、たまらないうれしさと同時に、そんな章伯へ欲求不満を感じていた恥ずかしさが、胸の中で混ざりあう。そして少年の告白に、真剣に答えなければと強く思う。
 「ありがとう、章伯。……それでね、私からあなたにも伝えたいことがあるの……」
 「なんだい、藤香？」
 藤香はこの身体の疼きのことを、章伯に話そうと思った。もう章伯との間に、隠し事は必要ない。どんな苦難も二人で乗り越えていけるはずだ。
 「……っ!? こ、この気配はっ!? まさかっ!?」
 ふいに屋敷全体を、邪悪な気配が包み込んだ。
 藤香たちを守るために……余計なことをしないように、屋敷には強力な結界が張られてあるはずだが、それを打ち破るほどの敵が侵入している。
 「久しいな。二人とも……」
 「……っ！ やつぱりあなたね。法限っつ！」
 聞きなれた声とともに、陰陽師の衣服を身にまとった仇敵・法限が扉を開いて、部屋に入ってきた。その身体から発する気の強さは、藤香たちの殺生石を取り込んだために、強力無比な圧力を放ち、藤

香と章伯を威圧する。

「くっ……仕方ないわつ。妖狐転身っ!」

突然の宿敵の襲来に、藤香は回復しきつていない力を振り絞り、瞬時に妖狐の姿へと変身する。

肉感的な女体に、びったりと張り付いた扇情的な退魔スーツをまとい、頭にふっさりとした獣耳、ミニスカートからのぞく、ブリッとしたお尻からは九つの尻尾が現れる。

「ふん、殺生石を奪うだけ奪っておいて……。今さら私たちになにか用かしら法限っ!」

（それにしても屋敷の結界は名門退魔師たちが総力を決めた、かつての私でも入れないものはず……。くっ、法限の力がそこまでパワーアップしているというの!!）

藤香は愛刀を構え、章伯を背後に隠すように立つ。

「と、藤香!? ダメだよつ、きみの力はまだ……」

「大丈夫よ、章伯。愛する夫の傍らに立つのが、妻としての私の役目……。どちらが一方を守るわけじゃない。一緒に戦いましよう、章伯っ!」

「う、うんつ。藤香っ!」

つい先ほど、永遠の誓いを果たした藤香と章伯は、互いが互いを守るように肩を並べ、余裕の笑みを浮かべる法限と対峙する。

「ふふふ、私はお前たちと戦うためにきたのではない。九尾の……いや、綾辻藤香。お前を私の妻とするために来たのだからな」

「なっ、なに言ってる……っつ!! ああああっつ!!」

法限の宣言とともに、現れた無数の触手が藤香の身体に絡みつき、章伯をはね飛ばす。

妖力の大半を奪われた藤香の力では、反抗することすらままならず、ムチムチした肢体に巻き付いた触手が、ギチギチとエロティックな音を立てながら、妖狐姿の藤香を締め上げていく。

壁にまで吹き飛ばされた章伯は、倒れた状態から両手をついて立ち上がろうとする途中の、無様な四つんばいの姿のまま、法限の強力な呪術によって動けなくされてしまう。

「と、藤香……っ!」

「章伯っ……! うく、法限っ。さっきのはどういうことなの!? 私があなたの妻になんて……っ!」

触手によって法限の隣まで運ばれた藤香は、ニヤつく陰陽師をきつく睨みつけながら、問いかけた。

「ふふ、単純なことだ。私に抵抗してきた退魔師どもをこごとく返り討ちにしてやったら、やつらの上役が、九尾の妖狐であるお前の身体と、歴史も権力もある綾辻の名をやるから、自分たちだけは見逃してくれと言ってきたんだよ。ご丁寧に結界まで解いてな」

「なっ!? そんな……当主の私を……っ!」

法限に敗北し、市民たちの前で醜態を晒したと言っても、藤香は退魔師の名門・綾辻家の現当主だ。

藤香自身は、政治のことに興味はなかったが、何百年も日本を陰から支えてきた名門の力は、国家に對しても十分な発言力をもっている。

それこそ悪の陰陽師である法限に渡すことで、己の保身を図るなんて……。

「所詮お前は、人間たちからみればただの牝狐だったということだ。私も初めはお前に復讐し、殺して新しい殺生石を作ろうと考えていたが、妻にするのも悪くない。私に絶対の忠誠を誓う最凶の牝妖狐として、一生飼いつけるのな」

そう笑う法限に、藤香の背筋がゾゾッとぞわめく。

「くっ、たとえ他の退魔師に疎まれても、私は章伯を愛しているわ! 誰がお前の妻になんかなるものですかっ!」

「と、藤香……っ。ありがとう……っ」

情けなく身動きの取れない章伯が、藤香の決意に

感謝の言葉を口にすると、それがうれしい。

そうだ。たとえ周囲に裏切られようと、千年の時を経てようやく結ばれた、愛する人との絆を捨て、こんな下衆な相手になびくなどできるはずがない。（なにが牝妖狐よっ! くっ、私は章伯のものなのっ! 絶対に章伯を守ってみせるっ!）

藤香はそう心に誓いながら、美しくも鋭い瞳で、キッと法限を見据えた。

奪われた殺生石の波動を、法限の中に確かに感じる。触手で自分を捕えている一瞬の隙について、男の体内にありつただけの妖力を送り込み、殺生石を暴走させることができればあるいは……。

「くくく、私の媚薬肉体改造を受けたお前が、人間の男とのセックスごときで、牝欲を満足させられるわけがない。本当はココに欲しくてたまらないのだろう? ええっ?」

「なっ、いや……やめてっつ! く、ううっつ」

法限は、身動きの取れない藤香のタイトスカートにグイッと押し上げ、大量の愛液でグシヨグシヨになった股間を露わにさせる。

エロティックなお尻と股間のラインを覆うショーツからは、ボタリボタリとねっとりとした半透明の本気汁がこぼれ落ち、畳に淫靡な水たまりを作っている。

さらに法限は、その淫らなショーツすら剥ぎ取って、藤香の……決して少年に見せたくない淫靡な肉ピラが、隠すことなくさらけ出される。

「藤香……そ、それ……っ」

「い、言わないで章伯……っ! 見ないでえっつ! く、ううっ……ああ……っ」

恋する人の眼前に晒された藤香の女芯は、貞淑そうにびったりと閉じてはいなかった。

ついさっき章伯とセックスし、情欲を発散させ、落ち着いているはずの女壺は、ぐっちょりと愛液を

滲ませたその花びらを、濃い牝の臭いを放ちながら、桃色の肉花弁を満開に咲き誇らせている。

「く、うううっ……っ」

自分が章伯とのセックスで満足してなどない事実を、法限と、なにより章伯に見せつけられ、気丈だった藤香の顔が、羞恥と屈辱で真っ赤に染まる。

「はははっ、なんてエロいマンコなんだ!? お前たちが屋敷で散々やりまくっていることは知っているぞ。なのにその有様とはな」

法限は、着ていた法衣の下半身の部分を脱ぎ払うと、自らの肉棒を藤香に向けて見せつける。

「な……っ。それ、は……っ」

驚いた声を発したのは章伯の方だった。藤香は声すら出せず、現れた男の逸物にゴクリと思わず生唾を呑みこんだ。

その剛直は、藤香の想像をはるかに超える圧倒的な存在感を誇って、いきり立っていた。

大きさはまるで馬のように太く、そして長さもゆうに三十センチはある。その固く雄々しい肉竿には、性欲の昂りで充血しきった血管が、幾本もビキビキと浮かび上がっている。

砲弾のように大きく広がった亀頭には、毒々しくも大きいエラが巡らされている。先端からはネットリとした牝の先走り汁が垂れ落ちていた。

「な、なんて大きくてたくましいチンポなの? あ、章伯のよりも全然すごいわ……っ。そ、それに……」

藤香の満たされない牝欲の気を惹いたのは、その肉棒の大きさだけではない。人の腕ほどはあろうかという法限の極太ペニスの竿の部分には、無数のイボが張り出していた。

もしその牡棒が、肉壺へと挿入されれば、どれほどの快感を女穴にもたらしてくれるか……。藤香は無意識にそれを思い浮かべ、股間が熱くなるのを感じてしまう。

「ふふふ、洞窟で小僧に吹き飛ばされた私のモノを、殺生石の力で強化、再生したものだ。前に犯した退魔師の女などは、ちよつと突いただけで快感に狂ってしまったがな。九尾の藤香よ? お前の淫乱マンコにはちよつどよいモノだと思ふのだからな」

言った法限は触手を操作し、藤香の尻を自らの前に向けさせる。両腕を高く上に縛り上げられ、スカートがめくれた下半身を仇敵に突き出している屈辱の姿勢だ。

それどころか、このままでは、法限に犯される姿を……そのときの自分の顔を、隠しきれない身体的喜悦を、最愛と誓った章伯に存分に見せつけてしまいう体勢をとらされている。

「いやっつ! 放しなさいっつ、このっ! くううううっ!!」

藤香が身体を必死によじつて、せめて章伯の視界から可能な限り、身体を隠そうと試みる。しかし、妖力を奪われた状態では、それは淫らな獣女のストリップショーにしか見えない。

「くくく、なにを嫌がるのだ? 私のことを嫌っているなら……。そのガキを心の底から愛しているならば、犯され、その快楽に打ち勝つてみせてこそ、その愛情を証明できるのではないか?」

「く、あ……藤香……っ。ば、僕は信じてるから……っ。君のことを、誰よりも愛しているから……」

畳に跪いている章伯の瞳は、愛する女を助けられない現実の悔しさを露わにしながらも、言葉通り藤香のことを信じきっていた。

あんな男に自らが愛した藤香が屈するわけではない。法限がいい気になっっている間に、なにかこの機を脱する術を整えてみせる!

その瞳はそう語っているように見えた。
(章伯……ああつ、章伯……ああつ)

藤香は、少年のその純粋な心に、胸に熱いモノを感じた。これが千年間求め続けていた少年との強い絆のつながりだ。

それがもし法限に殺生石を奪われる前の藤香なら、大量の媚薬を打ちこまれ、狒々に輪姦され、大衆の前で快楽による敗北宣言をする前の藤香なら、涙が出るほどうれしく、章伯に対する愛情をさらに強めたことだろう。

(はあ、はああ……っ。な、なにこの感じ……いっ!! 背筋がゾクゾクするわ……。章伯の言葉、うれしいのに……。お、オマンコがズキズキって疼いちやうのよおっ!!)

決意の表情を、章伯に送り返したいはずなのに、なぜかいつもの凛とした表情がつかれない。

目の前の章伯を見つめていたのに、突き出したお尻の近くで、黒い熱気を放つ忌まわしい肉棒の感覚に意識が向いてしまう。

「お前の幸せは、その男を裏切り、私の妻……最高の牝奴隷となることだ。ガキと私、どちらを選ぶか、せいぜい自分の心で決めるといい」

言い終わると、握り拳ほどはあろうかという、法限の亀頭がクチリ……と藤香の満開の肉花弁に触れる。

(くふああんっ! あ、ああつ……くるうっ!! 法限の、章伯のじゃない……章伯のよりすごいチンポが……。私のオマンコの中に……。いいっ!!)

理性では章伯の愛をしつかり感じている。しかしその恋人としての幸福感が強ければ強いほど、逆に膣内が熱く沸騰して、蕩けそうになってしまう。

本当は肌に触れられることさえ、嫌で嫌でたまらない男の肉棒が、大きく淫靡に広がった大陰唇を撫でまわすのを、なぜだかじれったく感じてしまう。

そして――。
「先が触っただけでわかるエロいマンコだな、九尾

の藤香。私のチンポを受け取れつつ、おおおっ
つ!!」

ドチュウウウウツツ!

陰陽師の極太肉棒が、愛情と官能の間に揺れる藤
香の膣穴に、勢よく突き込まれる。

すでに噴出した愛液でトロトロに濡れた牝の肉壺
に、まるで拷問用の鉄棒のような逸物が、根元まで
一気に挿入される。

燃え盛る炎で熱せられたような牡の剛直が、ジュ
ワツ! と肉壁の表面を快感で灼け焦がす。肉棒の
表面に生えそろうた無数の突起が、まるで金たわし
のように、藤香の蜜壺の快感神経すべてをゴリリイ
イツツ! と容赦なく、一気呵成に擦りあげていく。
「おっひいひいひいっ! くあ、んああつっ……
おおおおおっ!!」

瞬間、両手を上に縛り上げられた無様な姿の藤香
の全身が、悦楽の電撃の直撃を受けたかのように、
ビクンツツ! と大きく跳ね上がった。

耐え抜かなければいけないと、理性が激しく明滅
する。この快感を堪えることが、章伯への愛情を示
すことに繋がるのだ。そう心に教え込む。

(こんなチンポ……おっ! あああつ、法限のチ
ンポなんて……つつ。チンポチンポつつ、このぶつ
とくてイボイボのチンポ、おほおほおっつつ!)

しかし、女の本能は——。改造された肉体が持て
余していた劣情のマグマは、藤香が千年もの間に渡
って育んできた少年への愛情の大ききよりも、法限
と少年との肉棒の大きき、熱さ、気持ちよさを情け
ないくらい素直に比べてしまう。

愛する人とのセックスで不完全燃焼だった牝欲が、
憎き仇敵がもたらす快感によつて満たされていくの
を、嫌でも強く実感してしまう。

「ふふ、どうした九尾の……いや、藤香よ? どう
だ、私のチンポの味は?」

「はあああつ、んああつ……そ、それは……つ。
それはああつ!」

ギリギリと唇を必死に食いしばって、膣の奥から
漏れ出そうになる言葉を、必死の思いで抑え込む。
「と、藤香……つつ!」

章伯が真剣な眼差しでこつちを見ている。快楽に
負けてはいけない。自分が必ず助けるから、頑張っ
てつ! そんな想いが、ひしひしと伝わってくる。

だがそれ以上に……。法限の異形な肉棒によつて
もたらされた、膣壺で爆ぜる快感の火花が、藤香の
満たされなかつた牝の欲望を、身体だけでなく、理
性にまで飛び火させていく。

(な、なんなのよこのチンポはああつ?! まだ入
れられただけよ!! なのに、おほおっつつ! イ
イク……ツツ! ああつ、マンコに、子宮にギンギ
ンユンくるなんてええつつ!)

藤香の膣と法限の肉棒の接合口から、ブシユウ
ツ! と淫らな牝汁が噴き出すのを、太腿を閉じて、
章伯から必死に隠す。

いくら愛があつても、人間の章伯ではなしえない
異形の魔根がもたらす快感は、挿入されただけで、
藤香の理性を簡単に絶頂の果てへと飛ばしてしまう。
「いいひいひいひいっ! おおおっ、ん、ほ
おおおっ!!」

法限の肉棒の快感を知らされた改造女体が、藤香
の意思を離れて、牝の官能を求めだす。

男であり、藤香の膣に挿入してはいない章伯では決
して知りえない。少年とのセックスの時以上に淫ら
極まりない肉の蠢きが、法限の巨根をギチギチと締
め付け始めて、もう理性の力では止まらない。

自分を奪うと言った男のペニスに悦んでいること
を、目の前の章伯に悟られまいと、藤香は必死の思
いで嬌声を堪えるが、それでも野太い獣のような淫
らな声が漏れ出てしまうほどの圧倒的な快感の爆発。

しかし章伯は、藤香が自分のことを思つて耐えて
いてくれるのだと、信じて疑わない純粋な瞳でこち
らを見つめてくれている。

「まだ素直にはならないか? さすがは現代でも最
強の女退魔師と呼ばれただけはある。しかし……」
「あつ?! んほああつ!!」

法限は、退魔スーツの胸の部分をビリリツ! と
破り取る。ブルンツと露わになった藤香の二つの爆
乳を、両手で思い切りグツツ! と驚掴みした。蕩け
るほど柔らかい牝脂肪がたつぷり詰まつた女の果実
が、ほどよい弾力を、法限の掌に返してしまふ。

「ならば誰がお前の『主人様』かということ、
お前のマンコに徹底的にわからせてやろう! 藤香
よ、抗えるものなら抗ってみろつつ!」

「く、おおっ……。やめ、やめなさいつつ! そ
のチンポで突かれたら……あつ!」

気位の高い藤香の怯えた声を無視して、宣言した
法限の腰が、まるで盛つた馬のように、凄まじい速
度で激しいピストンを、藤香の女壺にぶつけてくる。
ズチュンツツツ! ズンンツツツ!! ドチュンン
ンツツ!!

無数のイボを揃えた、腕ほどある男根が、藤香
の膣を力づくで拡張する。誇り高い九尾の膣穴を、
快感だけをもたらし、求める、ただの淫乱エロホー
ルへと調教改造していく。

「おっ、おほおっ! んほおほおっ! っ
おほおっ!!」

その初めの数突きが、藤香の発情した肉壁をゴリ
ユゴリユと力任せに擦りあげ、子宮の入り口をなん
の遠慮もなくズドズと、硬い亀頭で叩き上げる。
(し、子宮の周り叩かれるのすごくイイっ! 心も
身体も満たされて……あああつ、章伯の前で……
……こんなああつ!)

法限の責めは、年齢相応の圧倒的に淫らなテクニ



ツクを誇っていた。Gスポットを擦られると気持ちいいのは、藤香も知っていたし、章伯にココを責めてお願いしてもいた。

しかしこの子宮口近辺の性感帯……いわゆるポルチオへの責めは、藤香に未知の快感と、女としての深い幸福感を、理性と愛情を超えて、染み込ませていく。

「妖魔の卵を出産済みだからな。ポルチオは恐ろしく感じるはずだぞ？ お前の恋人は、そんなところも責めてくれなかったのか？ ははは、堕ちるがいい藤香よっ！」

言った法限の腰がグリグリと8の字を描くように動き、ポルチオだけでなく、藤香の膈壁全体の性感帯を、その無数のイボイボで根こそぎ擦りあげてくる。

同時に、法限のペニスのイボイボから大量の濃厚媚薬が、章伯の見えない膈の中で放たれ、藤香に決定的なとどめの一撃を染み込ませる。

「んひつつつつ!? んおおおっ! ほっひいいいひつつ!」

瞬間、藤香は、目の前で自分を見つめる章伯をしつかりと見た。

最初は愛する人に、決して負けないという意志を伝え、力をもらいたかつたからだと思つた。

しかしそれは違つた。

「ごめんなさい、章伯………つ。このチンポ………ああつ、法限のイボイボチンポおおおおおんっ!!」

法限にバックで、獣のように犯されながら、藤香はさっきまでの章伯との愛あるセックスを思い出していた。

確かに強いぬくもりはあつた。愛されているという実感があつた。けれど後に残るのはいつもいつもいつも、先に果てる章伯と満たされない性欲だけだ

つた。

それが法限による肉体改造の結果だというのはわかつてる。その張本人である陰陽師のペニスで、絶対に感じていけないのもわかつてる。

法限との間に愛などない。あるのは絶対の服従と、妖狐として、退魔師として……章伯の恋人としての尊厳の完全屈服だ。

（でも、でもね章伯あつっ! 私、私いいつつ!!）

少年の瞳が、徐々に大きく見開かれていく。その顔は情けなく、ひどく弱々しく見えた。

それでようやく藤香は実感した。自分は法限の肉棒に、悦んでいる。その姿を最愛の人、章伯に見せつけてなお、快感を我慢できなくなっているのだと。

「法限のチンポおおおおおっ! ぎんなんもちいいいいいいいいひつつ!」

藤香は子宮の底から叫んだ。

同時にいつも高慢で、気高く凛々しかった美貌が、見事なまでアへ顔を、章伯に向けて晒していた。

「はははつつ、そうかそうか。私のチンポが気持ちいいのか、藤香よ!」

「え、ええつつ! 気持ちいいわよつつ! こんな反則ううつつ!! こんな大きくてイボイボのついたチンポなんて、人間のじゃないつつ! こんなので突かれたら女なら誰だって、気持ちいいに決まってるわよおおおっ!」

バアアンツツ! と、法限の腰が藤香の大きな桃尻にぶつかり、膈内で極太の魔根がドジュウツツ! と女壺の上下左右、ありとあらゆる性感帯を扱い回る。

チンポもそうだが、一突きごとに膈の粘膜の奥の奥まで注入される媚薬がもたらす中毒快感が、藤香の気高い理性を色欲に狂わせていく。

「気持ちいいツツ! 藤香の牝狐マンコ、悦んでるううつつ! ずっと我慢してきた疼きが、法限のチンポでぶつとんでくのほおおおっ!」

「藤香………つつ!? そ、そんな………つつ!」

章伯の驚きの声に耳を貸す風でもなく、藤香は法限の腰振りに合わせるように、自ら尻尾を振りたくり、淫らな合わせ腰を打った。

パンパンパンツツツ! と、まるで互いの身体をよく知る恋人同士であるかのように、法限と藤香の腰と尻が、リズムカルな淫音を、一人残された章伯の耳へと響かせる。

「おううつ、素直になつてまた一段と締めりがよくなつたなつ! くくく、藤香よ。そのガキのチンポなら、この程度の締め付けでとくにイッていたのではないか!」

「………あつ、そ、それはああつつ」

法限の問いに答えることは、たとえそれが事実であつても、章伯を男として侮辱することを意味していた。

しかしそんな恋人同士の思いやりなど、この魔根の突き込みがもたらす、狂つてしまふような快感に比べれば、塵ほどの値打もないと本気で思えた。

「え、ええつつ! そうよおおおっ!! 章伯つたらあ、私が本気出す前にすぐ先にいつちやて、一人だけ満足してたのつ! おんつ、ほおおおおっ! んおおおおおっ!」

今まで抑えてきた牝の本音を暴露する。それで少年のプライドが傷ついても仕方がない。そうはつきりと思えるほどに、法限と章伯の責めは別次元の気持ちよさだった。

「このチンポテクニク、すごすぎるわつ! 章伯なんて、ただズコズコ突くだけで……。私はオナホールじゃないつ。こんな風に気持ちよくしてほしかったのほおおっ!」

「あ、あああつつ……う、嘘だ。だつて藤香は僕の

おはようございます
提督中尉

昨日はよく
眠れましたかな？

ああ
貴艦のベッドは
寝心地がいいな

ガハ

久しぶりに
ぐっすりと
眠らせて
もらいました

艶然と微笑む
二人の美母娘

監獄靴艦3

熱砂の洗脳航路 PRISON BATTLE SHIP 3 BRAINWASHING ROUTE OF BOILING SAND

episode 02 最初の渉外任務

漫画 楠木りん
Anime LiLiTH

お母様
これ美味しいです

…不自然な所は
なさそうだな

ああコックは
いい腕している

ありがとうございます
ふんお前らが
装甲騎部隊を
待ち伏せ
させていたのは
知ってるんだ

海賊のことは
私も聞いている
艦長の判断は正しい

ああ
今朝未明海賊が
商船を襲ったとの
連絡がありまして
万が一の事を考え
航路を変更した
次第です

…ところで
航路変更の理由を
まだ聞いてないのだが

それは
何よりです

フフ…記憶処置は
完璧のようだ

…狙いはなんだ？

しかし
乗っ取って
どうする？

リブラで
工作する…？
ありうる

リブラとの関係を
台無しにしても
実行したい目的…

ネオ・テラース
要人の誘拐…
…もしくは暗殺…

やはりこの艦を襲撃して
乗っ取るつもりか



艦長？
私の顔に何か
付いているか？

……

あっ失礼

しまった！



よさないか
中尉

はい

ベアトリスの夫…

まあ、

娘のいる前で
お母様を
口説くなんて
艦長も大胆な方ね

お母様は
こうみえて
お父様一筋
なんですよう

も申し訳ありません
提督に見とれて…
くっ…
俺としたことが…



あついえ！
なんでも…
失礼しました！



調べてもついに
誰か分からなかったが
女帝最大の
弱点になるかもしれないな

提督
お詫びと言っては
何ですが…

今夜お2人を
夕食に招待させて
いただければと
地球産のキャビアと
ワインを用意して
あります

ほお
喜んで受けよう
断る理由はない

海賊を
警戒するために
航路を変えたと
聞きました

そこで
母の護衛の観点から
警備を強化するために

そそれは
船の規則で…

勘違いしないで
艦長
これは命令です

そうだ艦長
お願いしたい事が
あります

はい
为什么呢

私のナイフの
携帯許可と
従卒たちの武器を
返してほしいのです

くそっ
拒否する理由が
ないというわけか

わかりました
確かに海賊の
動きは脅威だ…

艦長の賢明な判断に
感謝します！

はあ…

馳走になった

我々は艦内を見学
させてもらう

いいな？
艦長

もちろんです

マズイな…

さっそく
部下に案内
させますので

武器を
隠し持ってるのと
堂々と
携帯するのでは
状況が違ってくる!!



申し訳
ございません！

謝罪はいい！
ただちに所在を
確認しろ！



何!?
2人を見失った
だと!?

バカか!
あれほど目を
離すなど言っただろ!



ちっ
あいつら!

何かしでかして
いるんじゃない?
ないだろうな!?



どこだ!?

くそっ!
どこへ行き
やがった!

ああ艦長
見学楽しませて
もらった

あら?
顔色がすぐれない
ようですね

いいえ
ご心配なく
そろそろ
夕食の時間ですが…

もう
そんな時間か



我々は一度部屋に戻って
また改めて伺おう

照明が
替わった!!

おまち
ください!

確認したい事が

きた!
ついにこの時が!

あり
まして…

提督 中尉

渉外任務は
ご存知ですか?

我がクシヤナ軍の
女将校は
過酷な訓練を
積むだけでなく

交渉などで相手国の
兵士などを
もてなすための
高級娼婦の
訓練を怠らない

…もちろんだ

その為の渉外任務です
指揮官であり
高級娼婦であることが
クシヤナ軍の女将校の
誉れですから



では航海の間
提督に渉外任務を
お願いすると
いうことで
宜しいですか？

無論だ

護送の労苦に対し
渉外をもって
報いるのが
クシヤナ軍
女将校の義務だ

中尉も承知して
いただけますか？

もちろんです
私も当然行きます！



キラ：お前もそろそろ
立派に渉外任務を
やり遂げる年齢だ

お前なら私以上に
奴隷娼婦になれよう

はい！
お母様

フハハハ！
完璧だ！

渉外任務だと？
そんなもの
あるはずがない！



艦の照明の
切り替わりで
洗脳状態に
入ってるとも
知らずに：！！

こいつらの
穴という穴を犯して
ザーマン漬けの
肉便器にしてやる！！

しかし
宜しいのですか？
提督

渉外任務などされて
配偶者の方は
気が気でない
でしょうね？

渉外任務の前には
身分や階級もなければ
夫や恋人の有無も
無視される
余計な気遣いは
無用だ 艦長

今日は
艦長である私から
渉外をお願いします
お2人一緒に

…これは
失礼しました

夫の事はまだ
聞きだせそうに
ないか

まあいい
洗脳は始まった
ばかりだ

では始めろ
まずはクチマ コで
奉仕してもらおうか

は…はい

ズン

グワ

キラ
もっと顔を近づけろ
これは極上の
仮性包茎チ ポだぞ

そうなのですか？
よくわかりません
けど…

だ…けどこの匂い…
私は鼻が曲がりそう
です…うう

当たり前だ
お前達をゲストに
迎えるのと知って
リブラを出てから
一度も風呂に
入ってないからな

ハハハ

すぐにお前も
この匂いが好きで
たまらなくなる

いいか？
よくみれいろ…

包茎チ ポは
びんかんらから
まずはこうやつれ

口の中の唾液を
まぶすのら

わ

わ

ハハハ

ドキ
ドキ

さあ
やりなひやい
キラ

わかりました
お母様

んんー…うっ
うっ…ッ!!

10回

キラ お前まさか
男とキスした
経験もないのか

あまりに
下手くそすぎる

な…っ
だまりなさい!

いや艦長の
いうとおりら…
…ん…っ♡

キラ…じゅる…
もっとな美味しそうに
舐めりゅのら

は…はい!

…んっ…ふう
じゅる…ん…

10回

ふふ
これはいい

うん…
うん…

ひゅ
ひゅ

13回

なんともいえない
眺めだ

女帝と死神…
火星中から
恐れられた女達の唇が
左右から
俺のチポに
舌奉仕している

10回



お邪魔するよ
魔女ウイルヘルミナ

コソコソ



深き森の奥に住む
魔女に迫るのは!?



ベルモンド卿か:
今日は何用だ?

いやいや
今日はまたモンスターの
配合を頼もうと思ってる

滋養強壯の秘薬なら
その棚にあるから
代金払って
勝手に持って行くがいい

禁忌の交配魔術

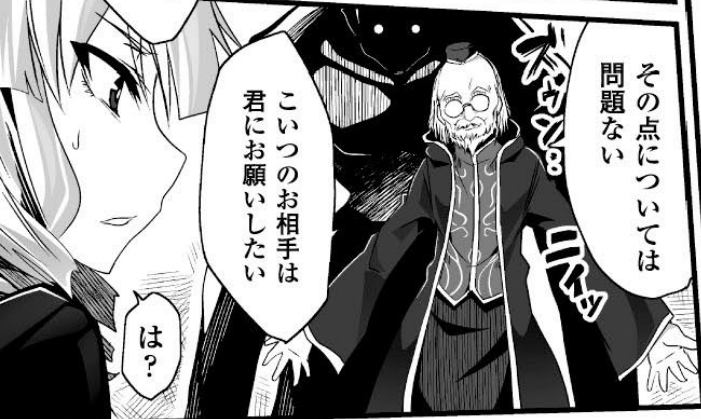


漫画 冬扇



配合相手の捕獲も
依頼に含むの？

…見たところ
他にモンスターを連れて
ないようだけど



こいつの相手は
君にお願いしたい

その点については
問題ない

は？



君に以前配合してもらって
作ったこいつだけだね

モンスター闘技場でも
良く戦ってはくれるのだが
他国の強力なモンスターには
とても及ばなくてねえ



…笑えない冗談だ
ベルモンド卿

死にたくなければ
さっさと帰ってくれ

あー…



強力な魔女である
君となら

きっと強力なモンスターが
産まれるとは思わないかね？



なっ…!?



そういう訳には
いきませんな
捕らえろ

はあ？



ふん…
調子に乗るなよ

この程度であたしを
どうにかできるとも
思ったのか？

モンスターと人間でも
可能なはずだったがね



大人しく
支配されて
くれんか？

モンスター支配の
指輪か…

厄介な…



喰らえ…え？





使えるのは
アーティファクトと
魔法陣くらいだね…

さて…
その魔法陣の上で
交尾すれば
いいのだったな？



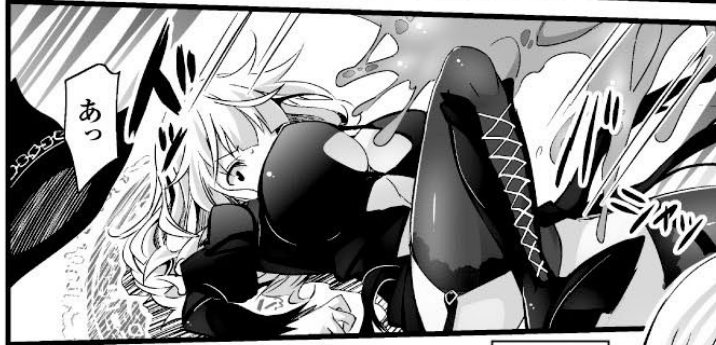
なんで…

君の魔力は
脅威だからねえ

魔術の発動は
封じているよ

私兵の魔術師を総動員して
森全体に封印結界を張らせて
もらったのだ

オオオ



あっ



ここの魔法陣上は
駄目だ…

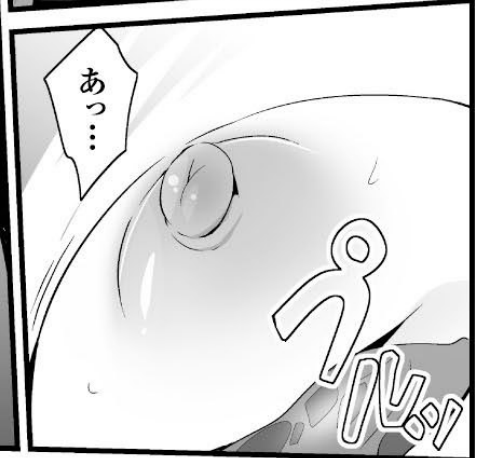
く…っ
いい加減にしろ
ベルモンド卿…

後でどうなっても
知らんぞ…

おお怖い怖い

何心配せずとも
ちゃんと相応の代金は
支払いますぞ

交配の為に性欲が
高められてしまう…





よしそのまま
膣内に射精しろ

ちゃんと強い仔が
孕めるように大量にな

ひっ...

や...

やめ...

あぁッ!?

グッ

グッ

グッ

グッ

グッ

ぐっ...
うううう...

ガッ
ガッ

グッ





母体の魔力が吸われて
すぐに出産まで…

…っ!?

ちよちよっ
待て…

はっ…

なんだこの
快感…ッ

うっ…
膣内に射精された…
すぐ次の効果が…

うっ…

ひっ…お腹が…っ
ソクソクってえ…♡
こんな効果
知らない…ッ

き気持ちいいっ…♡

あ…
母乳まで…っ
駄目だ…
止まらないっ

あ…
母乳まで…っ
駄目だ…
止まらないっ

美貌の踊り子の子宮を
翻る異形ペニス&卵の群れ!!

選択肢でいろんなエンディングが楽しめる分岐小説!

流浪の踊り子

ヴァネッサ

人外ペニスに翻られ踊る孕み舞

小説
NOVEL

さくらそら
桜空

挿絵
ILLUSTRATION

sa_ku

ご注意

この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1~5の番号がふられているので、シーンの小説本文末尾にある指示に従って、指定された番号のシーンをお読みください。

シーン1

勇者が魔王の城を目指し旅している最中、一人の女性が各地の小さな村を旅して回っていた。

魔物の巣窟である深い森を、軽装の女性が平然と抜けて山道を下る。村の入口まで歩いてきたのだが、どうも様子がおかしい。人々は逃げ惑い、阿鼻叫喚の地獄絵図が広がっていた。

理由はすぐに判明した。魔物が村人を襲っていたのだ。旅人は、まだ十歳くらいの女の子を持ち上げている、リザードマンの腕を斬り落とす。

目にした瞬間、熱い滾りが駆け巡り、気づいたときには行動に起こしていた。「ぐあああああああ！」

「今のうちに逃げて！」

なんだなんだと周りに怪物が寄ってくる。どいつもこいつも手に女性を抱えており、そのほとんどが若い村娘ばかりで、裸に剥かれた少女までいる。

（こんな長閑な景色、小さな村で魔物に遭遇するなんて、ツいてるのかツいてないんだか）

どちらとも言えない状況に溜め息を吐くが、化物どもは明らかにツいてるとばかりににやけていた。

なぜなら、旅人が絶世の美女ともなれば、連れ帰った後でいくらでも陵辱できるのだから。

切れ長の双眸は蒼く、整った眉に筋の通った高い鼻。適度な大きさの唇といい、完璧に配置された黄金比で組み

立てられた美貌に、モンスターでさえ見惚れている。

身長は高く、健康的でスレンダーな肢体にいくつもの視線が突き刺さる。

脚はすらりと長く、腰は括弧（くわく）でいて縦長のお臍にピアス型の魔石、形のよい美乳。顔は小さく、ポニーテールは光り輝くプラチナブロンドで、健康的な浅黒い肌によく映えている。

黒い極小のビキニ型アーマーは、軽さと己の特徴と技を最大限に活かすためのもの。しかも対魔性もあり、優れた防具だ。

口元を透けたピンク色のベールで隠す。スカートのいうかバレオというか短いながらも腰に同じく透けた布が巻かれている。

薄桃色の天女の羽衣を背中に纏い、ゆらゆら漂わせ。額にはサークレットを、太腿や二の腕にリングのアクセサリ、足首にアンクレットを飾る。

口と鼻の隠れたミステリアスな美女は色気に満ち、魔物が息を呑む。

足首は細くきゅつと締まっていて、太腿からヒップにかけて、しなやかな筋肉と脂の乗った柔肉が融合し、魅惑的なお尻を形成していた。

「さて、さつさときなさい。一瞬であの世に送ってあげよう」

艶めかしくゆつくり唇を動かして見渡す。全部で四体、ザコなら手こずる相手ではない。

リザードマンが、腕を斬り落とされた痛みを怒りに変えて襲いかかる。

「ガアアアアアアアアアアア！」

怒りに我を忘れ、捕まえるのではなく、巨大な顎で噛み千切らんと迫る。

獐（しやう）猛（もう）でいて素早いリザードマンの一撃を完璧に見切り、バクリと閉じた口は顔の一センチ横。しかし躲（か）した美女は、堅牢で長い口を下から短剣で貫き上まで貫通させた。

素早く抜き胴体を横に斬りつけて絶命させた。それに驚いたのは残りのモンスター。

少女を下ろしてじりじりと間を詰めてくる。今のうちに逃げてほしいが、ショックや恐怖で動けないようだ。

絶世の美女はいきなり腰を振って牡の視線を釘づけ。ぽかんと呆けた一体を、一瞬で肉迫して銀の軌跡を一閃、縦に真っ二つにした。

蠱惑的な舞を披露し、ベールの内側でセクシーな唇をべろり。舌舐めずりして微笑を浮かべる。

左手を真つすぐ伸ばし、人差し指から順に曲げ、きなさいと挑発する仕種にもエロティックで妖艶な色が滲む。

ゴーレムの巨体から繰り出される豪快なパンチをひらりと躲し、腕を斬り落とす。悲鳴を上げる巨体の足を斬りつけ、巨体を女性と同じ目線まで下げさせて心臓を貫いた。

そこで不利と見たケンタウロスが村娘を放つて逃げ出した。逃げる前に倒してもよかったのだが……。

「大丈夫？」
女の子がブルブルと震えながらも旅

人を見上げ、こくりと頷く。

「あの、ありがとうございます」
「魔物はこれで全部なのかしら？」

「……………はい、おそらく」

と、そこへ老人が歩み寄ってきた。

「もしや……かの有名な踊り子、ヴァネッサ様ではありませんか？」

「ええそうよ。ヴァネッサクリーブランド。今は旅をしながら小さな村を回っている、流浪の踊り子よ」

こんなへんぴな村にまで名前が知れ渡っているというのは気恥（かぢ）ずかしいものである。頬を薄く赤らめつつも、やってきたことに胸を張るヴァネッサ。

踊り子とは、敵を幻惑して混乱させたり、味方の士気を上げたといった後方支援が主な役割。それが普通なのだが、彼女は違う。命を張って前線と戦っていた。

後方支援を得意とする踊り子はパーティを組むものだが、彼女は誰とも組まない、流浪の踊り子だった。

魔王を倒す使命よりも、小さな村や素通りされる、田舎の村を守りたい気持ちからの行動だった。

（魔王退治も重要だけど、アタシの村みたいに壊滅させたくない。ひとつでも、一人でもいいから救いたい）

それには一人で動く自由さ、フットワークの軽さが欠かせなかった。

「おおやはり！ どうか……どうかこの村をお助け下さい」

老人、いや村長の話によると、数日前にモンスターにいきなり襲われ、村

の若い娘を攫われ、男衆を殺されるという事件が起きた。

もう一度来るから、もつと女性を集めておけと言われたそうだ。

そして今日、再び来て連れていかれそうになっていたところに、ヴァネッサが通りかかった、と。

「次にいつ来るのか分かりませんので、それまでも何もないこの村の宿に泊まっていただくことになるのですが、」

「明日よ」

「え？」

「魔物を一匹逃がしましたから、ボスに報告して、仲間を殺された怒りから早く女性を手に入れた欲望からか、明日にでも来るでしょう」

「なんと、そこまで考えて……っ」

「いつ来るか分からないより、明日と分かっているほうがやりやすいですからね」

艶然と微笑む。

無駄に身構えても疲れるだけだ、肉体的にも精神的にも。それをこれまでの旅で学んできた。

（それにしても、今回も……なのね）

いくつか村を助けてきたが、なぜか自分が村に入ると、もしくは入る数日前に襲われて、などの話に高確率で遭遇し、巻き込まれる。

（まあ、話が早くて助かるのだけれど）勇者も必ずと言っていいほどハプニングに襲われ、助けを求められる。

本当に救いたい人の気持ちと、助けしてほしいという必死な願いが引き寄せ

あうのかもしれない。

宿でぐっすり休んで、旅の疲れを癒やして迎えた翌日の朝。

踊り子にとつての正装（といっても昨日とまったく同じなのだが）で、村の中央広場に立つ。この場所は地面が安定し、かつ広い場所、ヴァネッサにとつて最適の場所といえたからだ。そこへ異形の集団がやってくる。

「うを、ごんだけ美人なんだよ。エロい身体もそるな、何回でも種付けできそうだな」

下級の魔物は喋れないが、ある程度にもなれば話せるのが普通。だが共通してほとんどの奴らは口が悪い。

「褒めてくれるのはいけれど、気持ち悪いこと言わないで」

「くく、自分が裏切られ、餌として差し出されたとも知らず。やっぱ美人はバカだな」

「下等な魔族なんてアタシ一人で十分なだけよ」

広場の中央で外人の群れに囲まれ、それでも物怖じしないヴァネッサが起こした行動は、やはり踊ること。

「おいおい、そんな色っぽい踊りで俺らを誘ってんのか？」

馬鹿にした様子で先頭に立つ人狼が笑い、つられて周りの部下も笑う。

ほば露出した栗色の肉体をくねらせ、乳肉をゆさゆさ揺らして、極小の胸当てを食い込ませる。

くびれた腰を突き出す。少しずれただけで陰部が見えそうな、面積の小さ

な防具と股間に注目を集めた。

ラメでより輝く金髪を振り乱す。二の腕や美脚のリング、太腿や足の指先までをも、女の武器として利用し、卑猥に魅せる。

色っぽく腰を振り、妖艶に身体を下させ、細くて長い、魅惑の脚線美に手を添えて、すーっと撫でる。

もう一方の細い腕を空に掲げ、指先まで繊細に表現し、魅了してゆく。淫靡なダンスを踊りつつも、瞳には強い意志を宿らせていた。

「いい匂いがするぜ、あの牝」

「そんなに腰振らなくても俺たちが愉しませてやるよ」

不用意に近づいてきた敵の腕をするりと躲し、すれ違いざまにスパッ。首を胴体から切断して切り離れた。

「あ、が……？」

生命力の強いゴブリンはそれでもまだ意識が残っていたのか、宙を舞いながら声を漏らした。

不思議そうにヴァネッサを見上げるが、獣人に蹴飛ばされた。

「何やってんだ、バカが」

今度は犬と馬の獣が二人がかりで襲いかかってくる。油断してではなく、倒そうと突つ込み、人間よりも素早い魔犬が正面から襲う。

だが外人の攻撃も当たらなければ意味はない。踊り子は華麗なステップで避けつつ馬の位置を確認、強力な後ろ蹴りを完璧に見切る。

背を反らして避け、足を大胆に上げ

て蹴る。金色のポニーテールも風に舞い、ココア色の肢体と、天女の羽衣が揺らめく。

ゆらり、ゆらり。ゆっくり踊っているヴァネッサに当てるどころか、掠ることさえできない。まるで最初から打ち合わせて当てないようにしているかのごとく、すべて避ける。

それは普通の人間以上に鍛え、魔物と闘ってきたからこそその動きであつたが、それだけではない。

このゆつたりとしたダンスこそが敵の動きを遅く。身体に纏った甘い芳香が、攻撃の意思を鈍らせる技のひとつであつたからだ。

この動きを見た者は残らずかかる魅惑のダンス。それこそが踊り子の役割、真骨頂といえた。

ひとつ、普通の踊り子と違うところがあるとすれば、

「ぎゃあああああ！」

「ぐおおおおおお！」

ヴァネッサが短剣を使いこなす近接格闘にも優れていたこと。

犬と馬を切り裂き、次々に斬り殺していく。伸びてきた異形の腕をくるりと反転して躲し、オークとすれ違いつつも斬りつける。

勢いそのまま、独楽のように回転して、両手に握った短剣で四方八方の敵を斬り伏せる。

スパン。紙でも切るみたいに容易く怪物らを葬り去っていく。くいつくいつ。エキゾチックな美女

の、淫らな腰の動きに自然と目が吸い寄せられ、注意力散漫になったモンスターを斬り殺す。

恐ろしく切れる短剣が、銀色に光り輝く。それはただの鉄の光ではない、特別な光を放つ。

「さあ、次に死ぬのは誰かしら。アタシのダンスを冥土の土産に、あの世へ逝きなさい」

深く、けれど澄んだ声で魔物に死刑宣告を告げる。

長大なワームが丸呑みにしようとするれば、半身を捻り紙一重で躲しつつ横一閃。長い胴体を半分に切断。イカの獣人が十本の足を駆使して同時に攻めれば、凄まじい速度で応戦して、一本ずつ斬り落としていく。

鬼神のごとき活躍で魔物を半分以上も屠る。それも華麗に舞い、優雅に踊りながら、だ。

もちろん、それらの踊りにも意味はあるのだが、魔族は知る由もない。

「うふふ、アタシのダンスに酔っているのかしら。そんな攻撃では当たらないうわよ？」

幻惑の舞で攻撃を外させ、鮮やかなダンスで怪物の視線を誘導し、色っぽく、エロティックな流し目で獣の動きを止め、蠱惑的な腰振りや獣の本能を刺激して暴走させる。

視線と理性と本能が別々に働き、バラバラになったトルロはいとも容易く身体をバラバラにされる。

高速で腰を前後に振り、揺れる金髪。

褐色の肌には汗ひとつつかいていない。そこで戦況をじっと眺めていた、ボスらしき人狼が前へ出る。人狼といっても二本脚で、O脚のガニ股で立っているだけで、ほぼ狼の姿だが。

毛深く紺の毛色に、にゅつと伸びた鼻筋は白く、大きな口から牙が伸びている。

こちらの魔物を取りまとめているだけあって、油断はできない。フツと姿が掻き消える。

(速い！)

常人には消えたようにしか見えない速度だが、ヴァネッサは視界にその影を捉えていた。

斜め下からの鋭利な爪を、柔軟な身体を反らして流れる動作で躲す。髪が揺れてパレオも舞い上がる。衝撃に風が吹き荒れ、至近でウェアウルフと視線が交錯。短剣を振るうものの、硬い爪で弾かれて互いに距離を取る。

(この短剣で斬れないなんて、どんな爪してるのよ)

ニタリと人狼が笑う。勝利を確信して、だけの笑みではなさそう。

「こんなイイ牝を犯せるなんぞ、楽しんでしようがねえぜ。強くてエロい牝が大好きでな、くひひ」

剥き出しになっているペニスがぐんと持ち上がる。

「戦闘中に勝った前提で話を進めないでくれるかしら」

じり、じり、と距離を測り。迂闊に近寄れない。

「うをおおおおおおおおお！」

狼男が急に雄叫びを上げたかと思うと、倍以上に膨れ上がる剛腕。上空に跳び上がり、左右交互にぶんと振り下ろすと、空氣の刃、鎌鼬^{かまたち}となって踊り子に襲いかかる。

ヴァネッサは短剣で受けようとしたのだが、瞬間的に嫌な気がしたので、バツと横っ飛びに避けた。

すると背後にあつた建物はずたずたにされて無残な姿に成り果てる。受けていたらと想像すると寒気が走った。

先刻から魅了する踊りや眠気を誘うダンスを踊っているのだが、ウェアウルフは集中しているからなのか、効き目が薄い。

だがそれでも、勝ち目はまだある。大技ゆえに隙が大きいのだ、そこを突けばいいける。

「もういっちょいっくぜ！ オラアアアアアアアアア！」

(どれだけ威力が強くて、当たらなければ同じよ)

空中へ跳び上がる人狼の腕がまた太くなる。腕が振り下ろされると同時に避ければなんの問題もない。

だが、

「うわあああん、おがあざあん！」

後方でも子どもの泣き声が響く。

(なんでいるの!? 奴らが来ない方向に逃げるか、家の中から絶対に出ないでって言ったのに!)

子どもに氣を取られた一瞬の間に、狼男が腕を振り下ろした。

まだ避ければ間にあう。が、(避けれるわけないじゃない)

後ろには小さな子どもがいる。この状況で避けたら確実に子どもは死ぬ。避けるわけにはいかなかった。

「はあああああああああああ！」

銀の短剣を一閃、鎌鼬がくるであろう角度に薙ぐ。ランダムな軌道の技に對して無駄かもしれない。だが、避けもせず、かといって何もしないよりはマシだと思った。

斬ッ！

空氣の層を切り裂いた感触が短剣越しに伝わる。

「うあつあああ！」

けれどすべてを相殺できたわけではなく、二の腕を僅かに切り裂いて過ぎる。

倒れ込みながらも後ろを振り返る。男の子の横にあつた水瓶がキレイに割れて、水がこぼれていたものの、男の子は無事だった。

「よかった」

「いいや、最悪だぜ？」

ほっと胸を撫で下ろした直後。野太い声にはっとして振り返ろうとしたのだが、首筋へ重い一撃を喰らい、意識が闇へ呑み込まれてゆく。

◆何をやっているのよ、アタシ……は
↓シーン2へ

◆絶対に諦めない！
↓シーン3へ

シーン2

(何をやっているのよ、アタシ……は)
後悔しながら気を失い、敗北したヴァネッサが気づいたときには、すでにここに連れてこられた後だった。
ここに、というのはこのふざけた牧場の牛舎のような場所のことである。
屋内で等間隔に並べられた少女が、一枚板の丸穴に、首と手を罪人のように拘束されている。鉄の柵と板による拘束で横と前しか見えない。
身動きできない裸の美少女が、魔物に好き勝手犯されている。隣は一メートルと離れず、前にも一列にずらっと並び、ざっと見て全体で五十人以上。
ハイオークが管理しているのか、女性を背後から監視していた。あくまでも監視で、犯しているモンスターはまた別にいる。
深々と腰を折り礼をしている、立ちバックで後ろから突かれていた。
(男の子が無事だったから油断した。ほっとしてしまっただけ)
などと冷静に考えている場合ではないのだが。
「オラオラッ、さっさとイッチまえ」
「んぎいっくふ。そんな、ヘタクソなセックスで……イクわけないでしょ」
余裕の表情で嘲ってやりたいのだが、手と首の枷の影響で、後ろを振り返れず、ただただ家畜のように扱われる。ずんつと最奥を突かれて子宮に亀頭が当たる。後ろから犯され、声はする

ものの、首の枷が邪魔でどんな魔物に犯されているのかすら分からない。
ただただ性欲処理と支配のために穴として使われているみたいで不快だ。
怪物に女として扱ってほしいなどと思わないが、道具として扱われるのは我慢ならない。
どうにかして現状を打破したいが、どうにもできないでいた。
(長く捻れたペニスが奥まで突いてる、魔物に犯されてる！)
「まったく、強情な女だな。横の牝なんか感じまくってるだろ。お前も少しは見習え」
「ひああああん！ アンッあひ、イク、いっくううううう！」
隣から聞こえてくる喘ぎ声に、絶頂の悦びに耳を塞ぎたくなる。自分はこのうならないぞと心に誓う。
長いだけでなく捻れた肉棒が髪を刮ぐ。抽送のたびに奥までゴツンと突き、「ぎいいう。んぐぐ、絶対に、殺すから、憶えておきなさい」
「ぎやはは、顔も見えねえ相手をどうやって殺すんだよ」
「簡単よ、うぐつ。全員殺せば、済む話でしょ」
怒りを、怨嗟を声に乗せて、見れない敵に送りつける。
「……っ、へへ。すげえな、一瞬ビビっちゃったぜ。でもな、そんなのはこれから抜け出してから言いな」
人間とは違う感触のお腹がお尻にぶ

つかり、バチバチ音が鳴る。勢いよく貫かれ、愛液が太腿へ垂れていく。
恥蜜でスムーズに進む異形の抽送に情けなくなり、ずるつぬちゅと音が鳴り始めると恥ずかしさが増す。
異形のペニスに張りつく、髪や感触にいやいやとかぶりを振った。
「お前のマンコは俺のチンポから離れたくないってよ。だがもうそろそろお別れだな」
「な、にを」
急に腰の動きが激しくなり、鋭く高速でお尻が叩きつけられる。
「くひい激しいっ。お尻があ……っつよ、力強いのが奥にいいいっ」
「オラッオラッオラア！ 孕め！」
どびゆるるるるるるるるるるる！
(嫌、いやあああああああああああ
ああ！ 孕みたくない、魔物の赤ちゃんなんて孕みたくないいいいいいいいいい！！)
子宮に熱い子種が注がれ、人間の数倍の量が満たされていく。
「ふいふいふいスツキリした。最高のマンコだったぜ」
(中に出された、子宮に魔物のザーメン射精されちゃった……ッ)
やっつと終わつたと思つたのに、
「きたきた、新入りの穴を試してみたかったんだよな」
「ひっ、な何してるの……？」
「何って、今から使うんだよ」
別のモンスターがヴァネッサの背後を陣取り、まだ精液の残る膣内にイン

サートしてきた。
「おおおおおおおッおおお！ もう入らない、入らないいいいい」
最初の化け物からどれだけ経つたのか、時間の感覚も分からないが、入れ代わり立ち代わり犯され続ける。
隣の少女がよがっている理由が今なら分かる。四六時中これだけ犯され続けられ狂うというもの。
それでも、ヴァネッサは強靱な意志で精神だけは抗っていた。
(だめえ、快楽に流されては、狂ってしまう。耐えるのよ、耐えてえ、赤ちゃんも孕まないんだから)
人間とは異なり、大きさが違うというだけではなく、形や特徴が異なるので、犯された数だけ、その種族特有の快楽を植えつけられるのだ。
「俺の子どもを孕むんだぞ、牝豚！」
「ひぐうううううう！ またあつついザーメンくるう」
(やめて、もう入らないわよお)
最奥に注ぎ込まれるが、すでに孕んだかの如く精液でお腹が膨れていた。
「ギンシャアアアアアアア！」
今度の魔物は喋れないくらい低能なのか、奇声を上げて突き込んできた。
柔らかな媚肉をゴリッと強く挟む太さと、コリコリ大小様々な疣が肉壁を三百六十度擦りつける。
どれだけ犯されても締めつけの弛まないヴァギナを、疣つきの極太男根が挟む。



「はっひいイいイいイいん！ コリコリしてるのに、太いのっこれおかしい。だめっひやくう」

普段よりも一オクターブ高い嬌声を張り上げ、幾度となく押し上げられた絶頂へまた近づく。

ゴツンと子宮口を穿つ亀頭、と同時にGスポットを疣に摩擦された。

「ほぎ、ほぎイ。だめ、そこ弱いの、同時にしちやらめえ」

喜悅に感じ入り、涎が地面に向かってつと糸を引き、ぼたりと落ちた。

瞳には涙が溜まり、今にも溢れそう。まだ快楽に屈していないつもりだが、表情は浅ましい牝のソレだった。

抜けていくたびに、べったりと張りついた髪が肉棒に縋りつき、恋人のようになんて離れない。

すらりと長い美脚の、太腿から足首まで、どろどろと汚液の筋ができていた。青臭くイカ臭い精臭に、初めこそ嘔吐感に苛まれたが、今では気にならなくなっていた。

「んおあ、ひぐうん！ だめいぎぎ気持ち、いい。はうう……ああつそこもう突かないでえ」

「ギシャアアアアアアアアアア！」

男根がいきなり膨れたかと思うと、びゅくつびゅぶぶぶ！ 凍てつくザーメンを膣内にぶちまけられた。

氷のように冷たいスペルマが、焼けついた花弁を冷やす。

化け物本体は臭いの、精液は蜜と勘違いするほどに芳醇で香り立つ。まるで毒じゃない、身体にいいものなんだと錯覚させるみたいに。

「ひあつ冷たい？！ だめイク。イかない。イかないイかないイいイい！」

（もう、イきたくない、これ以上おかしくなりたくないッ）

どれだけ拒もうと、固定された家畜に拒否権はない。

新たに大量の汚液を追加され、姿も分らない、言葉も話せない下級の魔族にイカされた。

「イクイクイク！ イつくう」

最奥まで貫かれ、ビクビク痙攣して果てる。しかしピストンは続けられ果てている女体を罵られる。

ぬちゃりとぬめるモンスターの肌が尻房に触れ、軟体動物に犯されているみたいだ。後ろを振り返れないので、正確には分からないが。

「もう、やべてええ」

「本当にやめてほしいのか!!」

荒々しく穿たれ、激悦に何も考えられなくなっていく。

「や……めなひで。もつとちゅいてえええええ！」

「やつと素直になったか。ご褒美だ、思いきり突きまわってやるよ！」

ドチュン、ドチュンッ！ 腰が強くピストンし、亀頭も子宮口まで挟めるのだが、肉幹は自在に動き回る。

人間では絶対に不可能な動きで抽送され、快感で脳内に閃光が走る。

ぐるんと触手やタコの足みたいに蠢き、曲がるのに硬さを有していて、肉壁を削られる。信じられない角度からずりずり擦られ、ピカッと稲妻が瞬き絶頂が止まらない。

「イグ。イグッ！——きゅふううううううううん！」

ぶしやああああああああああああああ！ どぼぼつどぼ。

膝から太腿にかけて太い腿が現れ、ぎゅうと足の指を丸めて地面を掴む。だが、それでも……まだまだ。まだ終わらない。

「もう、死ぬうううううう！」

一ヶ月後。妊娠して大きくなったお腹で息むヴァネッサの姿が、変わらずいつもの場所にあつた。

「ひっひっふふ。ひっひっふふ」

「ほら64番、さつさと産め」

ヴァネッサを固定する首枷にある番号でハイオークと呼ばれる。

この一ヶ月でより大きさを増した魅惑的な女の、牝のケツに成り果てた媚尻をはたかれる。

「その人間の呼吸がダメなんじゃないか？ だつてお前は牝豚だろ。だからそれらしくブヒブヒ鳴いてみろよ」

「ブヒ、ブヒイイイイイイ！」

（んあああああつ赤ちゃんそこまで出てきてる、豚みたいに鳴いて、産みそうになつてうう）

「マゾ豚だからもつと苛めたら産むん

じゃねえか？」

誰かが言い、こちらからは見えないが、監視役のハイオークがピシヤン！ 熟れた媚尻を鞭で打つ。

バシッ、パアンと打撃音が響き、蚯蚓腫れで赤く染まる。褐色の肌が見えにくい、それでも浮き上がる。

「ひひやあつんおとおオッおうおう」

ぶじゅんと体液がこぼれ落ちる。破水したのではない、快感からの淫水が溢れただけ。

ドクン、ドクン。お腹が動き、内側から蹴られる。

「はひっお腹の中、蹴られてる。赤ちゃんが動いてるううう」

（イヤなのにい、イヤじゃなくなつてる。お母さんになりたい……無事に産まれてきてほしいなんて）

人間として狂つてる。そう思う反面母親になるのだから母性が出て当然かも。そんな言い訳が浮かぶ。

母親似か父親似かといった問題ではなく、人間ですらなく。誰が——どんなモンスターが親なのか不明なまま産もうとしているのだ。異常でないわけがなかった。

脳内麻薬が溢れ、多幸感に酩酊して頭の中は産まれてくる愛しい子どものことしかない。

膨れたボテ腹が脈打ち、内側から責められる。早く出せと急かしているのか、それとも魔物の本能として牝を内側から犯しているのか。

「子宮が感じるのオオオ。……くひい

100



お父様
!!

貴様らの王は
討ち取った!

今より
この国は
我が魔獣軍の
物となる!!

獣王
シヴァ!

正々堂々と
勝負なさい

おのれ!
陛下の
仇討ちだ!!

ベルアメル姫が
おわす限り
まだ負けては
おらぬぞ!

可憐な姫が挑む相手は
宿敵の百獣の王!

女だてらに
勇者と名高い
ベル姫だな

俺の本当の
目的はお前よ

なっ!?
何をバカな

亡国の
ベルアメル
—魔獣の
母にされた姫君—

漫画
COMIC

ぱふえ

一対一の
勝負に
負けたら

俺の仔を
産んでもらう

ふざけ
ないでっ！

たあああ
ああああッ





ふんふん

ツ!!

アッ





ククク
でかした

く…
卑怯な

電気タコの
触手はキク
だろ…?

一対一の戦いと
言ったでは
ありませんか

く…
この程度の
屈辱など

父の無念に
比べれば
なんでもあり
ませんわ!

ああっ
姫様!

おのれ!
何をする

何で?
一対一の
勝負だよ

男と女
のな





いや...あああ
恥ずかしいっ

やああ

そんな...にっ
舐め...ないで

くんっ♡!?

ああっ
ザラザラ
して...え

ぴん



感じて
いるな?

牝の本能が
応えておるわ

あ...あ
この獣臭い
ニオイ...

そんな
わけ...っ

獣なん...か
汚らわし...
ん♡



だめええ
なか...っ
舐めひや

ツツ
!!

く...♡
ン

びん♡



うううう...
もう...
そんな

お父様の
仇なのに...

だ...め
獣なんかには

あああ

あ

あ

あああ!?
待って!

い...へる
のにい...

だめっ
またあ

ひから...
入らなく
な...ひや...あ



ミュータント覚醒!!



科学の力で新たな生命が誕生!

ミュータント
ホテホテ

YUKUNODA!!
GOKIKO!!

ZENRYOKU
HENTAI
YONKONA!!

否定できないカラダ♥



よりによって…



年末の大掃除★



思わず本音



放課後のしそん繁栄

漫画
COMIC

ふみひろ

大いなる精霊達よ

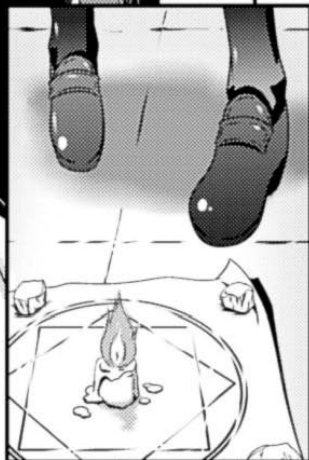
我が名と契約に従い

その力をここに示せ

大いなる精霊達よ

放課後の屋上で行われる
妖しげな儀式！

ふう…



私の名は柊可奈子
魔術同好会代表を
やっています

日々この校舎屋上で
交霊術と魔力強化の
鍛錬をしています

残念ながら同好会は私一人
だけとその私の魔力に
共鳴した生徒達が



この屋上に集い
精霊達と契約し
世界の理を究明する
予定です



呪文詠唱鍛錬終わり
次は…





ん...

ひっ

あわわわ...

無事にゲートを
抜けたみたいニヤね

ここが人間界かニヤ?



おおちようどいい所に
人間のメスがいたニヤ

我がニヤは
妖魔ナヴァルア

召喚成功
しちやった?
こ...これは...
ひよっとして私...

これからお前に
やってもらいたい事が
あるニヤね

え?

子供を孕んで
ほしいニヤ

え...は?
は...は...は...

は...は...は...



そうニヤ
お前に子供を作って
もらうニヤ

それだけの
簡単な話ニヤよ

魔界は生存競争が
激しくて大変ニヤ
このままでは絶滅して
しまうニヤ

そこで人間界で
子作りすること…

ちょちよつと
急に出てきて
何言ってるのッ

それに魔界とか言うなら
もっとファンタジーな事
言いなさいよッ

大体あなた女の子でしょ
そう言うのは男子に頼んで
あなたが産めばいいでしょ

私は遠慮するニヤ
だって…

子作りの相手は魔界植物
この魔草だからニヤね





嘘でしょ
こんな怪物…ッ

ひっ

た…助けてッ

誰か
助けてえッ

既に結界
張ってるから
大声出しても
無駄ニヤよ

私達の声どころか
姿も見えニヤいね

や…やめて…
こんなの嘘よ…そう
夢よ…これは夢だわ

もしくは幻術…
そう幻術に違いないわッ

や…やだあ
やめて…む…胸
いやッ嫌あッ

ち…乳首に
刺さってるう
い…痛あッ

ひぎしッ

熱いッ
な…なにこれえ
何か胸に
注入されてるッ



ひあ

あ...あ

あッ

かはッ

ああああ
ああああッ

コイツの種付けは
なかなか凶悪だからニヤ
相手が壊れないように
こうやって媚薬使うニヤ

まあ媚薬は媚薬で
強力なので
大変だけどニヤ

ひいッな…何ッ
やだやだやだそんな
大きいの無理無理いッ

だめッ

だめえッ

ゆるして
お願いゆるしてえッ

ひあああああッ

あああああッ





な…なんでこんなに気持ちいいの
子宮ごと内臓掻き回されてる
みたいなのに…突き立ててに
意識が飛びそうになる…
やだ…やだあ…

女勇者 エティア

呪いの公開痴女演技

小説 / せん や よ み
千夜詠

挿絵 / よ か ぜ
夜風ジャパン

高潔な女勇者にかけられた
公開羞恥の呪縛——!!



外壁を蔭で覆い埋め尽くされた神殿の奥から、断末魔の叫びが響き渡る。暗い地の底から響くようなその声は、聞く者の精神を引き裂き、握り潰すようなものであったが、彼女のロングソードは魔物の胸を確かに貫いていた。

「これで……、仕舞いです。冥界に還りなさい！」

血と炎を混ぜたような肌をした悪鬼。魔神とも呼ばれ、周辺にあつた村々を廃墟と化した存在の最期の刻。吹き出したどす黒い返り血を、剣を握った両手に浴びながら、得物を引き抜くと、悍ましく逞しい体軀が地に伏した。

「グオオ……、人の子の……分際で……。その身に、わ、禍……ヲ、淫蕩に、墮チヨ……」

乾ききつた大地のように悪鬼の肉体に鱗が入り、その身は砂塵となつて散つていった。

「はあ、はあ、これで、村の人々も安心して暮らせる。そう、これが私の使命ですもの」

少しだけ癖のある艶やかな長い金髪、後ろ髪を二つ結わえた少女。気の強さと真面目さを併せ持った印象を与える瞳に、シャープな鼻筋。瑞々しい唇から溢れる健康的な色香と、凛々しさと可憐さを共存させる姿。古き神殿に巣食う魔神の討伐を依頼した王さえ、初見でうっとりとしたような溜め息を漏らしていた。

彼女は、やがて世界を救うと大賢者が予言し勇者であり、名をエティアといった。

良く実つたメロンのような乳房に、引き締まった腰周り、食べごろの桃を思わせる臀部といった肢体を焦げ茶色の全身タイツのインナーに包み、ミスリルの腰ガードと胸当て、膝までのレッグガード、そして、両手にはガントレットをしていたが、

「悪鬼の返り血……、嫌な臭い……」

剣を振ると同時に振り払おうとするが、そう簡単には取れるものではなかった。魔物の血は、金属であ

るガントレットに浸食するように、エティアの両手に染みしてくる。

（熱い……、酸性の毒？）

一抹の不安を覚えるが、直ぐに痺れるような熱さは消えていった。討伐の報告の為、王都に戻る途中の小川で清めると、もう今わの際に発した悪鬼の言葉など忘れてしまつていた。

＊

王都に入る橋に陣取つた衛兵に誇らしげに挨拶し、町の中へ。小さな国であるが、王都には人々が集まり、石畳の道路に煉瓦造りの家々が立ち並んでいた。勇者様、と声を掛けてくれる町人らに軽く手を振りながら、このまま報告の為、真つ直ぐ王宮へと向かうつもりでいる。

ところが、町の中央の道を半分ほど進んだ辺りから、羨望を込めた人々の視線に変化が生じだしてきた。女は少し慌てた様子で頬を赤らめ、男はだらしなく口元を緩めている。

（何か……変でしょうか？ えっ？）

強く突き刺すような視線を胸元に感じて、顔をそちらに向けると、

「ええっ!？」

胸当ての片方のカップが完全にずれて、豊乳の扇情的な形状が露わになつていった。焦げ茶色のインナーには包まれているが、聖蟲の幼虫の糸から作られた彼女の肉体を包んだタイツは、非常に軽く、薄く、動きやすく、魔法への耐性が高い代わりに、ほとんど裸に近い。

「キヤアッ!」

女勇者の顔が、火が出るように真っ赤になつて、豊満で形良い釣鐘状の乳房も、乳輪から乳首の形状も浮かんた、胸元を両手で覆い隠そうとする。

だが、手は動かない。感覚はある。なのに、意思も反射も無視して、腕は止まったままだ。

（いったい、いつの間に外れてしまったの？ それに、何で、手が動かない？）

鼓動を高鳴らせたまま、動け、と必死で念じていると、やつと両手は動き始めた。だが、それは胸元までは上がらず、腰ガードの金具に指先が掛かつていく。

「え……!? ちょっと、何をして……」

往來を歩いていた人々も何事かと立ち止まった。大人も子供も、男も女も大勢いる中で、腰から股間を覆つていた防具を美麗な女勇者が外していく。自分の意思とは無関係に、カチ……っ、ミスリルの防具の金具は外され、石畳の道に落ちていった。

「イヤ……ッ!」

おお、と劣情の込められた、唸るような歓声が周囲から聞こえてくる。何故なら、びつちりと肉体に張り付いた全身タイツの下に、エティアは何も身に付けてはいなかった。柔らかく良く肉付いたお尻のそそる球形が、谷間の陰影も濃厚に浮かんている。薄い恥毛の股間部には、土手肉から強烈に牝を主張する切れ込みが、しつかりと確認できてしまった。

「み、見ないでください」

羞恥の焦りの中で、慌ててしゃがみ込む。凛々しさと慈愛に満ちた表情だけを見させてきた聖女のような勇者が、泣きそうに眉根を寄せて、ぐつと口角を下ろした。

（いったい、どうしてしまつたというの？ 人前で、こんな恥ずかしい姿を晒して……、まさか!）

——その身に、禍を——

悪鬼の残した言葉を思い出してハッとする。聞いたことがあつた。禍神として恐れられた古い魔物の中には、呪いを齎す者がいるということ。

「う……、手が……」

それは悪鬼の返り血を浴びた場所。痺れを伴つたこの熱さはまさしく呪いを受けた証であろう。

このままじゃがみ込んでいるわけにもいかない。一時、恥ずかしい思いをしても、教会に急ぎ、早く呪いを解いてもらわなくてはならなかった。幸い、返り血を浴びていない足は自由だ。

「おつ、立ち上がったぞ」

「うほつ、オッパイでけえ……。ケツもぶりぶり」

「あれ、西から来た勇者様だろ。あんなエロい格好して、やつぱ、常人とは感覚が違うのかね」

ひそひそと囁かれる声が耳元に届く。それは羨望であつた時よりも、はつきりと聞こえるようで、顔を真っ赤に染めながら俯いてしまう。

（い、いやらしい目で、私の体が見られて……）

早足で、駆けようとする。すると、やけに両脚が重いことに気付いた。

呪いの効果が、手だけでなく、全身に回り始めている。ゾッと顔面が蒼白になった。このまま体中が呪いに侵されれば、自分の意思と関係なく、何をしでかさか分からない。

「早くしないと……、このままじゃ、きやつ、何？」

両手が勝手に上がって、後頭部で組まれた。脇の下を露わにするような挑発的な格好になって、これでは肉体を誇示しているようではないか。

ゆつくりと歩きながら、羞恥に身体が熱を帯び、全身に汗が浮かんでくる。擦れ違う町の人々は、エティアを見かけると、一瞬、ぎよつと瞳を丸めて立ち止まり、男ならば、ニタニタと笑いながら後を追ってきた。

「違うんです、これは……、こんな恥ずかしい格好、したくないのに……」

腕を上げて、十分すぎる質量を感じさせる胸の肉果実が、たぶたと揺れ動き、その柔らかそうな重量感に多くの視線が集中していく。それが敏感に分かって、自分が性的な対象と見られていることを強く意識してしまう。

「おい、見るよ。乳首がどんどん勃つてきやがる。うへえ、スケベだねえ」

誰かが、周りの者にも聞こえるように言つた。すると、一斉に注ぎ込まれた視線が、全身タイツから浮き上がった乳房の先端に突き刺さってくる。

「い、いやあ……。乳首つ、どうして？ ん……っ」

揺れる豊満な肉果実の動きに、微かにタイツの内側に擦れる乳首。発情を示してくつきりと円錐状の形が現われて、羞恥に全身が蒸れてくるようだ。

「おいおい、やらしい格好見せつけて、感じてんじやねえの」

後をつけてきた男の一人が呟いた言葉は、強烈な衝撃をもつて、女勇者の心を揺さぶつた。

（か、感じている？ 私が……）

ジンと子宮が痺れた気がした。露出癖のある痴女のように思われたのか。民衆の期待を背負い、聖女として慕われてきた自分が。

不特定多数に肉体を見られて、いやらしい視線に晒されて、そんなことで勇者が興奮するはずなどありえない。

（そうだわ、これも、呪いのせいです。でなきや……、ち、乳首がこんなに膨らんじやうなんて）

全身タイツが張り付き、牝裂も浮かんだ鼠蹊部がやけにジメジメとしてきてしまう。痒みに似た疼きを覚えて、歩くごとに擦れるワレメ内の粘膜が熱い町の人々の視線を浴び続けていくと、恥ずかしさに泣きそうになるのに、どうしてか高揚と気分が高まつてしまう。

「こ、このままじゃ、おかしくなりそう。隠したい……、あつ……」

自分の望みに応えてくれたのか、腕がやつと下りていく。呪いの効果が薄らいだのか？ 片手は乳房に添えられ、もう一方は、覆うように掌が股間を塞いでいった。

（良かった……。これで、少しは、ひやつ!）

汗ばんだ肉体を電流が駆け抜けたようだった。ビクツと身が痙攣を起こし、一度立ち止まって全身を震わせてしまう。

ガントレットの硬い指先が、全身タイツ越しに陰裂をなぞっている。左方は釣鐘状の豊満な乳房を下から持ち上げるように握り、五指を柔肉に沈み込ませながら、揉みしだいていた。

「私の手、な、何をして……、いや、変なところ、弄っちゃ、んつ……」

薄いタイツの生地越しに刺激を受けて、早熟な巨乳の肉内に、波立つ悦楽の波紋が広がっていく。自らの手で、芸術的なエロスの形状に、猥褻さを濃厚にさせた歪みを滲ませ、視覚的に男らの衝動を煽つてしまう。

右の中指は、股間の切れ込んだスジに割り込もうとするように減り込んで、残りの四本は女陰の微肉を捏ねていた。くねる卑猥な指の動きは、周囲から丸分かりで、

「おいおい、とうとうオナニーしだしたぞ」

強い羞恥に心が切り刻まれてしまうのだ。

涙ぐみながらも、性感帯に与えられる刺激に、いやらしい快感が湧いてしまう。恥ずかしいと思えば思うほどに、ゾクゾクと全身を甘美な痺れが巡っていた。

「う……んつ、んんつ……、み、見ないで、下さい。イヤあ……。おかしな気分になるうううつ」

もう耐えられない。真っ直ぐに協会に向かうつもりだったが、まずは路地裏にでも隠れよう。再び歩き始めたその時、指先が鋭敏な肉芽を捉えた。

「ヒッ! そこつ、ダメ、ダメえ——っ!」

膨大な快楽の塊が、一気に弾けたようだった。それ以上の指の侵攻を抑えるように、むっちりした太股をきつく閉じる。もう一步も歩くことはでき

エンジョの無茶ブリに巻き込まれるマキナ！ 無口な美少女の運命は!?



コミックス
第1巻
好評につき増刷出来！
思春期なアダム
絶賛発売中!!

第10話

思春期なアダム

E V I L E Y E S

web 版コミックヴァルキリーでも連載中!
<http://www.comic- Valkyrie.com/>

web版vol.15表紙は今号ピンナップイラストのノーダメージver.だよ!

天海雪乃

原作: かさ
ざかき 幸

早くその子にも
しなさいよ

あたしにもしたんだから
できるでしょ



前号までのあらすじ

睦月による身体への愛撫で戦いのダメージを癒やすエンジュ。だがその痴態を同級生マキナが目撃。激怒するエンジュは睦月へマキナにも「恥ずかしいこと」をするよう強要し…。

ズイッ

やれ

で...でも...

できないよ
伊部草さんが
怒る.....

私は
問題ない

ぽち

うわ!
ちよっと...

ぽんぽん

勝手に中に
入ったことには
責任がある

償いはする

きゅん

くぬ..

き...着やせ
するのね.....

ほら睦月!
男ってこーゆーの
ウレシイんでしょ
役得じゃない

うわわ!

あ

ご..
ごめん!

.....

伊部草さん：
ほんとにあの
伊部草マキナさん
なんだ

春からずっと
気になってた
憧れのクラスメイト

一度でいいから
話してみたくて
いつも失敗して
きたんだ

その子が裸で
僕の目の前に
いるなんて……

きれいな瞳……
なんだか吸い寄せ
られるみたい……



…まったく睦月のヤツ
あたしときより
ずいぶん嬉しそ……

!!



あれ……僕……
なにをして……



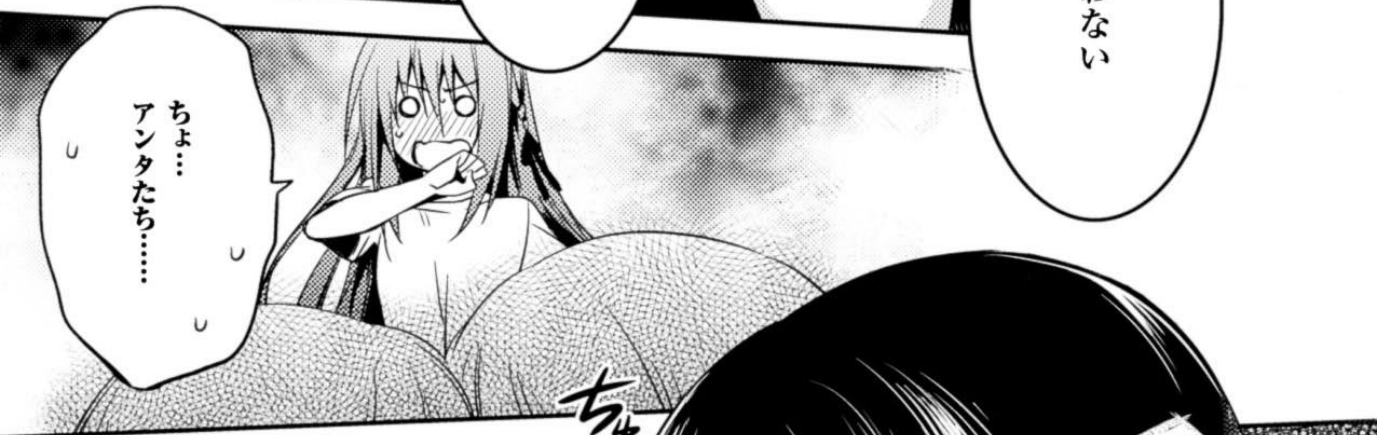
ふわっ！
ご…ゴメン
伊部草さん!!
そのっ…ま…
間違えた…!



藤田君の唇……

不快じゃない

構わない



ちょ……
アンタたち……



伊部草さんの口
美味しい……
リンゴの匂いがする

んふん……っ

……っ
……ふう……

……藤田……
……くん

甘くて……
もっと色んなところ
食べちゃいたい

伊部草さんの
身体…エッチだね

ちゃうん

あ…んっ……

……ココも
濡れてる……

ワ…

んあ……っ

てん

ちょっと…
二人とも……

モシ

なに…この…
変な感覚……

ハ…ハ…ハ

ス

こんなコトして
いいのかな

ん……ん

でも……からだ
が止まらない

くふあ……は……
ふ……んう

……ふじた……
……くん

……したい

伊部草さんを
……僕のものに
したい……

ツ……!



あっ...あ...

ビクビク

へたあ...

このカンシ...
蛇眼...!?

...睦月の右目に
変化はない...
のに...なんで...!

ん...

あ...っ

...っ...



……しても
いい？

……伊部草さん

……

優しく……
……して……

はぁ……
はぁ

魔法少女リリナ

異種交配の罠

小説 ほむらりゅう 火村龍

挿絵 ILLUSTRATION ユズリハ



最強の魔物を交配させるため、
豊満な肢体の魔法少女は実験体に堕ちる！

「リリナさん！ここは私たちに任せて、先に行ってください」

三体のオーガを打ち倒したリリナに数人の魔法少女が駆け寄り、叫んだ。要塞突入直後、四方八方からわき出た魔族により、要塞の大広間は敵味方入り交じる混戦状態になっている。敵の最終防衛ライン、補給線のご真ん中ということもあって、敵が文字通り無限に現れる。オーガやゴブリン、スライムや獣人、魚人——数ヶ月前まで人間が空想上のものと考えていた化物が、魔法少女の動きを拘束する魔具を振りかざし襲ってくるのだ。

リリナは唇を噛んだ。確かにこの混戦状態では、たとえ自分がいたとしてもいきなり戦況をひっくり返すことは難しい。単騎で突破し、敵の首領を叩くべきだ。持久戦がこちらに不利であることは明白なのだから。

「きやああああつー！」「くうつ、だ、だめ……アアツ、リリナ……急いでっ」いまこの瞬間も、リリナの目の前で動きの鈍った二人の戦士が触手に絡みつかれ、転移魔法により連れ去られてしまう。リリナは意を決すると、魔族の包囲網に一人突撃を仕掛けた。

「どきなさいっ！はあああつー！」リリナの全身が魔力に包み込まれ、魔法のヒロインは光の矢となって突き進んだ。リリナの身体に触れた魔族は悲鳴を上げて消滅する。

リリナが包囲網を突破するのに一分とかならなかった。リリナの力を知っ

ているからか、魔族たちは追ってこない。それよりも、リリナ以外の戦士が大広間を突破しないよう、包囲網にいた穴を埋めるように動いていた。

「あなたたちさえ現れなければ——」要塞の奥へと続く階段に仁王立ちする化物共を軽々と掃しつつ、リリナは叫びた。

人間の、特に純粋な心を持った少女の中に眠る魔力を求めて異世界の魔族が侵攻してきたのは、いまから数ヶ月前のことだった。人間の武器では倒せない怪物を前に、人類は為す術がないように思われた。だが、人の魔力とは異なる魔力を有した化物との接触により、少女たちの魔法力が覚醒した。魔法少女となった女の子たちは、地球を守るために変身し、魔族軍と戦い始めたのだ。

そして、今日この日が、最後の闘いとなる。集結した少女たちは決死の思いで力を振るい、魔族たちを本拠地の要塞まで追い込んでいた。

リリナは一人要塞の奥へと走る。目的は二つ。

捕らわれた仲間たちを救い出すこと。そして、この魔族たちを指揮する、魔法学者クロウプを倒すこと。

*

要塞最奥にある研究室——。大量の魔具、計測機器が並ぶ広大な部屋で、一人の男が宙に浮かんだ映像を見つめていた。

映像の中では、レモン色の魔法少女が数多の敵を一人で打ち倒し、要塞の奥へと走っていた。

ロングヘアが靡いている。ふつくとした顔に、優しいような垂れ目。しかし、その瞳は魔族を前にして凜とした光を湛え、薄い黄色に染まっている。戦場には似つかわしくない美少女だ。さらに、身につけている衣装も、普通の人間が思い浮かべる戦闘服とはかけ離れている。

それはレモン色を基調とした、フェティッシュなドレスコスチュームだ。腰回りをキュッと締めつけ、彼女の豊かな身体の中でも特に目立つ胸の膨らみを殊更に強調していた。大きなヒップに押し上げられたミニスカートから伸びる両脚、その脚線美は少女の瑞々しさと、お姉さん然とした早熟な乙女の危うい部分が混ざり、太ももに食い込むニーソックスによって、牝の視線を引くものになっている。膝から下は美脚を守るロングブーツ。両腕には、肘近くまでのやや短めな手袋。右手に握られているのは、遠距離から広範囲へ魔法を放つための宝珠がついた、自身の身長ほどもある杖だ。

それが魔法少女リリナ。魔族の侵攻直後に覚醒した戦士にして、ずば抜けた力を持った女の子。

「戦闘スタイルは遠方からの魔力砲による攻撃——その威力は私の作り出した強化オークも一撃で倒せるほど。素晴らしい、そして美しい……！」

一人呟き、男は嘆息した。

男の名はクロウプ。リリナを始めとした魔法少女たちが目の敵になっている狂気の魔法学者であった。

クロウプは、次々に配下の兵をなぎ倒すリリナの画から、ガラスで仕切られた実験室へ視線を移した。

そこにあつたのは触手の海だった。無数の触手が蠢き、その中ではこれまでに捕らえた百人以上に及ぶ魔法少女たちが、腔に触手を挿入されて喘いでいる。

実験室の中央にはカプセルがあつた。培養液に満ちた容器の中で、なにかが蠢いている。カプセル上部には幾本もの触手が入れ替わり尾を挿入しており、少女戦士たちが絶頂するたびに放出される光の魔力を、カプセル内のそれに与えていた。カプセルに閉じ込められたモノが激しく鼓動する。

「もうすぐ目覚める……」

クロウプはすべての準備が整ったことを悟って、再びリリナの映像に振り返った。リリナはもう、クロウプの研究室に迫っていた。

要塞全体から、黒い欲望がムクムクと膨れあがり、満ちていくのがわかった。要塞内の各部で、異形の牝共がリリナの姿を見ているのだ。

煌めく髪、最前線で闘い続けたことによる熱い吐息、流れる汗。蹴り上げる脚の脚線美、ブーツに付着した汚れに、汗でびっちょりと吸い付いた手袋。翻ったスカートからチラリと覗くシヨ

「ッ。汗にまみれ、食い込み、半分透けてスジが見える。そして、お姉さん然とした柔らかい容姿に、嗜虐心をそそる精一杯吊り上げた垂れ目。」

「さあ、始めましょう」

クロウブは、シヨ一の始まりを告げるように、一人大きく手を広げた。

直後、扉が開き、レモン色の少女が飛び込んできた。

＊

「クロウブ……ッ!!」

リリナは憎き魔学者を睨み付けた。目の前に立つこの男こそが、魔族を率いて平和を乱した張本人なのだ。

さらに、クロウブの背後に見えるガラスを見、怒りに震える。その向こうにあるものを、リリナたちは何度も見せられてきた。快楽による魔力の抽出、そして実験。

「許せない——と、リリナは杖を握りしめる。」

「ようこそ、魔法少女リリナ。こうして直に会うのは初めてですね。私が、魔学者クロウブです」

「クロウブ……。ここであなたも終わりです。あなたを倒し、すべての魔物たちはわたしの仲間がやつつけます」リリナは魔力を練り上げ、ゆつくりとクロウブに近づいていく。背後で扉が閉まるのを感じた。クロウブの研究室——結界に守られた機器が壁際に並んでいる。金属製の床と壁。一歩進むたび、ブーツがカツンと音を立てた。魔力が膨れ上がり、リリナは杖を振

り上げる。そして振り下ろそうとした瞬間——それを狙ったようにクロウブが口を開いた。

「この瞬間を、ずっと待っていました」

「待っていた？」敵の余裕たっぷりの声色に、リリナは思わず動きを止めた。

「あなたを初めて見たとき、私は震えた。あなたの力、それはあなたが思っている以上に素晴らしいものです」

クロウブは両手を広げた。リリナが攻撃してこないことを知っているかのように。事実、リリナはクロウブの言葉に攻撃することを忘れていた。

「いくら魔力を消費しても、数時間魔法を使わなければ完全に回復する力、そして、魔力自体も、私の作り出した改魔などとは比べものにならない」

リリナが口を挟む間もない。驚いていたのだ。自分が他の少女たちよりも強いことは自覚していたが、それがどの程度のものであるかははつきりとわかっていなかった。それを、あろうことか敵の方がよく分析していたのだ。

男は言葉が続ける。

「あなたも知っているように、私がここに来た理由は、あなたたちの魔力を利用しさらに強い魔物を生み出すことだった。だからあなたたちを捕らえていた。否、捕らえようとしていた。だがあなたを見たとき、私は気づいた。実験はあなた一人で十分——それどころか、よりよい結果を生み出せると。それ以来、私はあなたの仲間を捕らえながら、あなたを無傷で捕らえる策を

練っていたのです」

「な……ッ」

リリナは息をのみ、絶句した。同時に戦慄する。さらに魔力を練り上げる。魔法少女の本能が叫んでいる。

「ここにいるのは危険だ。」

リリナを中心として魔力の渦が発生する。クロウブは目を細め、昂奮した様子で早口に叫ぶ。

「驚きましたか？ いえ、薄々気づいていたはずだ。いくら魔力が強いとはいえ、数ヶ月前に初めて闘いに身を投じたのに、なぜこうも魔物たちに勝つことができるのかと。数で押されれば負けるはずなのに。そうです、ここに誘い込むためだったのです。あなたが決して逃げられない場所、あなた一人——これがあなたを捕らえることができる可能性が一番高い。」

あの包囲網を突破できるのはあなたのみ。そして配下の魔物は皆あなたを追わなかった。そう指示していたからです。あなたの力は本当に強い。傷つけずに捕らえるのは困難を極める。決して正面から闘わぬようにと厳命しました。正面から闘った場合、やられたフリをして撤退せよと。

そして、最後の餌はこの私自身だ。犯される仲間の映像を何度も見せ、私への怒りを増幅させ、そして私自身が餌となつてあなたをこの場所におびき寄せる。すべては策——あなたはいまここに来た。そしてここで、あなたは倒れるのです」

クロウブの演説が終わるか終わらないかの内に、リリナは叫んだ。

「……その策はまだ成っていません！ その前に、あなたを倒しますッ」

杖を突き出して魔法を放つ。指向性を持った光が、クロウブに向かって突き進んだ。

光がクロウブを呑み込む——その刹那、ガラスが砕けるような音が鳴り響いた。リリナの放った魔力球が爆発を起し、部屋の内部が閃光に満ちる。光が収まり、視界が元に戻ったとき、少女は見た。

クロウブはまだ立っていた。薄ら笑いこそ消えていたが、それは彼が窮地に陥ったことを表しているわけではない。男の瞳はギラギラと光り、強い欲望を持った狂気の魔学者の眼差しで目の前のものを観察している。

リリナの攻撃からクロウブを守ったもの。それは巨大なカブセルであった。攻撃によりカブセルは砕け、中に溜まっていた緑色の液体が床に流れている。そして中から這い出してきたのは、ブヨブヨとした人型の魔物だった。

軟体生物を思わせるような質感の肌だ。フジツボのような突起が無数に生え揃い、それからドロドロと粘つく液体が漏れている。顔はなく、目や鼻が存在するのかわかるか判然としない。リリナにのしかかれるほどの体軀は、横幅も異常に大きかった。

見たこともない魔物だが、リリナは眉をひそめた。姿を見せた魔物は、こ

のわずかな間にも、身体がドロドロと溶け始めていたのだ。

「こいつはなんなの？　これがクロウブの策？　でも、勝手に溶けてる……？　いいえ、それよりも先にクロウブを……」

「はああ……っ」

リリナは、魔物の横に回り込み再びクロウブを捉えようと、数発の小さな弾を撃ち出す。

だが、その攻撃は届かない。魔物が主人を守るために巨体を傾け、リリナの攻撃を受け止めたのだ。「グギギギア！」と、不快な叫びが響き渡った。

ビシヤッ、ビシヤアアアアッ！！
攻撃の衝撃で、魔物の突起から緑色の粘液が飛び散った。部屋中に飛び散るそれは当然リリナにも降り注ぐ。リリナは「きゃっ」と驚き、慌てて防護壁を張ったが、顔や身体は防げたものの、手袋やスカート、太もも、ブーツなどはべちゃべちゃと粘液まみれになってしまった。

「くうっ！　き、汚い……」

魔法少女は魔物を睨み付けた。この化け物を倒さなければ、クロウブには届かないようだ。

だが、この魔物を倒すのは難しくはなさそうだった。

リリナの攻撃を受けた魔物は一層苦しむ、軟体をぐねぐねと振り回すようにしていき、溶けていた。鈍重な動きでリリナに近寄ってはいるが、その歩みはナメクジのように遅く、まるで

脅威ではない。

「クロウブ、あなたの実験は失敗だったようね。こんな魔物では、わたしを捕らえることなんてできませんっ」

魔物の後ろに隠れる魔学者に言い放つと、リリナは再び魔力を練り上げようとした。

「これで終わりです！　はああああ……ッあ、え……!!」

敵の策は破れた——勝利を確信した表情は一転、驚愕に変わった。

「どうしました、リリナ？」

「ああ、どうして……!!　魔法が撃てないっ！」

リリナは杖を持った右手を押さえ思わず叫んでしまった。魔力は確かにリリナの中にあつて、吸われている様子もなにもない。なのに、なぜか魔法を放とうとすると魔力が堰き止められ、身体の中に戻っていつてしまうのだ。

「こ、これは……くうっ、クロウブ、なにをしたの!？」

「フハハハッ！　実験は成功ですよ、魔法少女リリナ。この魔物はあなたを捕らえるために生み出した特攻兵器だ。カプセルから出た時点で身体は融解が始まるが、溶け出した粘液に触れると魔法少女の魔力を乱すのです。そして、一切の魔法を使えなくする」

「そ、そんな……ああっ」

（コスチュームの魔力も……ま、まずいわ……身体が、重い……!）

クロウブの言葉が真実であることは、リリナの身体が証明している。少女の

身体を羽のように軽くし、魔物たちを翻弄する運動能力を授けていたスーツも、リリナの魔力から生まれたもの。その魔力が乱されたいま、粘液まみれになったコスチュームは逆にリリナの動きを束縛してしまっていた。

「さあ、やれ……!」

悦びを押殺したクロウブの声で、魔物はリリナに迫っていく。

「こ、来ないでっ。え、あ……う、動けない!!　あ、脚が……!」

リリナは重い身体を引きずって距離を取ろうとした。だが、脚を動かすことができない。ブーツに付着した粘液が地面にへばりついていたのである。

もたつくリリナに魔物が覆い被さる。

「やめて……触らないでください……ひぐっ、あ、熱っ……ああっ!!」

ほんの数十分前で、魔物共を蹴散らしていた魔法少女がいま、改造魔物にのしかかられ、悲鳴を上げてガクガクと震えていた。

ネバネバした魔物の身体がリリナを抱き込み、熱と気持ち悪い感触でもって責め立てる。リリナは呻き、太ももをぶるぶると揺らした。

「わ、わたし、わたしは負けません……」

「負けずには、ダメええ……」

魔力はあるのだ。なのに、それを魔法の力として外に放つことができない。そのもどかしさに焦りを覚えずにはいられない。いくら負けまいと自身を鼓舞しても、魔力ではなく戦闘力のみを奪う魔物によって、リリナは窮地に立

たされてしまっていた。

「ク、クロウブ……!」

（クロウブさえ、倒せば……）

リリナは膝を震わせ、いまにも後ろに倒れそうになりながら、クロウブに杖を向ける。すでに全身は粘液まみれで、揺れる杖の先端についた宝珠に魔力の輝きはなかった。

敗北寸前ヒロインの無様に、クロウブは笑い、勝利を宣言した。

「言っただけでしょう。『特攻兵器』だと」

魔物の身体が膨れた。熱が上昇し、溶け出す身体から蒸気が発生する。

「う、うそ……ま、待って……!」

とリリナが恐怖に目を見開く。だが、魔物はがっちりとしてリリナの身体を掴んで放さなかった。

「きやあああああ……!!」

リリナの悲鳴は、魔物の爆発によって掻き消された。クロウブの張った結界にビチャビチャと粘液が付着し流れ落ちていく。研究室内がもわもわと湯気立ち、緑色をしたエキスマみれになっていた。

「あ、あ……あが……う、あ……」

杖が宙を舞い、乾いた音を立てて地面に落ちると、粉々に砕けた。

部屋中央では、最強の魔法少女が無様な敗北姿を晒していた。リリナは未だに立っていたが、その瞳は虚ろに白目を剥いており、激しい衝撃に失神寸前であった。

美しい戦士のあられもない姿にクロウブはぞわぞわと昂奮する。そして、

リリナに近寄り、額を指で押した。
「う、ああああ……」

リリナはなんの抵抗もせずに倒れると、ビクンビクンと陸に揚げられた魚のように痙攣し、気を失ってしまった。

「ようやく本来の実験に入れますね」

ゴ布林たちが入ってきて、気絶したリリナを運んでいく。それを見送り、クロウプはほくそ笑むのだった。

＊

「ようやく捕らえたぜ、リリナちゃん」
「よくもいままで散々やってくれたな」

要塞内部の実験室。リリナ専用には作られた部屋で、囚われの変身少女はゴ布林たちにその豊富な肢体を好き勝手に触られていた。

「ううっ、は、離さないでっ！」

リリナの両手は天井から伸びた触手によって頭上で拘束されている。やはり魔法の力は使えず、近づいてくる小鬼に、少女は抗う術を持たなかった。

せめてもの抵抗と放った蹴りは容易く搦め捕られ、開脚させられる。スカートがめくれ、フリルのついた可愛らしい白ショーツが露わになった。

「やめてっ、み、見ないでえッ!!」

「白のショーツだな」「見た目の割に、ずいぶんガキっぽいじゃねえか」「他の奴らはもつと派手だったがな」

「う、うう……」

（いやああ、は、恥ずかしい……）

リリナは身を振った。粘液のせいで湿ったコスチュームは身体に張り付き、リリナの身体のラインを疊感的に強調

してしまう。それは、色欲に狂うゴ布林にとって格好の餌であった。

「下着の色なんざどうでもいいんだよ。見るよこの胸。ハハッ、すげえ柔らかいぞ」「マンコも肉がたっぷり乗ってるぜ。押し返してくる」「服を破いて、中身を見てみたいぜ」

背後に回り込んだゴ布林に巨乳を揉みしだかれ、さらに乙女の大事な部分をつつかれてしまう。イヤらしい手つきが身体のあるところをまさぐり、初心なヒロインは気色悪さにわなわなと震えた。初めてぶつけられた牡の欲望に恐怖を覚えるも、リリナは必死に自分を鼓舞した。

「はあんっ！ ああつ、やめなさい、こんなことしても……ううっ、わたしはなんともありませんっ……あんっ、コスチュームだつて、絶対に破けたりしないんだから……」

魔力が乱され、ダメージを受けた状態でも、魔法のスーツの防御力はなんとか残っている。リリナの言う通り、ゴ布林がどれだけ爪を立てようとスーツは破けなかった。

「そのようですな」
ギイと扉が開き、クロウプが姿を表す。リリナは魔学者を睨み付け、拘束されながらも決して折れないといった風に唇を噛みしめる。

クロウプは両手を背中に回したままリリナを見下ろした。牡の欲望を抑えた研究者の瞳であった。
「さて、実験を始めましょう」

魔学者のその台詞が合図だった。ゴ布林たちは腰布を取り去り、自身の股間を露わにする。

「きやあつ?! そ、そんなものを見せないでっ！」

リリナは慌てて目を背けた。脳裏に焼き付いた肉棒は雄々しくそそり立っており、キノコの傘のような亀頭、鈴口から溢れる汁でヌラヌラと濡れていた。目を閉じて、鼻から牡の濃いニオイが入り込んでくる。リリナは頬一杯に空気を溜め、うーうーと唸り首を振った。

「なにを驚いているんです？ これが実験ですよ」

閉じられない耳に、クロウプの声が入ってくる。それは正気を疑うような内容だった。

「これから、あなたには様々な魔族の子を孕んでもらいます。子供は胎内であなたの魔力を吸い、新たな力を身につけて生まれてくる。人間の持つ魔力と相性がいい魔族はなにか、どんな利用法があるのか。それをじっくり、調べさせてもらいますよ」

「わ、わたしが、魔物の子を……!!
そ、そんな、無理よ、人間が魔族の子を産めるわけ……!!」

リリナは思わず目を見開いた。捕らえられた仲間たちがどんなことをされているのかは知っていた。だから、陵辱されてしまうことも半ば覚悟していた。だが、孕まされるなどとは思っていませんでした。

「それが、可能なのです」

クロウプはニヤリと笑み、背中に回していた手を前に持ってきた。手の中にあったのは、ナマコのようなぼつとりとした物体であった。繊毛が生え揃った口から、ドクドクと紫色の液体が漏れている。リリナは気色悪い外見とエキスの色味に「うっ」と顔を背けた。

ニオイも、むせ返るような悪臭だ。手が拘束されていなければ鼻を摘みたいくらいだった。

クロウプは得意げに言った。

「この液体をあなたの股間に注ぎ込む。薬液はあなたの膣から子宮、身体全体を、魔族の精子を受け入れるように改造するのです」

「なんですって……?! いやっ。そんなもの入れないでっ！ だ、だめです、いやいやあああつ」

それを聞いたリリナはじたばたと暴れる。しかし、両手を触手に、抵抗することは叶わない。毒壺がショーツに押しつけられてしまう。

「くはあああああつ」

「いい悲鳴ですな。このエキスをあなたの魔法衣を溶かし、膣に侵入します。せいで抵抗してください」

変身ヒロインの口から熱い吐息が漏れた。毒々しい薬液がショーツに当たり、秘部を守る魔法の力とせめぎ合っているのがわかる。ショーツ越しに感じられるナマコ毒壺の熱さ、グニグニとしたゴムのような質感に、股間がじ

わりと熱を帯び、震えた。

「や、やめてええ……」

「魔力を乱され、ダメージを負ったいまのあなたでは耐えきれないでしょう？ ほら、もう溶け始めましたよ」

「いやあああつ、ま、魔法のパンティーが……あああ、と、溶けちゃだめ……あああああ……」

「ふ、防ぎきれないっ……パンティー溶け……あつ、熱い……アソコがムズムズして……へ、変よお……」

シュウシュウと煙が上がり、魔法少女のショーツが溶けていく。魔のエキスがコスチュームの魔力を侵蝕していくにつれ、また、エキスの生温かい感触が地肌に触れるにつれ、リリナの秘部がいままで感じたことのない疼きを発した。少女戦士は「ううう」と唇を引き結び身を振る。腰をグラインドさせるその動きは先ほどまでとは違い、艶めかしい色香を漂わせていた。

「リリナのマンコは綺麗なピンク色だな」「ああ、処女のニオイがするぜ」「クク、毛も生えてねえ。美味そうだ」醜悪なゴブリンたちの言葉責めにリリナの頬が羞恥に染まる。

「い、言わないでくださいっ、ううっ、み、見るなっ、見ないでえ……」

（なんなの!? み、見られてるのに、くうっ、恥ずかしいのに……ああああ……）ブヨブヨしたのが挿入ってくる！

「ダメ、わたしの初めてがあ……」

魔物たちの言う通りの、薄ピンク色の可憐な処女華が見えたのはほんの一瞬であつた。すぐに紫色の薬液と、毒壺がそれを覆い隠す。クロウプは躊躇いなくナマコ注射器をリリナの秘部に押し込もうとしていた。

「震えていますね。安心してください、これは処女膜を傷つけませんよ」

喉の奥で笑いながら、魔学者は毒壺をズブッと半分ほど腔内に押し込んだ。狭い腔口が押し広げられ、エキスを潤滑油として潜り込んでくる。リリナは「しょ、処女膜が傷つかな

いからって……くはあああつ」と仰け反り、大事な場所に侵入してきたおぞましいものに痙攣する。

「ぬ、抜きなさいっ。こんな、あつ、やめてえっ。ま、負けないわ！ こんなことで……あ、あ……ぶぐうッ」

（エキスが腔内に……あああつ！ 防げない。こんなことが……か、身体が熱い……）こんな初めてえ……」

時折抵抗の言葉を発するものの、リリナは次第に口数が少なくなり、唇を噛みしめ身体を揺らすことが多くなつていった。腕を頭上で拘束され、脚も広げられてるせいで、身体を揺らすと豊富な巨乳のみが、ゆさゆさと激しく、波打つように跳ねた。

「へへ、顔が赤いぞリリナちゃん」「昂奮してるんだろ？」「見ろよ。牝の顔になつてきてるぜ」

ナマコ注射器は完全に腔に入り込んでいた。どぶつ、どぶつとエキスを注入されるたびにピクつくリリナの羞恥心を、ゴブリンたちが煽る。

「そ、そんなわけありません……ち、違うの……あああ、もうやめ……」

リリナの声は一層弱々しく、そして変身前の可憐な少女の色が混じり始めていた。リリナもすでに、自分の身体が魔の薬物によって昂奮していることを自覚している。それは正義のヒロインの高潔な心をもつても抑えきれないほど激しいものであつた。

「いい反応ですね、リリナ。普通の魔法少女なら、このあたりでヨがり狂っていますよ」クロウプが言う。

「その表情、いいですねえ。快楽に屈しない決意しながらも、抑えきれない悦楽に悶える——さあ、もつと見せてください」

魔学者が指を鳴らした。すると、触手が二体、ズルズルとやってきて鎌首をもたげる。頭の先端には極細の針が、そして紫色の毒液が滴っている——。

「な……あ……！ そ、それをどうするつもり!?」

「あなたの敏感な処すべてに、薬を打ち込むのですよ」

「あ、ああ……やだ、む、胸は……ひううううっ!?」

両胸にチクリとした痛みが走り、リリナは悲鳴を上げた。毒針は弱化した魔法のコスチューム、そして肌に張り巡らされた魔力膜を貫通し、過たず乳首を刺したのだ。だが、リリナが悲鳴を上げた理由は痛みによるものではない。刺さった瞬間から注ぎ込まれる、即効性を持った毒液のせいであつた。

（ち、乳首が灼けちゃうっ！ い、弄りたい……。な、なにを考えているの!? ダメよ、みんなを助けるまで、わたしは負けない……）

「こ、こんなことで、わたしをどうにかできるなんて思っ……んぶうっ!?」

「気丈に顔を上げ、叫びかけた少女の口に触手が飛び込んできた。触手はリリナの口内でブルブルと震え、どぶつ、どぶぶつとエキスを放つ。口内で受け止めたエキ스는思った以上に粘つき、重く、リリナは大きな瞳がこぼれてしまいうようなほどに目を見開いて声にならない苦悶を漏らした。」

「口も立派な性感帯になりますからね」

「んぶうっ！ れじゆるる、じゅ……んんん……ッ！」

（く、苦しい……気持ち悪い……ああ、流れ込んじやうっ！ 飲んじや……うう、は、吐き出せない）

喉まで触手が入り込んでいるせいで、リリナはもう毒液を飲む以外に選択肢がなかった。喉奥に流れていくエキ스는身体内部からヒロインの媚体を灼き尽くす。

「これで、すべてですな」

クロウプはそう言うや否や、ナマコ毒壺を思い切り握りつぶした。

どぶつ、じゅぶぶつ、じゅぶぶぶうううっつ!! 注入器に残っていたすべてのエキスが腔に噴射され、それに呼吸するかのように触手たちも乳首と口内に薬液を放つ。





触手に悦ぶ美女!!

はっ

あっ

あんなに仲が
よかったはずなのに

何故?

どうして
こんな事になって
しまったのだろう??

オオ
フォ

オオ

ズン

はあ

ああ

CHEATING

漫画 stem

僕は街の
守衛のイノル
最近夜な夜なする
怪しい声の噂を調べていて

怪しい者の後を
尾行しついに
真相をつきとめたが
捕まってしまった

声の正体は
想像を超えたもの
異形との肉体の狂宴
人と異形との性交の場

そして何より

この乱交集団の
リーダーは
僕の最愛の妻
ラエアだったのだ

ふふふ♥
どうだった？ イノル♥
私と触手との
ガチ・セ・ッ・ウ・ス

わあ♥イノルのちほ
かっちかちだね♥
そんなによかった？
くすくす♥

……ッ
どうして……
こんな事……



うーっ
どうして？

あー

しゃ

太さも♡動きもお♡
ぜんぜん
勝負にならないしい♡

精子の量もお…♡
濃さもお…♡
回数もお…♡

気持ち
いいから♡

決まってるじゃない♡
仕事ばかりの
イノルのち♡ほより

はっ!!



ぐすくす♡
ぐすくす♡

勝負になんない
♡♡♡

はっ

ゴッ



それにイノルに見つかって
ちよとよかった♡
私ね今日新しい人との
結婚式の♡

紹介するね♡
私の新しい
フィア・ン・セ♡



もうダーリンだらあ♡
さっき抜いてあげた
ばかりなのに
もう溜まっちゃったの？♡

もう♡わかった♡
お口で抜き抜き
してあげるね♡♡♡

なんてことだ…
ラエアがッ！
オークなんかと
一緒になるなんて…！



オオーク
だど…っ!?

くすくす♡
イノルなんか比べ物に
ならないくらい
優しくてたましいのよ♡



んっ♡なあに？
ダーリン♡



んっ♡んんっ♡
ふふふ♡相愛わらず
おっきいねっ♡
んっ♡ちゅっ♡

んっ♡ちゅっ♡
ちゅっ♡



どお♡
きもちいい？
ふふふ♡
よかった♡

このまま
ちほのお口も
お掃除するねっ♡



「エアー…」

んっ♡
んんっ♡

ああ！
僕のラエアっ！
ラエアがっ…
他の男ならまだしもッ！

僕の前で
オークの性器を…ッ

タリンの
オークちほ
おいひいよ♡
とまんひやいよ♡

聖騎士牧場

家畜に堕ちた戦姫たち

第二話 身体検査

う え だ

小説／上田ながの

NOVEL

挿絵／

A.S. ヘルメス

ILLUSTRATION

著者近刊

「勘違いしないでよね！アンタの事なんか大好きなんだから！！」呪いで本音しか言えなくなったツンデレお嬢様！



好評発売中！

アルガスタ騎士団への容赦なき品評が始まる！！



人間を運かに凌駕する力を持つ亜人。その女性種のみで構成され、長らくガブランド王国を守り続け、スタ騎士団員たちを待ち受けていた彼女達を亜人増産の為の家畜にするという計画だった！

団をこのような牢の中に？」

なつ!!

様に表情を凍り付かせる。

ただ、騎士団の大半は年若い少女騎士。当然増やすという言葉の意味を理解できない者達もいた。「増やす? でも……どうやって? 私……よく分かりません」

それら少女騎士達の思いを代弁するようにリナが首を傾げる。

「分かりませんか……では、もっと分かりやすく説明致しましょう。つまりですね……貴女達に産んでもらうということです。子供をね」

下っ端騎士に対してでもどこまでも丁寧口調で、バガルドは自身の意図をはっきりと口にした。

「う……産む? え……それ……それ……えええ?」

子供を産む——流石にその意味は分かるらしく、少女騎士達も動揺し始めた。

「……バガルドよ……貴様……本気か?」

「もちろん本気ですよノノン様。この計画……私は必ず成功させます」

「ワシらの意思を無視してか?」

「……ですから、協力してはいただけませんか?我が国の為に赤子を——兵士を産んでいただけませんか?」

グルリッとバガルドは騎士達を見回す。

「チッ……馬鹿なことをいうんじゃないか! 兵士を産めだど? オレ達は家畜じゃねえぞ!」

「そ……そうですね! 子供……赤ちゃんってのはそんな風に産むんじゃないって習いました! 子供は本当に大切な人との間にうける宝物だって」

アルトとリナが抗議の声を上げる。

「そう……巫山戯ないで……」

「小官達を馬鹿にするにも程があります」

「ボクはそんなの絶対嫌だ!」

これに続くように騎士達もバガルドの言葉を否定

した。

「……これが答えです宰相閣下……。そのような計画に私達は従うつもりはない。ですから……ここから出していたきたい」

これが騎士団の総意であるとはっきりと伝える。

「なるほど……お引き受けいただけませんか。それは残念。それでは……心苦しくはありますが、無理矢理にでも妊娠していただくしかありません」

だが、バガルドはフェリア達を解放する気はさらさらならしく、そのようなことをあつさりと言ってきた。

「……無理矢理にでも妊娠じゃと? 主は馬鹿か。ワシら巫人は本当に子を成したい相手以外で妊娠することはない。それくらい、貴様でも知っておるじやろう? 無理矢理など……意味はないぞ」

「ああ、その点なら大丈夫です。その道のプロフェッショナルを呼んでありますから」

「プロフェッショナル?」

バガルドの言葉にノノンが首を傾げる。

この疑問に答えるように、宰相はパチンツと指を鳴らした。

すると、この牢獄に一人の男が入ってくる。

異常なまでに太った男だ。ぎとぎとと全身が脂ぎっている。膨れ上がった頬には、幾つものブツブツができていた。

全身から異様な程に汗が溢れ出している。その量は尋常でなく、身に着けている布製の服がべつとりと身体に張り付くほどだ。

当然の様に臭気も酷い。男が入ってきただけで、嘔吐感すらこみ上げてくる。実際、バガルドや他の兵士達ですら、気分悪そうな表情となっていた。

「けへ……けへへへ……か……か……可愛い牝がいっぱいいるんだあ。けへへへ」

嬉しそうに男は笑う。どこか甲高い声が、耳に不

快だった。

「——なっ!?」

そんな気色悪い男の姿を見た途端、ノノンが絶句するような表情を浮かべる。

「まさか……こ……コスタル」

いや、ノノンだけじゃない。フェリアも、他の騎士達も驚愕に表情を凍り付かせた。

男の名はコスタル——巫人の少女達を攫い、彼女達を激しく陵辱。本来ならば妊娠することなどないはずの少女達を魔術を使って強制的に発情させた上で孕ませ、産ませた子を売っていたという最低の男である。

一年程前、ようやくその居場所を掴み、逮捕。終身刑となり、牢獄に捕らえられているはずだったのに……

「何故? どうしてコスタルが?」

「この男……コスタルの巫人に対する造詣は素晴らしいものがありましてね。どこをどう責めれば、どのような魔術を使えば巫人を発情させることができるのか? それを知り尽くしている。故に……快楽で巫人を堕とし、子を産みたいと懇願させることまで可能なのですよ」

疑問に答えるようにバガルドが口を開く。

「この男に……フェリア殿をはじめとした皆さんを責めていただく。どんな相手であつても子を産みたいと思える程にね。それが……巫人増産計画最初の一步です」

そうすることが当然とでもいう様に、宰相の口調は実にあつさりとしたものだった。

「馬鹿な! そのような計画……巫山戯ている。私達をなんだと思っている! 殿下は! 殿下はご存じなのかこのことを!」

とてもではないが受け入れることなどできない。受け入れられるはずがなかった。第一、そのような

計画をカールラントが認めるはずがない。

「殿下ですか……。確かに、この計画を話した際の方に反対されてしまいました。ですから、今フェリア殿達がこういう状況に置かれていることをあの方は知りません」

「つまり宰相閣下……貴方は殿下の意思を無視しようというのか！」

それでは国家に対する反逆だ。

「確かにそういうことになりすな。実際、こうして私が動いたのは、殿下がいらないからでもある。ですが……これ以外に道はないのです。私はガブランドを護る為であれば、反逆者と罵られても構わない。これは国の……民の為の行いなのです。ですからフェリア殿……そして騎士団の皆さん……」

だが、バガルドはそれをあつさり認める。

認めつつ、グルリツとフェリアをはじめとするアルガスタ騎士団五〇人を改めて見回すと共に、

「元氣な子を産んで下さい」

容赦なくそう告げてきた。

その言葉と共に、鉄格子が開く。同時にバガルドが連れていた一〇〇人近い兵士達が内部に入り込み、騎士団員達を一人一人拘束してきた。

「なっ！ このっ！ 放せっ！ 放しなさいっ！」

両腕を掴まれる。慌ててフェリア——だけでなく騎士団の面々もがき、これを振り払おうとした。

発動する重人としての力。獣の耳が伸び、獣の尻尾が揺れる。

だが——

「な……くっ……さ……ど、どうということだ？ 力が……」

力がはいらねえ！」

「どうして？ なんでえ？」

アルトやリナが戸惑いの声を上げる。

「どうということ？ ち……力が……」

フェリアも、いや。他の騎士達も同様だった。

本来であればどんな少女であっても人間に後れをとるはずなどない重人だというのに、いくら力を入れても彼らの拘束を振り解くことは不可能だった。

「晩餐会で飲まれた薬か……」

「そ……そそ……そうなんだなあ。お……お前らが飲んだ薬は……けへへ……俺が……と……特別に調合したものなんだ。あれを飲むと……お前ら牝はま、まともに力を発揮することができなくなる。けへ、けへへ……人間にも勝てない程になあ」

口惜しそうに呟くと、手を叩きながらコストルが嘲笑を向けてくる。

「気色悪い男になすすべもないまま嘲笑われる——騎士としての矜持が深く傷つく状況だった。だが、今は悔しがつてばかりもいられない。この状況をなんとかしなければならなかった。」

「……この手を離さない。貴方達は自分が何をしたいのか……それを理解しているのですか？」

だからフェリアは自分を拘束する兵達に諭すように語りかける。

バガルドの命に従い、こうして自分達を拘束してはいるけれど、同じガブランド騎士であることに変わりはない。話せば分かってくれるはずだ。

「申し訳ありませんフェリア様。私は……私がしていることの罪深さをよく理解しています。ですが……国の為です」

「家族を護る為には、重人が必要なんです。ですから……お許し下さい」

だが、兵達はこちらの言葉を聞き入れてはくれない。申し訳なさそうな表情を浮かべつつも、フェリアを拘束する腕から力を抜いてはくれない。

「けへへ……そ、そそ……それじゃあ、まずはそいつらの服を、鎧を脱がせるんだ。牝共にはランクがある……くへへ……妊娠しやすい牝と、そうでない牝の二種類のな。だからま……ま、まずは

品質チェックなんだなあ」

そんな彼らにコストルが命じる。男の言葉に兵達は明らかに不快そうな表情を浮かべつつも、フェリアの身体へと視線を向けてきた。

「な……ほ、本気ですか？ や……やめなさい……それは……それだけはっ！」

視線を向けられただけで分かっってしまう。彼らが本気で男の命を実行しようとしていることを……裸にされる——考えるだけで全身が震えそうなおぞましさを感じてしまう。多くの男達の前で肌を晒すなど、あつてはならないことだった。

「おい……そ……そんなことしてみろ！ いくら仲間でも許さねえぞ！ ぶ……ぶっ殺すぞ！」

当然アルトを筆頭に——

「ボクに……ボクに触れるなあ！」

「やめて……やめてええっ！」

他の騎士達も拒絶の声を上げ、抵抗を試みる。しかし、薬の効果はどこまでも強力で——

「あ……あああつ！」

フェリアをはじめとする重人騎士達は身に着けていた鎧を、騎士服を、魔導服を、あつさり引き千切られることとなってしまった。

「これが……フェリア様の身体……」

兵達が剥き出しになったフェリアの肌を見つめてくる。

「うっく……み……見ないでっ！ 見ては……見えてはいけません！」

白い肌が剥き出しになる。カールラントにも見せたことのない形のよい乳房が晒される。キュッと引き締まった括れも、銀色の陰毛に隠された秘部も男達の前に露わにされてしまう。

「……なんて美しいんだ……」

皆の視線が肌に突き刺さる。

（は……恥ずかしい……恥ずかしすぎる……）

全身が燃え上がりそうな程の羞恥を感じた。

同時に――

「殿下……申し訳ありません……殿下……」

カーラントに對する罪悪感も覚えてしまう。

愛しい相手以外に肌を晒す――そのようなこと、絶対にあつてはならないことだった。

「お願いです……もう……見ないでっ!!」

だから必死に訴える。訴えつつ、両手で身体を隠そうとする。しかし、男達は決してフェリアの肢体から視線を外してはくれないし、両腕の拘束も解いてはくれなかった。できることは尻尾で股間部を隠すことくらいである。

「暴れないで下さい。私達は……我が国の英雄である……あ、貴女に傷をつけたくはないのです」

「そうです。これは我が国の……ガブランドの為なのですから……だから、抵抗はしないで下さい」

羞恥に打ち震えるフェリアに向けられるのは氣遣うような言葉。けれど彼らの視線から感じられる感情は、国の英雄である者に向けられるそれではなかった。

発情した牡の視線だ――それくらい、経験の乏しいフェリアにだって分かる。

そして、そんな視線はフェリアだけでなく――

「すげえ……これがアルトの姉御の身体……。胸……でかいな……」

「ノノン様……子供の様だ……しかし、美しい」

アルトやノノン、それに他の騎士達にも向けられていた。

「み……見るな……。見るんじゃねえよ! 馬鹿……」

……馬鹿野郎

アルトの全身が真っ赤に染まっていた。やはり両腕を拘束されている為、身体を隠すことはできない。

掌では収まりきらないほど大きく、それでいて一

切垂れてはいないツンと上向いた乳房に、男達の視線が集中していた。

「許さねえ! てめえら……ぜ……絶対許さねえからな!」

普段通りの強気でアルトは男達を睨む。だが、余程恥ずかしいのだろうか。陰毛に隠された秘部だけは絶対見せたくないというように、腰が引けてしまっていた。

「……主ら……このようなこと、必ず後悔することになるぞ」

羞恥に身体を震わせるアルト同様、ノノンも僅かに頬を赤く染めている。

ただ、それでも人生経験の豊富さからだろうか? 平らな乳房、括れない腰――完全なる幼児体型を晒しつつも、口調は実に冷静なものだった。

「後悔など致しません……これはガブランドの為なのですから」

穢れない少女の様な肢体を興奮した表情で見つめつつも、男達は怯まない。本気でこれが国の為になることと信じているように見えた。

当然、他の騎士達も同様の視線を男達から向けられることになる。

「恥ずかしい……恥ずかしすぎます……」

「……許さない……」

「どうして? ボク達……仲間だったはずなのに……」

……なんで……」

反発心を持つもの、恥ずかしさに身を震わせるもの、今にも泣き出しそうになるもの――騎士達が置かれた状況は最悪だった。

ただ、そんな中でも――

「いやです! ぜ……絶対にいやです! お願い……」

……脱がさないで……イヤですうううっ!!」

リナを含めた五人の騎士達が、未だに抵抗を続けていた。絶対に服は脱がされたくないという様子で、

必死に……必死に……。

「なんだこいつら? どうしてこんな抵抗を? フェリア様より激しいぞ」

その必死な様子は男達でも戸惑う程である。

（そういえば……リナ達は!!）

そこでフェリアは気付く、リナ達の身体はそういう――

「だ……駄目! 許して……許してあげて! その子達だけをお願いします!」

男達の前で抵抗を続ける彼女達の肌を晒させるわけにはいかない。だから必死に訴える。

「……フェリア殿達の焦りよう。なかなか気になりますね。さあ、早くその服を剥ぎ取りなさい」

が、バガルドは無慈悲な命を下す。

「ああ……駄目ええええっ!!」

これを受けた兵達は悲痛な声が響くのが気にせず、容赦なくリナ達の鎧も剥ぎ取った。

「おい……これって……ちんこか?」

「マジだ……こいつら……ちんこが生えてるぞ」

結果、リナ達の肌が、秘部が――露わになる。

本来ならば女の身体にはないはずのもの――ペニ

スの生えた秘部が……。

「そーいや聞いたことがあるぞ。亜人の一部には男女両方の性器を持つてる奴がいるって」

「へえええ……すげえなあ」

興味津々といった様子で兵達は五人のふたなり騎士達の股間をマジマジ見つめた。

「い、いわないで……見ないで……」

羞恥に打ち震えつつ、ふたなり騎士達はフェリア同様、自身の尻尾で股間を隠そうとする。

「隠すな……もつと見せろよ」

だが、男達はそれを許さなかった。余程ふたなりが珍しいのか、尻尾までも掴む。

「なんで? どうして私達……こんな……こんな目

に……助けて……アルトさん……フェリア様……助けて下さい」

絶るような視線が向けられる。

見つめられるだけで胸が痛んだ。

団員達にあんな表情はさせたくない。騎士団のみんなは仲間であり、家族であるから……。

「は……放しなさい！ リナ達を放してっ！！」
だが、力が入らない現状でできることは、ただ叫ぶことだけだった。

が、言葉など男達には届かない。

「けへへ……、なかなかのっ……粒ぞろい……、なんだな。これは……たまた、楽しめそうだな」
騎士達の悲鳴にコスタルは嬉しそうな表情を浮かべると共に――

「そ、それじゃあ……本番を始めるんだな」
そう告げてきた。

「……本番？ 何を……何をするつもり？ 皆に……皆に手を出したら許しません。許さない！ バガルド――王国宰相といえど斬る！！」

「……怖い顔ですね。ですが、そんな顔で睨んだところで無駄です。これはガブランドの――国の決定なのです。貴女方も我が国の騎士であるのなら、大人しく受け入れて下さい」

「国の決定？！ 殿下が留守にしている隙を狙つての卑劣な行為が国の決定？！ 馬鹿なことをいうな！！」
馬鹿げている。受け入れることなどできるはずがない。

だから叫ぶ。殺気を込めた言葉を宰相へ向ける。

しかし、叫びは虚しく響くだけだった。

「で、で……では、まずは騎士団長殿の身体検査からは……始めさせていただきます。けっへ、けへへへへ」

そして、コスタルによる身体検査が始まる。

「これが……き、騎士団長殿のおまんこかあ」
椅子に座ったコスタルが、マジマジとフェリアの秘部を見つめてきた。見られるだけで身体が汚されていくような気さえする下品な視線だ。はつきりいつておぞましい。

が、この視線から逃げることはできなかった。

身体を兵によって拘束されてしまっていたからコスタルの前に、両腕を拘束された上、足を大の字に開かされるといった状態で……。

当然の様に尻尾も押さえられてしまっており、秘部を隠すことできない。

そんなフェリアの秘裂に向かって、コスタルが手を伸ばしてきた。

「や……やめろっ！ 触れるな！ 私に触れるなっ！！ そこは……そこは貴様の様なものに触れてよいところではないっ！！」

このような醜い男に大切な部分に触れられる。あつてはならないことだった。そこに触れていいのはただ一人だけ――。

「貴様あ！ フェリアに手を出すでない！」
「殺すっ！ 必ず殺してやるっ！！」

フェリアの危機に仲間達の声が上がった。全裸状態で拘束されながら、まるで順番待ちでもするように一列に並べられた仲間達の声が……。

が、コスタルは止まらない。そうすることが極当たり前とでもいう様に、秘裂に触れると、クパツと指で大切な部分を容赦なく左右に開いてきた。

鮮やかなピンク色をした筋肉が露わとなる。未だ誰一人――愛しいカールラントすら迎え入れたことのない花卉が……。

「けへへ……獣の牝のくせにき……綺麗なおまんこなんだな。この色……まだ処女か……クンカクンカ……なかなかいい匂いがするぞお」

マジマジと肉花卉を見つめられる。いや、それだけじゃない。露骨に匂いまで嗅がれる。

「これは思った以上に美しい」
「すげえ……あれがフェリア様の……」

コスタルだけでなくバガルドや、他の兵士達にまで……あまりに屈辱的で、恥ずかしい行為だった。

「も……もういいだろ！ 満足しただろ！ もう……もうこれ以上はやめろっ！」

膨れ上がる羞恥心――耐えられそうにない。だから行為の終了を訴えるのだが……。

「ば……ばば……馬鹿をいうな。ここからが検査の本番だぞ……。お前が……に、妊娠しやすい牝かどうかチェックする」
「ちえ……チェック……だと？ な……何を……何をする気だ？」

「何って……ここ……こうするんだなあ」
言葉と同時にコスタルは実に自然な動きで――

じゅつず……じゅつずぶうっ……。

「なっ！ んっく……くうううっ！」
その手垢にまみれた醜い指を、フェリアの膣口に挿し込んできた。

「は……挿入してる？ 私の……わ……私の膣中に……ゆ、指が……こんな……こんな男の指が……」

ただし、あくまでも指先でしかない。それでも下腹部には異物感を覚え、身体中に鳥肌が立つ程のおぞましさを感じた。全身が穢されていくような気さえする。

「ぬ……抜けっ！ 何をしている！ 抜けえっ！」
慌ててもがく。この状況から脱しようと足掻く。

「暴れないで下さいフェリア様」
が、兵達は拘束を解いてはくれない。

「放せっ！ 放せえっ！」
「……けへへ……う、五月蠅い牝なんだな。だが、活きがいい方がお……面白い。さ、さあいくぞ。お前の……に、妊娠度チェックだ！」

233

ニタアツとコスタルの口元が歪む。それと共に醜い男の身体から異常なまでの――

(ま、魔力?)

を感じた。

魔力など何の為に?

思考が混乱する。

その混乱を突くかのように、挿入された指先を通じて――

「くひっ! あっあっ――あああああ!」

パチパチと電流の様な魔力が、フェリアの肉体に流し込まれた。

「かつは……あふああああつ!」

ビクビクッと肉体が激しく震える。

(なんだ……私は……何をされているう?!)

「あっあつ……あうあああああ」

自分の身に何が起きているのか? さっぱり理解できないまま、流され続ける魔力にフェリアはひたすら悶え続けた。

「あっふ……はあつはあつはあつ……な、何をしたら? 貴様……私にな……なに……を……?」

しばらくして魔力波が落ち着く。狼耳の傭人騎士は何度も肩で息をしつつ、コスタルを睨んだ。

「なに? こ……こういうことなんだな」

問いかけに対してコスタルはそう呟くと――

ぐじゅっ! にゅじゅううっ!

「なっ! んっひ! くひいっ!」

ゆっくりと円を描くように指を蠢かせてきた。膣壁を醜い男の指がなぞる。

「あっく……んっんっ――んんんんん!!」

途端に全身に痺れる様な刺激が走った。

(ど……どういこと? な……なに? これは……)

……熱い……熱くなる。あそこが……わ……私の大切な部分が熱く)

同時に下腹部が燃え上がりそうな程に火照り始め

る。更に、ズキズキと秘部が疼き始めるのも感じた。

「な……なんだ? これは……あつあつ……な、何を……んんん……私に……な……にをおお」

ほんの少し指が動くだけで、膝がガクガクと笑うように震える。全身が脱力していく。指の蠢きに合

わせて「あつんっ……はあつはあつ」と、熱い響きの混じった吐息が漏れた。

この感覚――フェリアはこの感覚によく似たものを知っている。

あの日、祝勝会の夜、カールラントと共にした行為で感じた感覚にそっくりだった。

(でも……何故? どうして? 相手は……殿下じやない……こんな……こんな男なのに……)

理解できなかった、これは現実なのか? もしかして夢でも見ているのではないだろうか? とさえ思ってしまう。

けれど、下腹部に感じる感触は本物だった。

しかも、ただ感じるだけではない。はつきりと指の形まで膣壁を通して認識することができてしまつてさえた。

醜い男の指が、柔肉をなぞり、擦り上げる。ほんの少し指を動かされるだけで、ビクッビクッと自然と身体が震えてしまった。

ぐちゅっ……。ぐちゅつぐちゅつぐちゅう……。

秘部からは淫猥な音色まで響き始める。

「濡れてきたぞお」

「ば……馬鹿な! 嘘をつくな! き……貴様のよ

……んっんっ……ような男をあ……相手にぬ……濡れる? そんな……そのようなこと……」

あるはずがない。あつていいはずがなかった。

「言葉でも否定しても……む……無駄なんだな。実

際俺の……くけ……俺の指はお前のまん汁でグシ

ヨグシヨだ。だが、恥じる……ひ、必要はないぞ。お前が感じてしまうのは、とと……当然のことな

んだからなあ」

「当然の……こと? ど……どういう意味!」

「そのままの意味だ。お前の身体は……お……俺の魔法で敏感になつていているんだな」

前置きと共に説明を始める。

「肉体を敏感にして、お前らを絶頂させる。簡単に絶頂く牝はすぐに堕ちる。だから妊娠しやすいCランクなんだな。ちよつと耐える牝はBランク。こいつはなかなか妊娠しない。で、絶頂かずに耐える牝はAランク。特上なんだな」

肉壺への刺激を続けながらの語りだった。

「お前ら獣は……くひひ、精神力が強ければつ、強い奴程、より強力なち、力を持った子を産む。さて、お前のランクは幾つかなあ? 絶頂きたくなつたら……い、いつでも絶頂つていいからなあ」

「な……なにを巫山戯たことを! い、絶頂く? 私が? あり得ない! あ……あり得ません!!」

これまでフェリアは一度しか達したことがない。カールラントとのあの夜でしか……。

だからこそ、こんな男に絶頂かされたくなかない。絶頂かされるわけにはいかない。カールラントとの思い出を穢さない為にも……。

ぐっじゅ……。ずじゅっ……にゅじゅううっ。

「んっく……むふうっ……ふうっふうっ……くふうう」

だからフェリアは耐える。淫靡に指が蠢くたびに、秘部の疼きがより大きくなつていくのを感じつつも、ひたすら性感を抑え込み続けた。

(私は……私のすべては……殿下のものよ……)

だから、こ……このような男などにいいい!)

堕ちない。絶対に屈したりはしない。

愛液がトロトロと溢れ出し、コスタルの指を濡らす。剥き出しになった陰核が、刺激に合わせる様に勃起していく。身体中から汗が分泌され、乳首まで

も硬く痼り始めてしまう。

「んんん……んんん……んんんん」

自然と指の動きに合わせて腰を振ってしまおう自分
さえた。ねっとり愛液が糸を引く。ただ、それ
でも、フェリアは耐える。口唇を閉じ、必死に性感
を抑え込む。

「へ……へえええ。ちよ、ちよつと驚いたんだな
ここまでされて耐えるなんて、流石は騎士団長なん
だなあ」

「だ……黙れ……この程度……た、耐えれてと……
はあはあ……当然……です……」

「ふむ……これは楽しみ甲斐のある極上の牝なんだ
な。よし……お、お前のランクはAだ。お、おい」

そういうとコスタルは壁中から指を引き抜くと、
フェリアを拘束している兵達に声をかけた。

これに兵達は露骨に不愉快そうな表情を浮かべつ
つも、ズルズルとフェリアを引きずり始める。

「な……なにを……」
「こういう命令ですから……お許し下さい」

謝る兵士達によって地下牢床に四つん這いにさせ
られる。同時に、兵達の手でフェリアは首輪を嵌め
られ、牢内に用意された杭に繋がれることとなった。
その上更に――

「な……なに……それは？」

兵が長い鉄の棒をどこから用意してくる。鉄の
棒の先端部は熱を持っているのか、赤く染まってい
るように見えた。

なんだか嫌な予感がある。

「何を……何を……やめ……それを……私に
近づけないで！ 正気に……正気になりなさい！」

だから必死に訴えるのだが兵は止まらない。彼は
鉄の棒の先端部をフェリアの尻へと向けると、それ
を押しつけてきた。

ドジュウウウッ！

「ひっぎ――ぎひやあああああつ！！」

途端に凄まじい熱気がフェリアを襲う。

「あああ……熱い！ あついいいいい！ あぎつ……
んぎいいいいいいい！！」

尋常でない熱に、数多の戦場を駆け抜けてきたフ
ェリアでさえも悲鳴を抑えることができなかった。

「なっ！ お、おいっ！ フェリア様が苦しんでい
るぞ！ どういうことだ？！ 痛みは感じないので
なかったのか？」

この様子に鉄棒を押しつけた兵士自身が動揺し、
コスタルを糾弾し始める。

「大丈夫なんだな。お……俺の魔力を込めてあるか
ら、痛みはすぐ消える。辛いのは最初だけ……少し
経てばその熱気さえき……きも……気持ちよくなる
んだな。け……けへへへ。ほら、実際気持ちよくな
って来ただろう？」

悶えるフェリアにコスタルが問いかけてくる。

「熱い！ ああああ！ あついいいいい！」

が、返事をする余裕はない。

ひたすら、ひたすらフェリアは悲鳴を響かせる。
あり得ない。気持ちよくなることなどあり得ない
こんなのはただ辛い、辛いだけだ……

しかし、そのはずなのに――

「んっひ！ な……なんだ？ あああ……これは……
こ……んんんん！ こ……れはなんだあ！」

グジュアツと鉄棒を尻から離されてしばらくする
と、全身を襲う痛みが引いていく。いや、それどころ
か、先程腫を弄られていた時に感じた性感を数倍
にしたような刺激がフェリアの肉体を襲ってきた。

「んっひ……くひいいい！ んんんんんん！」
それこそ、達してしまいそうな程強大な肉悦が全
身を駆け巡っていく。

「ほら……絶頂きたいなら絶頂していいぞ」
それに気付いているらしいコスタルからの言葉が

向けられる。

だが――

（駄目よ……耐える！ たえ……るのよおお！）
「んふうう！ ふうっふうう……くふうううう！」

絶頂くわけにはいかない。
耐える。耐える。耐える。

（殿下！ 殿下あああつ！！）
愛しい男のことを考えることで、フェリアは肉悦
を抑え込んだ。

「んっふ……はあつはあつはあつ……」
何度も荒い吐息を吐く。

「ほう……た……耐えきるとは……これは特Aクラ
スとい、いつでもよさそうなんだあ」

「だ……だま……れ……黙れええ……」
未だ身体中が熱い。だが、それに耐えつつ殺気を
飛ばす。

「怖い怖い……。だが、首輪を嵌められて……し、
し……尻にそんな焼き印をされた状態で凄んで
も、ま、間抜けに見えるだ……だけなんだなあ」

ゲラゲラコスタルは笑う。

彼がいう通り、フェリアの尻にはAという焼き印
が刻まれてしまっていた。まるで出荷前の家畜のよ
うに……

「うっく……くうううう……」

（酷すぎる……こんな姿……。殿下に……殿下にな
んといえ……）

カールラントに対する申し訳なさで、心が砕けて
しまいそうでさえあった。

怒りと屈辱で全身が震える。
ただ、その間でも、刻まれた刻印が疼く。どうや
ら刻印自体に魔力が込められているらしく、疼
くう……はあつはあつはあつ……

「んっく……はあつはあつはあつ……」
ジツとしているだけでもより肉体が熱く疼いてい

くのを感じた。

「コスタルはそんなフェリアの姿に満足そうに頷いた後——」

「さあ、つ……次なんだな。付け……検査はまだ、始まったばかりなんだからなあ」

列を成して並ぶ騎士団員達を舐め回すような視線で見つめた。

*

「は……挿入して……んつく……いや……汚い……汚い指がボクの膣中に……やだ……いやだよ」

リリーの膣中にコスタルの指が挿し込まれる。同時に魔力が流し込まれ——

「あつ……なに？　こ……これ？　あ……熱い……ボクの……んつつんん！　あそこ……恥ずかしいところが……すぐく……あ、熱くなってくるう」

リリーは膝を震わせ、身悶えを始めた。

「やだ……これ……ボク、変になっちゃう。やだ……やだやだ……助けて……フェリア様……んんん！　た、助けてえええ」

縋るような視線をリリーがフェリアへと向けてくる。自分の身に起きている変化が余程恐ろしいのか、その表情は今にも泣き出しそうなものだった。

両親を魔物によって殺され、孤児となったリリー。しかし、彼女がアルガスタ騎士団へ入団した理由は、決して復讐ではない。

「ボクと同じような目に遭う人をなくしたいんです。みんなを護りたい」

というものだった。

そう、彼女は自分の為じゃなく、人の為に騎士となったのだ。だというのに、彼女は今、護ろうとしていた国の人間によって穢されている。

見ていられない光景だった。

だが、首輪を着けられ、拘束され、しかも、魔力によって強制的に肉体を火照らされてしまっている

現状では、彼女を救うことなど不可能だった。

「や……やめ……はあはあ……やめなさい！　団員に……皆に……手を……だ……出さないでっ!!」

できることといえば、声を上げることだけ。そして、声を上げたところで、コスタルが止まるはずなどなかった。

ぐじゅつ！　にゅじゅつ！　ぐじゅつぐじゅつぐじゅつううつ！

「あああ……かき混ぜられる。膣中が……ボクの……大事なこと……駄目……何か来る！　いやあ！　ふえ……フェリア様……フェリア様あああ」

猫を思わせる耳を生やしたリリーが悶える。コスタルの指が蠢くたびに、秘部から愛液を分泌させながら、甘い悲鳴を漏らす。

そんな彼女に対し、フェリアにできることはなにもなかった。ただ、見つめることしかできない。そしてリリーは——

「んっひ！　だつめ！　これっ——あつあつあつあつ、んひあああああつ」

ビクビクツと肢体を何度も痙攣させ、達した。同時に——

プシャツ！　プシユアアアアツ！

「な、なにこれ!?　なにこれえええ！」

秘部からは多量の愛液が飛び散った。信じがたい光景にリリーは涙さえ流す。だが、泣いたところで同情してくれるものなどいない。

「り……リリーちゃんか泣いている」

「ごめんよ。でも、これも国の為なんだ」

男達は申し訳なさそうな言葉を吐きつつも、決してリリーから視線を外しはしなかった。その視線には、言葉とは裏腹に明らかに興奮の色が含まれている。それを証明する様に、彼らの股間は痛々しい程に膨らんでさえた。

（何故……私達は仲間ではなかったの……）

信頼が一瞬でズタズタにされていく。

「けへへ……簡単に絶頂きすぎ……お前、Cランク」

無情な宣告が下された。それと共にリリーはフェリアと同じく首輪を着けられ、四つん這いにさせられてしまう。

「あ……やだ……やだああああ」

鉄の棒が尻に向けられる。猫耳少女騎士の表情は恐怖の色に染まった。

「助けて……許して……ゆる——」

ドジュウウウッ！

熱棒が臀部に押しつけられる。「ひぎやっ！　ひぎやあああああつ!!」

聞いているだけでフェリアの胸まで張り裂けそうになるほどの絶叫が響いた。

「熱いっ！　あづいひい！　死ぬっ！　ボクっ！　これ……じぬうううっ!!」

痛々しい程に腫が見開かれる。ぶじよっ！　じよぼろろろお！

「ふっひ！　ふひひいひい！」

余程苦しく、辛いのだろうか？　リリーは失禁さえ始めてしまう。

「おお、おしつこ漏らしてるぞ」

「可哀想なリリーちゃん。でも、これもキミの大事な仕事なんだよ」

「やだ！　みないで！　みにやいでええええ！」

ひたすらリリーは泣き叫ぶ。だが、しばらくすると——

「なに？　どうして？　あああ……あづいの……死んじやいそうなのに……ぼぐ……ぼつぐ……まだ……あああ！　まだいぐつ！　いぐのおおお!!」

フェリアの時そうだったように、伝わる熱気や痛みさえも快楽に変換されたのか、リリーは尻に刻まれた◎という刻印を震わせつつ、涙を流しながら絶頂に至った。

未知なる力に包まれた自動人形は

わ…わたし…
のみ…
こまれ…
ます…っ！

は…
伯爵…っ

エクリマルタ！

エデンの胎動

漫画 / おおたたけし
COMIC

何者かが
エクリマルタの
身体をコアにして
復活しようとして
いる…!?

ん…

んんは…

……!
イブ……だと？

世界にほころびを
もたらしていたのは
イブの身体の破片
だったのか……!!

そうだぜ
やっと
気づいたか

サンジェルマン
だっけか

礼を言うぞ
歴史中にバラまいた
ほころびを
集めてくれてよオ

お前はオレたちが
創った「人間」の中で
最高ケツサクだ

やっとイブが
よみがえったぜ
数百億の命を
吸ってなあ!!

こうして神の創った
「エデンシステム」と
一体化したからには

もう神の姿なんか
いらねエ!!

オレとお前で
完全な生き物を
創り出して
やろうぜエ!!

オレたちに盾ついた
失敗作共は
皆殺しだああ!!

盾ついた…

エデンを焼きはらったのは
お前らが撃ち込んだ
大陸間弾道攻撃形アストラと

失敗作だと？

「熱核反応弾」
だからな

ほっとくと危なくて仕方ねえ
ヤッただよまったく！

カワイイだろ

コイツらが
「次の人間」の
雛形だぞオ

ア…
アダム！

貴男が妾を
よみがえらせ
たのですか……！

人間がお前に
齒向かったから

ペットの様に
殺処分と
いうワケか

さすが我らの
父上殿

実に人間臭い！

アダム

彼らは
迷っていた
だけでは
ないですか

正しく導いて
あげれば
きっと素晴らしい
生き物に……!!

カンケイ
ねエなあ！

その人間！

新しい人類を
創ると聞いた時
自分たちごとオレたちを
殺そうとしたヤツらだ
明日はねエンだよ!!

妾とアダムを
止めなさい！



虜囚となった花々に
白濁シャワーが降り注ぐ！

軍属麗奴ツバキ

淫れ散る三戦華

第4話 淫虐の逃走劇

たかおかちから

小説
NOVEL

高岡智空

挿絵
ILLUSTRATION

にしき
からすま式式

登場人物紹介



ツバキ=エンデュミア

黒髪の女兵士。冷静沈着な思考と類い稀なパワーウイングの操作術で、母国フィオーレの危機を数々救ってきた。



サイネリア=パブリシオン

ツバキとともに戦う軍人。実剣術の武器攻撃が得意。金髪縦ロールのお嬢さまで、敵に対しては高慢な態度も。



リリィ=セシル

機械工学・薬学に関しては天才と言われた少女。開発機器の成果確認の名目で戦場に出る。子供体形。

前号までのあらすじ 三戦華として数々の敵兵を撃破してきたツバキ、サイネリア、リリィの3人だったが、敵国ドリオルの策略により1人ずつ捕えられ、その美体は牡の獣欲によって穢されてゆく。

ツバキが捕えられ、卑猥極まりない奴隷の証を肛門に刻まれた、その日から五日――。

「んおふううつつ！ くんぐつ、くつつ……んあ、はああんつつ！ くつつ……うぐううつつ……」

満足な休息も与えられず、ツバキはドリオルの男たちで散々弄ばれ、牝辱の限りを尽くされていた。食事はかろうじて与えられているが、そのほとんどは精液塗れ、およそ人が取るような食事ではない。それでもツバキは、僅かでも体力を回復するためそれを口にして、身を襲う屈辱の淫悦を堪えていた。

「んぐううつつ……おむうつ、んぐつ、じゅるううつつ……くちゅつ、じゅぶつ、じゅるんつつ！」

「くはあああんつつ！ あひいつつ、おうつつ、ほおつつ……んむつ、胸え……はああんつつ！」

もちろんそれはツバキだけではない。同じく囚われの身となったフィオーレの戦華、リリィとサイネリアも、兵たちの牡欲の餌食となっている。同じく牢獄のような部屋に置かれた三種類の拘束台、それらに三人ともが繋がれ、それぞれのウィークポイントを徹底して犯し抜かれていた。

「じゅるじゅるううつつ、じゅぶつ、ぐちゅう……」

一番楽な体勢は、幼い肢体のリリィだ。股間と乳房を晒す卑猥なベビードールを着せられ、馬のような台座に腰かける少女。上体を倒し、両手と首を同じ木の柵で止められているという姿勢で、男を相手にしている。けれど楽なのは体勢だけ、置かれた状況はとても楽などではない。

「口マンコレイプの味はどうだい、リリィちゃんよお？ すっかり顔がトロトロじゃねえか」

男が嘲笑を浴びせながら腰を突きだす、その動きに喉を塞がれるような衝撃を受け、リリィは涙目になつて嘔吐き、それでも懸命に舌をくねらせる。

「んふええ……えろおお、れるうう……」

表情に浮かぶのは苦悶ではなく、快感の色。それは彼女の舌腹に刻まれた、ツバキの肛門刺青と同じ性質の淫紋――こちらは百合の花を模る葉墨が、彼女の全身に甘く蕩ける快楽を送り込むせいだった。

「んぐちゅつ、ちゅぶつ……じゅるじゅるつつ、じゅるうう……れろおお、くちゅう……んくぶつつ……」

舌と唇、内頬粘膜を自在に蠢かせ、熱く脈動するペニスを愛撫するそのテクニクは、無数の男たちから仕込まれたものだ。もはや男根を噛むどころか甘噛み以外では歯も立てないほど、並の娼婦では到底及ばないような熟練した口奉仕で牡をもて成しながら、リリィは口内を満たす痺れに酔いしれ、眼鏡の奥に瞳を垂れ下げた。

「んふあつつ、はおつつ、んふおお……」

唇だけで亀頭に吸いつき、みつともない表情を晒して舌をくねらせながらも、意識は下腹部にも向いている。舌奉仕を繰り返せば繰り返すほど、視界が明滅するほどの快感を淫紋から注がれながら、その心地よい肉悦は淫唇にまで達し、台座に擦れる媚粘膜と淫核が、赤く充血して剥きだしになっていた。（はあああつつ……きもひ、いいいい、……んはあつつ、らめええ……んぐつ、ひやつ、らああ……）

いけないと思うのに、幼いがゆえに快楽に素直なリリィの感情は積極的に頬を窄めさせ、執拗に舌腹をペニスに擦りつけさせ、墮落の道を辿らせる。今日まで百人を超える相手をフェラ抜きし、牡味を覚え込んだ唇は、もう男に媚びつばなしだった。

「処女のクセに、お口でイッチまいそうだな」

口を犯す男がそう呟きながら、粘膜蠢くトロトロの口内を掻き回すように腰を振り乱す。その衝撃を受け、その先にあるザーメンの牡臭い味を舌に、むせ返るような臭気を鼻腔に感じながら――。

「んぐつつ、ふみゅうううう……んつつ！」

男の擲楡通り、リリィは何度目かもわからない牝恥を味わわされてしまう。台座も、伸びきった脚も、その足元の床も、大股開きになった彼女の秘唇から流れる蜜液で、濡れ汚れていた。

「おら、負けずにしつかりサカリつけよ、お嬢さまもなあ……てめえは貫通済みなんだからよ」

「よ、けいなつ、お世話ですわ……んくうつつ！」

別の拘束台ではサイネリアが、両手を頭の後ろに組まされ、膝立ちで跪かされている。豊満な乳房を強調するレザーボンデージは、乳房に負けず肉感溢れるヒップも剥きだしで、太ももまでのロングブーツ、ガーターベルトまで装着させられていた。

「ヤリマン女とはいえ、パブリシオンの令嬢にお相手いただき、光栄至極ですよ、本当にね……」

「つつ……あんな家は、わたくしと関係なんて……んひつ、うくつ、くああんつつ……」

荒い言葉をついたチンピラのような男とは別の、眼鏡をかけたインテリ風の男が、身体を反らすサイネリアの、突きだされた柔乳に肉棒を押し込む。フニフニとマシユマロのようにたわむ柔らかさと女体特有の弾力、さらには肌の滑らかさを味わうように、ペニスの先で執拗に捏ね回していた。

「さすがに上流階級で育った牝は違いますね」

「まったくだな、肌の細やかさったらねーぜ」

「うるつ、さいとつ……んひつ、い、言つてえつ」

「ひやふつ、はうつつ、んはあああつ」

リリイとは違い、口が自由だからこそサイネリアは言葉で抵抗を示し、心が屈していないと身体へ言い聞かせるように声を荒らげる。けれど度重なる調教と、両乳房の先端に彫り込まれた、サイネリアの花——その淫紋を弄られる快感によって、怒声はたちまち甘い喘ぎへと塗り替えられてしまう。

「ひいひいんつ！ んくつ、こ、こん、らあ……あぐつ、んあああつ、だめえつ、おっぱいいいっ！」
肉塊に浮き上がった血管の脈動、いきり立つた性欲を伝える熱さに、乳房を捏ね回される。ペニスを擦りつけられるだけで秘唇は潤みだし、そのはしたない口を犯される以上の快感が、乳房の奥へ突き刺さり、背筋を痺れさせていた。

「んっふううつつ、あくつ、くあああんっ！」
男たちが互い違いに陥没乳首を押し込んで、白肌の輝く豊乳がグニグニと潰れてたわみ、乳輪がブクツと腫れ膨らんでゆくのを感じる。そうしたくはないのに背を反らせて胸を張り、自ら乳房へペニスを咥え込むように、身体を振ってしまふ。

その快楽は胸全体を蕩けさせ、たちまち、サイネリアが快感によがっている証を屹立させた。
「はあうううう……うぐつ、い、やああ……んふうつ、はあつ、あああ、硬く、なつひやうう……」

サイネリアの花が咲き誇る乳房の頂点、花の中心部を飾るように、乳首が硬く勃起して突きだされてゆく。硬いコリコリとした性感帯が、押しつけられるペニスと擦れ合い、揉み合い、狂おしいほどの快感に腰がガクガクと震えて堪らない。
（らめえええ……ふぐううんつ、んはあつ……あつ、こ、れええ……イツ、イツひやあ……）

埋まった乳首が自力で快感を求めてそそり立つ、それを性欲に晒され、思考が蕩けだしていた。抵抗の意志は次第に薄れ、意識は快感へと向かい、それを受け入れるように身体が熱を孕んでしまう。
「んひいひいっつ、ひやめつ、もう、やめつ——」

——ビュクビュクビクウツツ！ ビュルルツ！
サイネリアが叫んだと同時に、屹立した乳突起をそのまま陥没させるほどに、激しく押し込まれたペニスの先端が、熱く粘っこい進りを解放させた。膈内射精に勝るとも劣らない快感に、仰け反った身体がさらに大きく背を反らし、淫口から滝のように牝蜜を垂れ流した腰が、ガクガクと振れる。

「んひいひいっつ！ あひいっつ、んいっつ……あああつ、いぐつ、いぐううんんつつ！」
射精しながら脈動を続ける肉棒に、ザーメンを塗り込めるような腰遣いで豊乳を捏ね回される。その感覚に堪らず全身を躍らせ、令嬢奴隷は長いブロンドを振り乱して、あられもなく悶え叫んでいた。

「リ……リイ……サイ、ネリ……ああつ、んつくううつつ！ んおつ、ほおおおおつ……」
二人の名を呼ぼうとするも、ツバキとてそんな余裕はない。肛門に刻まれた、自らの名を表す花の淫紋に、いまや尻肉さえもクリトリスに近いほどの性感帯に作り替えられ、服越しに尻肉を揉まれるだけで、下品に呻く喘ぎ声を響かせてしまふ。

「ひひひひ、相変わらず敏感なおケツだなあ？」
両手と首、そして足首を床に固定され、膝をつけた四つん這いを強制されたツバキは、軍服スカートの越しの突き上がった媚尻を撫でられ、快感に堪らず腰を振って応えてしまふ。そうすると、股下0ミリにカットされた超ミニタイトスカートの間は簡単にめくれ、下着のない豊尻と無毛の股間が露わになり、背後の男の眼前に秘唇と肛門が晒された。

上半身も下着はなく、軍のジャケツトを羽織っているだけの格好なため、身を振るたび乳房が冷たい床に擦りつけられ、ムニユンツとたわんで潰れる。そんな体勢にも恥辱を煽られるが、それよりも屈辱的なのが、長い黒髪への陵辱だった。

「こいつの売りはケツと髪の毛だよなあ、へへへ」
「サラサラでいい感触だ、扱き甲斐があるぜ」
男たちの言葉と、周囲から響くニチュツ、ゲチュツという卑猥な音を耳に、ツバキの白肌はカアツと赤く火照り、怒りに頭が熱くなる。
（このつ……クズどもがつ、よくも……んぐつ、よく、もおお……あうつ、んううつつ！）
反発心が膨れ上がるものの、尻肉と肛門を撫でられ、這い上がる快感に思考も声も蕩けてしまふ。それに合わせて黒髪と頭皮には、熱く粘っこい、おぞましさに満ちた感触が伝えられる。

——ビュルルツツツ、ビュクビュクツツ！
「くひいひいんつつ！ んはつ、あうつ……うう、ま、またあ、髪にいい……ひぐつ……」
髪束を掬ってペニスに巻きつけ、その感触で扱っていた男たちの吐精が、またもや頭に浴びせかけられ、肌を濡らし、垂れ流れて顔や首筋を汚してゆくのを感ずる。美しい漆黒に輝いていたツバキのロングヘアは、いまや半分ほどは黄ばみがかった白濁に汚染され、鼻の曲がるような精臭が全身から溢れているようだった。その淫態は余さず撮影され、ツバキの目の前に置かれる小型のタブレットモニタに映され、自身の惨状を伝えている。

「き、ひや……貴様ら、ゆ、許さ——んうつ!!」
恨み言を口にしうと口を開く、それ待っていたかのように、尻肉を揉みしだいていた男がようやく腰を上げた。ガチガチに勃起した男根を、緩んだツバキの不浄穴——真つ赤に咲き綻ぶ椿の中心へ、激しい勢いで突き立てる。

「んぐうううつつ!? はひつ、ほおうつつ……ん
ほつ、あとおおおんつつ……んっひい……」

「ぎゃーはははは、すげー喘ぎだぜ、こいつ!」

「許さねーとか言つて、下の口はドロドロだな!」

男たちの馬鹿笑いと嘲笑も耳に入らないほどの性
衝撃に、ツバキは拘束された全身をビクビクと跳ね
させ、甘い絶頂を味わいながら身悶える。

(ふぐつ、あつ、ああああ……お、ひりつ、はああ
……んひつ、ひやつ、ひやつ、ひやつ、おめへえ……)

指先が小さく痙攣し、瞳が見開かれ、唇は完全に
弛緩して、床を舐めるように舌先が垂れる。思考が
すべて快感に、牡の淫熱に向いてしまったその瞬間
を狙って、髪束をオカズに扱っていた男たちが射精
し、頭皮を汚してくるが、それを気にするどころで
はない。むしろ精の进りの熱さと感触に、頭の奥ま
でが激しい痺れに包まれ、背筋が大きく跳ねるほど
の肉悦を感じさせられてしまう。

「おらあつ、こういうときはなんて言うんだあ?」

「んいいいいっつ……ひつ、ぐううつつ……あうう
うつつ、んいっつ、い、イクううつつ……」

四十八時間を使つて、本能に刻まれた言葉が口を
ついて飛びだした。そのことを恥辱に感じるのも僅
かな時間だけ。次の瞬間、頭に乗せられた熱い重量
感に意識を奪われ、身体が硬直する。

「よしよし、ならご褒美の時間だな……おめーの
お仲間が集めたザーメン、被せてやるぜえ?」

「ひつ、やつ、ああああ……あぐううつつ!」

大事な軍帽にたつぷりと溜められた、数十人分の
汚液ごと帽子が被せられる。そのおどましい感触が
頭皮に染み込み、シヤワーを浴びたようにダラダラ
と流れて、顔中を白濁に塗れさせていった。

「く、ほ……く、ひよお……ゆ、るひやあ……ん
っひつっ、ひぎっつ、いいいんつつ!」

精を浴びる感触を快感と結びつかせるように、媚

薬墨によって発情し続ける腸壺を、肉棒にグチュグ
チュと掻き回され、ツバキはまたも声高に叫ぶ。

「あひいっつ! そえつ、らめらああつ! ん
まつ、まはつ、いぐううんつつ!」

触れられてもいない淫唇から、噴きだすように愛
液を垂れ流しながら、尿口からも透明の飛沫を振り
撒き、ツバキは床に身を擦りつけて悶えさせられる
それでも、男たちの魔の手が止まらない。

それを皮切りに、新しい兵たちが入れ替わりなが
ら部屋を訪れ、三人の牝肉を、性処理の道具に利用
してゆくの。休めるのは、たまたま責め手のいな
くなる、一日の数十分か、長くて二時間程度。

そのときがくるまで三人は体力が続く限り——い
や、体力が尽きようと。仲間二人に負担を押しつけ
ないよう、性欲を受け止め続けるしかなかった。

◇

間は空く、とはいっても男の数には事欠かないの
が軍の基地だ。駐屯兵だけでなく、斥候や任務から
戻った帰還兵、機体を整備する整備兵、キッチン
のコックや、果ては出入りの業者——ただの民間人に
さえ、三戦華の肉体は開放され、開発され続けた。

そうして調教は続き、さらに一週間後——。

「んおおつ、はおつ、おぐううつつ……んぐつ、け
けひゅつ、ケツ穴ああ……いぐううつつ!」

教え込まれた言葉を、下品な喘ぎとともに口に
して、ツバキは中腰姿勢のまま、甘美な尻穴アクメに
全身をビクビクと跳ね震えさせる。頭の後ろで両手
を組み、開いた脚は金属棒と金具で完全に拘束、振
り上げることも移動することもできない。屈めた尻
を犯されるだけの、彫像のようになっていた。

「へへへつ、どうだあ、ツバキ……俺らのテクの味
は。もうすっかりメロメロじゃあねえか」

「処女のクセに、喘ぎまくりの感じまくり、ついで
にイキまくり、マン汁漏れればなしだもんなあ」

そんな己の菊壺をデイルドで弄ぶ男を、キツと
鋭く睨みつけ、黒髪の戦華は唇を震えさせる。

「こ、んら……暴拳で、わ……んっ、はあうつ……
わら、ひが……屈すると、おも、うなつ……」

「そーかそーか、そいつあこええな……ほれつ!」

「んぎひいっつ!? あひいっつ、ケチュイぐつ、
イツ……イツへ、りゅうう……んほおお……」

段々の窪みがいくつもついた、極太の張り型を尻
穴から勢いよく引き抜かれ、背筋を張りつめながら
ツバキはまたもや絶頂を極める。異物を除かれ大き
く開いた菊壺口は、椿の淫紋を艶やかに光らせなが
ら、夥しい量の腸汁を垂れ流していた。

「くつくく、すげーイキ声……陛下のモンじゃなき
や、とつくに処女マン食つちまってるよこだぜ」

(うる、はああ……いっつ……わら、ひはつ……ん
うつつ! まげ、な……ひいっぐううつつ!)

男の押搦に対する、胸中の反論までが絶頂の喘ぎ
になり、蕩けた顔をつぶさに観察されてしまう。

「おら、どうせイカされちゃうんだ。ちったあ素直
になれよ、ツバキ……お仲間みてえになあ?」

そんな男の言葉に、眉根がピクリと軋められる。
そう、ツバキがこれほどの屈辱を受けても、命じら
れた絶頂セリフを叫び、痴態を晒しているのは、同
じく囚われている仲間たちへの加害を、少しでも減
らさねばという思いからだ。だが——。

「くらひやいいい……リリーの、エロ舌マンコにい
……あつ、い、おひんばみうく……んああ……」

「んっはああ……ああつ、いいですわあ……わた
くしの乳首チンポおつ、シコシコしてええつ!」

その仲間たちは拘束具を外され、調教部屋内であ
れば動き回っても構わない、仮初めの自由を得られ
ていた。それは長きに渡る調教で、ついに鋼のよう
な精神が萎え折れたのか、牡棒を揺らす男たちへ、
遍く媚態を披露するようになったからだ。

「ほおれ、見ろ……あれを見習えば、お前にもたっぷりくれてやるぜえ……俺らのチンポをなあ」

（ふぐつつ……誰が、そんな……貴様らの、けつ……んうっ、ふっ……汚らわしい、ものを……）

熱くて硬く、それでいて猛々しい臭棒を想像すると刻まれた淫紋が尻谷間でカアッと熱く疼き、それによって貫かれる感覚を全身にリフレインさせた。肉体が弾け、脳天が痺れるような快感の波を想起させられ、思わず生唾が溢れてしまう。

（つつ……いら、ないっ……いるわけがない、そんなもの……負ける、ものかあ……）

慌ててブンブンと頭を振り、ツバキの理性はそれを拒絶する。けれど仲間である二人は、その汚らわしい牡棒を欲して叫んでいた。自由を得ても反撃や抵抗などせず、男たちに快楽をねだり、甘い、積極的に奉仕してさえる。そうして時折、ツバキを見ては冷たい表情を浮かべ、二人で顔を見合せて嘲笑し、男たちに口を広げてみせていた。

「こお……くらひやい、おくすい……」

「んべえええ……いつは、ほほいれえ……」

「ああ、いぜえ……素直な奴隷ちゃんたちには、ご褒美やらねえとなあ？」

言いながら男が取りだしたのは、少量を原液で注射する媚薬を薄めた、ドリンクタイプの媚薬、その試作品だった。二人が囚われの間に、幾度となく味わされた忌まわしい薬品のはずだが、彼女らはもはや、その快楽の虜となつてしまつたのか。瓶を目にするや瞳を細め、頬を綻ばせて喜びを浮かべる。

（よ、せつ……やめろ、二人とも……それは、だめだ……だめなんだ、お願いだから……）

心の中でそう訴えながら、涙を浮かべた瞳で二人を見つめる。けれど彼女らはそれを恭しく受け取り、ゴクゴクと飲み干して、瓶を投げ捨てた。

「あつはあああつつ……んうっ、き、き、はああ……」

……あううっ、んひっ、んつくううんつつ！

身を掻き抱き、プロンドを振り乱して全身を痙攣させるサイネリア。その胸元では、先ほどから愛撫をねだつていた陥没ニブルが、親指のように大きくそそり立っていた。超小型のオナホールのような媚薬ローションたつぷりのシリコンカバーに乳突起を包まれ、刺激され、なにもしていないのに激しい絶頂に身を委ね、淫らに腰を躍らせている。

「あひっ、んはああ……はへっ、らあ、へ……りやめ、ひたあ……こひゅっへ、くらさあい……」

リリイは舌をツンと突きだして、もう一押しで味わえる絶頂を、ギリギリのところで堪えているようだ。だがそれは、快感に抗つてではない。ニヤニヤと笑う男が勃起した肉棒を擦りつける、その刺激でのアクメが最高に気持ちいいと、本能に刻み込まれて、心の奥底から求めてしまっているからだ。

「ほれほれ、好物のザーメンだぜえ、へへへ」

「んあ……ふええ、えおおっ、ふえおお……」

リリイが懸命に舌を伸ばし、刻まれた百合の淫紋をくねらせ、眼前の男を愉しませる。伸びた舌先はペニスの先端をくすぐり、その熱さに精液の脈動を感じたのか、唾液がツウ……と糸を引いていた。

「そうだ、そのまま受け止めろ……くつつ……」

——ドピュドピュツツ、ピュルルウツツ！

「んあうっ！ あ、むう……んじゅるるっ……」

噴きだした精液を舌皿に受け止める。それだけで桃色に染まっていた頬をさらに赤く、真っ赤に火照らせて表情を蕩けさせたリリイが、床に座つたままピクピクツツと腰を跳ねさせた。粘つこい感触、舌が焼く焦げるような熱さ、そして立ち込める青臭さ——すべてに心を奪われ、少女がうっとりとした瞳を細める。太ももを何度も擦り合わせ、細長い絶頂のロープを辿るように、精液が淫紋に触れている間、延々と続く軽いアクメを味わっているらしい。

「あ、ああ……ああ……お願いだ、やめて……やめて、リリイ……正気に、戻ってくれえ……」

嗚咽に震える声で、思わずツバキはそう呼びかける。けれど彼女はチャリとこちらを一瞥しただけで、すぐさま唇と舌の感覚に意識を戻し、熱々のザーメンを口内で転がし、それを味わい尽くしてゆく。

「ぐぶっ、くちゅ、ぐちゅる……んちゅぽお……」

本能にも理性にも刻まれた記憶が、肉棒への舐め掃除を丁寧に行わせ、精液を根元から吸い上げる。それを口内で転がし、異臭を口と舌、鼻腔に味わい尽くして、コクリと喉を鳴らした。最後は舌を痺れさせる快感に悶え、瞳を細めながら、口内を掃除して綺麗にし——舌を伸ばして大口を開く。

「ふあ……おひほう、はまれひはあ……んふう」

頂戴したザーメンは、すべて余さず飲ませていただきました——と。男に礼を告げ、媚びるような笑みを浮かべるリリイ。その媚態に魅入られた男たちが一人、また一人と、彼女の幼い唇を狙い、牡欲を擦りつけてゆく。あぶれた者たちは、隣の豊熟した乳房に捌け口を求め、肉棒を押しつけ始めた。

瑞々しい唇が限界まで開き、脈打つ肉棒を咥え込んで、切なげに震える。無数のペニスでひしゃげた乳房は、それらに柔らかな感触を返して、身悶える全身と同じように、乳房をたわませた。

「やめろ……やめて、やめてえ……二人に手を、ださないで……くれ……あああつ、んぐううっ！」

男たちに叫びかけるも、ツバキとて休める状況ではない。またも菊粘膜を穿られ、みつともなく表情を歪ませて舌を突きだすと、そのまま尻肉を前後に、そして上下に揺らして身悶えてしまう。

「はほおお——つつ！ んひっ、ふぐつつ……んあああつつ！ ケツ穴あああつ、いぐううっ！」

「感度だけはあいつらにも負けねえな……そのまんま、心の底から奴隷になつちまえよ、ツバキい」

男のささやきに首を振るも、肛門皺に刻まれた淫紋を撫でられると、まるで領いているように頭が振られ、艶やかな黒髪がサラサラと音を立てた。

◇

もはや地獄だ——と、半ば折れかけの心が呟く。

だが、自分の何倍もの苦痛を彼女らが味わったのだと言い聞かせ、暗がりに繋がれたツバキは歯噛みし、心を懸命に叱咤する。そう、最近では調教後にインターバルを挟まれ、隣室の牢へ監禁されるようになっていた。肉体が快感に慣れないよう、そして快感に飢えるようにと、お決まりのやり方らしい。

（休める時間が得られた、そう思えば悪くはないか……少しでも、体力は温存したい……）

助けを期待するわけではない、けれど好機を待たねば、事の起こしようなないからだ。

（そのときまで、私の……身体が、保ってくれれば……あんつ、んつ、い……いい、がな……）

意識するとそれだけで、肉皺が疼いて下腹部が火照りだした。下半身から意識を背け、いまはただ身体を休めることに終始する。この牢の外、調教部屋では二人の仲間が男たちを相手に、淫らな快楽を貪っている。その声からも耳を遮断しなければ、身体より先に心が折れてしまいうさだつた。

だが。

「……きて……起きて、ツバキ……つ……」

「ん……なんだ、なにが……ここは……」

少しの微睡を経て、ツバキが目覚めたのは意外にも、人の手と声による接触からだつた。

「そうか、時間があるから眠って——つつ?」

「起きた……? 急いで、鍵は外してあるから」

現状を確認する、そんなツバキの前には、淫欲に溺れたはずのリリイだった。衣装こそ、あの卑猥な下着のままだが、その目にははつきりとした輝きが宿り、動作も緩慢さがなくなっている。

「……どういふことだ、いったいなにを——」

「話はある……サイネリアが、準備して待ってる」

わけもわからずリリイに促され、拘束する手枷を外し、下着のないジャケツトとスカートのままで牢を出る。それでも調教部屋には誰かいるのでは——

そう思ったが、そこにいたのは気を失って転がった二人の哀れな兵士たちだった。

「これは……お前たちがやったのか?」

舌に刻まれた淫紋のためか、リリイは言葉を発さず、頷いて肯定する。口を動かし、短く告げる。その姿はとて、男たちを相手に媚薬を要求し、淫らによがっていた彼女と同じ人物とは思えなかつた。

「いったいなにがあつたんだ、本当に……こんな計画をしていたなら、どうしてあんなことを!」

「詳しく、話してる時間はないから……いまは黙って、ついてきて……私たちを、信じて……」

悲壮な表情と真剣な眼差しに、ツバキは一縷の望みを賭けてついてゆく。例の電磁バリアは、淫欲に溺れる——演技をしていた二人が、何度も出入りする兵たちを見て、解除方法を知つたのだろう。問題なく通過し、脱出路である螺旋階段へ辿り着いた。

兵たちはカードキーでエレベーターを使用しているが、捕虜となつた自分たちではそうもいかない

とはいへ、この数日はあの部屋しか見られなかつた身となれば、こういった螺旋階段を駆け上がるという行為でさえ新鮮であり、懐かしきも思えた。

「……外の空気は別格だな。さて……これからどうするんだ、それにサイネリアは——」

螺旋階段を出ると、基地内でありながらそこは屋外になっている。いくつもの扉やシャッターが、調教施設であるこの中枢を囲んでおり、ここから徒歩で脱出するのは困難だろう。せめて装備があれば——

そんなツバキの思惑を悟つたように、リリイがこちらの手を取って、引つ張ってゆく。

「こつち……大丈夫、今頃はもう——」

そう——リリイが口を開いた瞬間だった。

『お待たせしましたわ、リリイ! ツバキ!』

「なっ——」

上空から差す影と、スピーカーから響く声に顔を上げる。そこにあつたのは一機のパワーウイングと、機体が手にするパワーアームだった。

サイネリアが駆るのはブルーのカラーリング、翼を生やした懐かしい造形、間違いなく彼女のパワーウイングだ。人が嵌まり込むスペースを胴体を持ち、そこから太く頑丈な四肢を伸ばした機体は、身体の前部と頭部を解放した、巨大な着ぐるみのよう。ウイングはアームに比べすっきりとした体形だが、どちらも腕が長く、脚が短い。

その操縦席に、サイネリアはボンデー姿のまま乗り込んでいた。腕は機体の肩から二の腕辺り、脚は下腹部の辺りに嵌まり、自身の腰から太ももまでは露出している。その状態で腕内部のコンソールを使い、操縦するのだ。基地の高い扉を越えるために低空で加速しながら、少しずつ高度を上げている。両手を掴まれ宙ぶらりになった機体の脚が、届かないかというギリギリの位置で揺れた。

「掴まりなさいな、早く!」

敵を出し抜き、機体と逃走の脚を奪取したとはいへ、状況は間違いなく厳しい。彼女の声にも、微かな焦りが滲んでいるのがわかつた。

「無茶なつ……くつ、そおおつ! リリイ、私に掴まれ……おおおお——つつ!」

一度着地してしまえば、再加速して浮上することは難しい。だからこそ、彼女が扉を越えるため加速している状況で、機体によじ登る必要があつた。

（こつちは疲労困憊してるんだぞ!! なんて真似をさせるんだつ、本当に……本当に、お前たちは……最高の仲間だ、くそお……）

イセリア 英雄戦記

the legend of the Iseria war

第31話 黄昏の社

小説 くらた 倉田シンジ

挿絵 ぼたん 牡丹

メイズIIを守る巫女とセリースに
淫祇邪教とグラマトンの魔の手が迫る！
囚われの身となった女騎士と巫女は、
魔物の牡欲を身体に浴びせられ、
快樂の虜となる！

フエイエン武踏会の治める地から東、港から数日を掛けて海を渡ったところに、大きめの島があった。

独自の文化を持ち、古の世からフエイエン本国との繋がりが深いその自治領にこそ——フエイエン舞踏会が秘匿してきたメイズⅡが存在していた。

地下にあるメイズⅡの上に鎮座しているのは、霊山として名高い山だ。切り立った山に登り口はひとつしかなく、しかも山の中腹には、侵入者を阻むように砦が多数存在する。

まるで山城のような堅固さを誇るこの山だが、その頂には、この地を司る大きな神社が存在していた。

メイズⅡの入り口ともなっているその神社に、現在セリーヌは来ている。

「このままでは明日まで持ちません。封巫女様は落ち延びるべきです！」

セリーヌが沈痛な面持ちで訴えている相手は、広い座敷の奥に鎮座する封巫女……ホカゲⅡアマミヤだった。

しかしホカゲは、穏やかな表情のまま首をゆつくりと横に振り、それからわずかに笑って、ただひとつ。

「セリーヌさん、ありがとう」

聞き取れるかどうかの小さな声で、そうポツリと口にしただけだった。

まだあどけない顔立ちながら、この神社の中でもっとも尊い存在が彼女だ。白と赤の独特な巫女服を纏った少女は、上質な絹のように白く透きとおった肌で、言葉を知らないかのように大

人しく、人形のように儂く美しい。彼女の代わりに、横に控えた巫女のひとりが口を開く。

「セリーヌ殿、それはできません。封巫女は死ぬまでこの地を離れることはできない決まりです」

「そして死ぬまで封巫女を守るのが私たちの存在意義だもんね」

サヨとホムラ、封巫女を守る側近の巫女たちが諦めたように薄く笑う。

「ですが、敵に捕らえられたら、たとえ命は取られなくとも酷い目に……」

そこまで言って、セリーヌは口をつぐんだ。この神社にいる以上、それくらいは覚悟をしているだろう。

「セリーヌはんには本当に感謝しております。あの淫祇邪教の猛烈な攻め手に、私らだけではこんなにも持ちこたえられへんかったやろうし」

すっかり馴染んでしまったヒトミの変な言葉遣い。他のふたりと同じく封巫女を守る側近の彼女だが、今、その声には痛切な覚悟が滲んでいた。

今、この山はグラマトンの軍勢に囲まれてしまっている。

正確に言うならば、淫祇邪教に乗っ取られたグラマトンの軍勢に、だ。

状況は悪化の一途を辿っているのに巫女たちはここを離れようとしな

「……しかし」

それでもセリーヌは食い下がろうとして、説得の言葉が見つからずに言い

よんでしまう。

セリーヌが封印強化のためにここを

訪れたのが一週間と少し前。その作業中にグラマトンの襲撃があった。と

巫女たちは戦闘にも長けている。とはい

はいうものの、彼我に数倍の差がある兵力差には及ばないのが現実だった。

セリーヌも防戦に努めたものの、ひとつ、またひとつと砦が落とされ、今や敵はこの神社にまで迫る勢い。

その狙いがメイズⅡであることは間違いない。それはつまり、メイズ解放の鍵を握る、目の前の少女の身柄を確保すること。

ホカゲはメイズⅡの封巫女だ。封巫女は代々この神社でメイズの封印を行っていて、その解除にはホカゲの力が必須と聞いている。

(どうしようも……ないのか)

セリーヌは囁くみするしかない。フエイエンへの救援要請はできな

った。有事には術を使ってフエイエン王に危急を知らせることになっていたらしいが、淫祇邪教の術によるものか、妨害されて術が使えない。堅牢な山であることが災いして、包囲された今では人を遣いに出すこともできない。

ふと、小さいながらにハッキリした声でホカゲが呟く。

「こんな状況じゃもう無理かもしれないけど……もし隙を見つければ、貴女だけでも逃げてくださ

「つ!? 何を言ってる……」

その言葉に漠然と不安を抱いたセリーヌが「そんなことはない」と言

うとした時だった。遠くに聞こえていた戦いの音がにわかに大きくなる。

「正門が破られました！」

今度は奥座敷にもハッキリ聞こえる、悲鳴のような巫女たちの声。

メイズⅡの封印を司ってきた建物、最後の守りを失った瞬間だった。

※

「しかし随分と強固な封印よ。フエイエンにこの陥落が知られる前に解除せねばならんのが……」

そう呟いたのはひとりの老人。昨日まで封巫女が座っていた奥座敷の御座に、悠々とあぐらを掻いている。

グラマトン軍を率いてきた淫祇邪教の最高権力者、つまりは教皇だ。

彼は以前、八十か九十か、あるいはそれ以上かという年齢に相応しい、枯れ木のような見た目だった。

それが今の外見とはいえば、すっかりと変貌している。

いまだ老人と言える範疇ではあるものの、その外見はせいぜい六十代。

その理由は目前に転がっていた。しどけなく服を乱した少女が荒い息を漏らして寝そべっている。

グラマトン騎士団において異色の赤い鎧を纏う、深紅の髪の少女。『神速の弓騎士』とまで言われた少女の名は、ペロニカⅡエルⅡグラマトン。

その股間に伸びているのは、故国を乗っ取った男の纏うローブから這い出た触手だった。

「ふあっ! あああ……」

絶頂にたゆたう少女の膣口に潜った
ペニスそっくりの触手が、ずりずり
りと身悶える。それが彼女の体内から
愛液を吸い上げていた。

プチュ！ ジュズルルッ！

「あつ、あつ！ 猥下あ……！」

夢見心地に喘ぐペロニカは、愛液と
ともに潜在的な力を奪われ、それを取り
込んだこの男を君返らせていた。

淫祇邪教に君臨し、今は忠実な配下
として魔王に仕える教皇。この男は、
女を犯して愛液と力を奪う、半人半魔
の性質を持っているのだった。

「おお、おお、やはり才ある女の汁
は格別よ。そちらはどうかの？」

身体に満ちる活力に細めた目が、つ
いと横に逸らされる。

この部屋にいたのはふたりだけでは
なかった。そして伸びる触手もまた、
ペロニカへの一本だけではない。幾本
もが畳の上をのたくっている。

「うう……く……」

巫女装束をはだけられ、まだ発育の
途上と思われる小さめの乳房を触手に
絞り上げられている少女は、メイズⅡ
の守護者であるホカゲだった。

「ふむ、なかなか美味そうではあるが、
破瓜したばかりでは味も落ちるわ」

教皇の呟きと同時に、一本の触手が
大きく跳ねる。

「くふ！ うううう……！」

それは封巫女の股間に伸びていた。
儚い体軀に似つかわしく、まだ恥丘
の膨らみの薄い陰部が、ぬるぬるとし

た茶褐色の触手に広げられている。

触手が蠢く度に裏返ってピンク色の
内部を覗かせる狹隘な膣口には、わず
かに伝う赤の色。さつきまで彼女が純
潔であつたことがわかる。

「まあよい。メイズの封印解除につ
いて話してくれるまで、じっくり快楽を
教えてやろうかの。……いや、そうゆ
っくりもしておられんのだったな」

くふふ、とひとりで忍び笑う教皇
に、ホカゲは憎しみの視線を向ける。

「無駄、です。つく！ はあ……！」

「わかつておる。フエイエンの老いば
れ王も侮れんからの。きやつらが兵を
差し向けてくるのが先か、儂がこの
封印を破るのが先か……。お前が素直
になつてくれれば、楽なのじゃがな」

そう言つた教皇だが、その口調には
悲観的な響きはな。メイズが解放さ
れることを確信しているかのようだ。

「ひつ！ ぐ……つ！」

「おおおう、生娘が涙を堪える様は何
度見ても心安らぐ。それをすぐに、快
楽の涙にしてやるからの」

いや、むしろ。楽しみに細められた
教皇の声は、下僕の素質ある少女を調
教する喜びに満ちていた。

※

フィオナの意識がゆつくりと闇の中
から浮かび上がってきた。

「んっ……わたくしはいったい……」

ベッドから身体を起こし、眩しい光
の射し込む窓から外を見る。この風景
には見覚えがあつた。

「目を覚ましましたか。よかつた」

開いたドアから姿を現したのは白麗

だった。そしてそれに続いてジュダ。
こちらを見てニコッと笑つたクレオ

ラの王子を見て、一気に思い出した。
自分がバイラバイラに向かつたこと。
メイズの封印が解かれてしまつたこと。
危ういところをジュダに救われ、スト

ーンサークルで行き先もわからず転移
したこと。それらすべてを。

「白麗姫様がいるということは……こ
こはフエイエンですか？」

「そうだよ。僕は運がよかつたね」

頷いたジュダが説明してくれた。

フエイエン武踏会の領内に転移して
いたフィオナたちを、白麗が保護して
くれたのだそう。どこに飛ばされる

かわからない魔法だつたことを思えば、
敵対勢力の地に飛ばなかつたのは幸運
としか言いようがない。

「クアールでのことは聞きました。メ

イズの解放は残念なことですが……」
冷たい水を手渡してくれながら、白

麗はそこでやや言いよどむ。

「起きたばかりで申し訳ないですが、
先に現状を聞いておいてもらいましょ
う。こちらも事態が切迫しています」

凜々しい武闘姫の表情に焦りのよう
なものも浮かんでいるのを、さすがに
フィオナも感じる事ができた。

「わかり……ました」

安堵したのも束の間、その言いよう
にフィオナは嫌な予感を覚えすにはい
られなかつた。

「では、セリーヌの身に……。いえ、
メイズⅡに何か異変がある？」

「あくまで現段階では推測です。ただ、
セリーヌ殿が到着したという報せ以降
は、まったく連絡が取れません」

メイズⅡはずっと場所を秘匿されて
きた。だが、王の側近だつた氷継が洗
脳されている現状を鑑みれば、敵対勢

力に位置が漏れてしまつてゐることは
否定できない、と白麗は説明した。

「連絡も取れないなんて、何かあつた
と思つておいたほうがよさそうだよ」

わずかに眉を寄せたジュダが呟く。

「もちろん、すでにメイズⅡの封印が
解かれたことを想定して兵の準備は進
めています。が、いかんせん……」

フエイエン武踏会は、先日グラマト
ンに攻め込まれたばかりだ。その際に
氷継は洗脳され、宝仙王もようやく回

復したところ。被害は癒えていない。
「メイズに差し向けられる兵は何とか
整えました。が、万全とは言えませ

それに私は都の防備を固めなければな
らず、ここを動けない……」

現在、王に代わつてフエイエンを仕
切つてゐる白麗は悔しげに唇を噛む。
「わかりました。わたくしが参ります」

そこまで話を聞けば、フィオナにも
事情は理解できた。

イセリアの皇女として、難民を受け
入れてもらつたフエイエン武踏会には
大きな借りもある。自分が向かうべき
だ、という使命感があつた。

「申し訳ない……。それなりの精兵は揃えましたが、もしメイズが解放されているとなれば、そこから湧く魔物が相手です。この行軍は偵察と思つて危険と思つたら撤退してください」頭を下げる白麗の肩を、ジュダが気安くぽんぽん叩く。

「僕も付いていから、大丈夫だよ」

「ジュダ様は、旅の間にやんちゃをして邪魔をしないようにお願いします」

「……………うん」

ベッドの上ではさっぱり白麗に敵わないことを思い出したジュダが、冷や汗を流しながらコクコクと頷く。

それでようやく、白麗は微笑んだ。

「準備が整い次第、私も本隊を率いて後を追います。ご武運を」

※

あと数週間……いや、もっと短いかもしれない、その間だけ我慢すれば。そんなことを考えていたセリーヌの耳に、悲痛な声が飛び込んでくる。女性の呻き声や、啜り泣く声、時には嬌声も。他の半の状況はまったく見えないが、声から判断すれば、そこで何をしているかは明らかだ。

グラマトンの——あるいは淫祇邪教の教徒たちが、暇を見つけては囚われた巫女たちを嬲りに来ているのだ。

顔見知りの巫女たちも……ヒトミやホムラやサヨ、そしてホカゲも、同じような目に遭っているのだろうか。

そう考えると、居ても立つてもいられない気持ちになる。

その時、あちこちから聞こえる呻き声に混じって、キシキシ……と板床を踏む音が聞こえてきた。

「調子はどう？ アヴァリアレス卿」

まだ年若い、赤い髪の少女。

ペロニカがセリーヌの前に姿を見せたのは一昨日の夜。そこで初めて、セリーヌはグラマトン正教会が完全に淫祇邪教の手に落ちたことを悟った。

何しろ彼女は、グラマトンにおける本来の最高権力者、法王の娘であり、聖女とまで呼ばれる存在だ。

そして、グラマトン軍の指揮官は淫祇邪教の教皇であることを、すでにペロニカの口から聞かされている。

淫祇邪教の教皇に、グラマトン聖教会の聖女である彼女が従っているという状況は、そうとしか考えられない。

無言でいると、ガチャリと音がしてペロニカが牢内に入ってきた。

「ようやく教皇陛下の許可が下りたんだ。殺しさえしなければ、ここにいる間はアヴァリアレス卿を……セリーヌを好きにしていってさ」

「昨日だってそうしていたらうに」

一昨日は丸裸に剥かれて身体中を検分された。昨日は「中に武器を隠しているかも」などと理由を付けて朝までじつくりと股間を嬲られたのだ。

「ふふん、そうだったかな？」

含みのある微笑みを浮かべたペロニカには、過日の面影がない。

敵とはいえ、ペロニカは騎士として勇名を馳せた豪傑だった。

弓と双剣の使い手で、男勝りの強気な性格。まだ年若いながらに騎士団を率いて戦い、戦場においては研ぎ澄まされた剣先を思わせる雰囲気を持った女性。だったはずだ。

それがなぜか、ここで再会した時には雰囲気が変わっていた。

「グラマトン聖教会は、なぜ淫祇邪教に下つてしまったんだ」

「……………」

ふと口にした疑問は、もしかしたら触れられたくない話題だったのか。初めてペロニカの表情が変わった。

緩んだ微笑みが消え、代わりに、その瞳に暗い炎が宿る。

「そう。我が国は教皇陛下のもの。教団に逆らう者は誰もいない……。いや、誰もいなくなった、と言うべきかな」

自嘲気味な言葉だ。

「では、その支配を受け入れたということか。勇名を馳せた騎士であり、グラマトンの『聖女』である貴女が」

「言ってくれるね。あの時にフェイエンの侵攻が成功していれば、あたしだってこんなことには……………」

あの時というのは、随分前に行われたグラマトン軍のフェイエン侵攻のことだろう。その時にセリーヌはフェイエンの武踏会に与してペロニカと戦い、それを退けている。それで恨まれているのだろう。

「あの敗戦によつてあたしの立場は……正統なグラマトンの勢力は弱体化したんだよ。だから国が邪教に侵蝕されていくことに、余計に気付けなかった。あたしなんて、教皇に犯されてようやく気付く有様だったよ」

さつきまでは現下と呼んでいた教皇を、今度は敬称なし。彼女の中に渦巻く複雑な心境が表れている。

（女としての矜持も砕かれて……だから私をこんなに恨んでいるのか……）

だが、それは明らかに逆恨みだ。

「貴公であれば、そんな状況でも牙を剥くことはできただろうに」

「あたしがどんな目に遭つたかなんて、想像できないでしょうね？ だからそんなセリフが吐ける……！」

吐き捨てるように言つたペロニカがセリーヌの肩を突き飛ばす。

床に片膝をつきながらも、セリーヌは食い下がる。

「私を恨む気概が残っているなら、教皇に対して反逆すれば——」

しかしその言葉はすぐに遮られた。「それが無理なんだ！」

叫んだ騎士の顔に浮かんでいたのは、怒りではなく恐怖だった。そこには諦めも悔しさも混じっている。

「そうだよ、もう、無理……」

それがふと、恍惚とでも呼べるような表情に変わって。それを押し隠すように彼女は沈黙してしまう。

やがてふつと笑った。

「まあいい。今はあたしが圧倒的優位にあつて、お前は地を這いずっている……それであたしの心は慰められる」

そう言った彼女は一転して最初の表情に戻ってしまった。こちらを見下すような、余裕ぶった微笑みに。

こちらを仰向けに押し倒した聖女が、服の上から胸を鷺掴みにしてきた。

「くっ……」

セリーヌも抵抗するが、手足の枷から伸びる鎖を鳴らして悶えるだけだ。

「こんなことをしただけで……っ、貴女の気が済むというのか」

以前の彼女であれば、恨みがある相手にでもこんな無体はしないだろう。

「もちろん満足するね」

そう言いながら、ペロニカは自分の股間に手を伸ばした。ちゅくりと音がして、セリーヌにもそこが湿っている

のであろうことが理解できてしまう。「ほら、あたし、相手が憎いお前なの

に、こんなに興奮してるんだよ？」

うつとりとした表情で濡れた股間をまさぐる赤髪の少女は、インナーの股布を躊躇なくずらす。秘裂が内側からのぬめりで滑るように口を開いて、膣口周辺の粘膜を晒していた。

「あたしはね、こんな風になっちゃったんだよ。相手が汗臭い雑兵だろうと、まだ男を知らないような町娘だろうと……。いつだって犯されたくて、犯したくて……急に身体が疼き始めて、我慢できなくなっちゃうんだ……」

まるでそれが喜ばしいことのように

呟いて、ペロニカは唾然とするセリーヌの顔を覗き込んできた。

正気を失っているわけではないのに、その瞳には狂気を感じてしまう。

（ペロニカ……）

その狂気が自分に向けられているというのに、つい憐憫の情を抱いてしまった。それが伝わったのだろう。

「ふふ、そうだろうな。でも、淫祇邪教に接していればお前もこうなる」

セリーヌは違和感にハツとした。密着するペロニカの下半身に目をやる。

「な、なぜ!? そんなもの……を」

「ふふっ、その言い方は酷い」

先程、彼女が自らずらした股布部分。そこに生えているのは……

「見てわかと思うけど、ペニスだよ」

ペロニカの言う通り、それは男性器にしか見えなかった。

血管の浮いた肉の茎も、そこから開いた肉阜も。陰囊が見当たらない以外

は、ペニスと何ら変わらない。

「猥下の精は、女を孕ます代わりにその身体を魔に染めるんだってさ……。これもその影響で……んんっ！」

龟头をセリーヌの下着に押しつけて、ペロニカははしたなく身体を揺らす。

「こんなの生えるようになったら、もう戻れないよな……?」

相手が誰だろうと、犯されたくて、犯したくて。そんなことを言っていた

ペロニカの言葉は、まさにその言葉通りの意味だった。

「ま、まさか……それを私に……!」

「許可が下りたつて……言つたら?」

ぶちゅ、と下着の股間に熱い感触。ペロニカの股間のものに、通常のペニスと違うところがもうひとつあった。

先走りの液体が異様に多いのだ。

「ははっ、ようやくお前を犯せる」

高揚感に満ちた声をあげて、ペロニカは乱暴にショーツを引きちぎる。

まだ秘裂に潜んでいた陰唇が龟头によつて左右に押しつけられた。ぬるりとした感触が入り込んでくる……

「あっ、くああああっ……!」

乱暴に扱われて、セリーヌの膣口は男性器を受け入れられるような状態にはほど遠い。なのにヌルヌルの液体を頭からかぶったペニスは、苦もなく膣口の窄まりを潜ってきてしまう。

「やつ! やめ、ろおお……!」

にゅるるるるぶぶ……! ペロニカを押しやる猶予はなかった。ぬぶぶぶつと卑猥な音を立てて、ペニスはもう半ばまで入り込んでいる。

「ひっ、これえっ、うあ……っ!」

強引に自分の中へ入り込んでくる異物感にセリーヌは引きつり声の混じる吐息を漏らし、そうしている間にも先

走りは漏れ続け、侵入した膣内をぐちよぐちよにしていくな。

愛液ではない液体から強制的にヌルヌルにされ、まだ縮こまっている膣内を無理矢理に掘削されていく感触は、これまで感じたことのないものだった。

「はあ、はあ……、鍛えているからかな、締めつけがキツイ……」

ペロニカの表情に迷いはない。そうするのが当然のように腰を押しつけ、ずぶぶつと、最奥まで。

「ぐう、くふ……うう! あうっ!」

ずんつと奥を突かれて、身体の内側から震えが湧いてくるような感覚……

セリーヌはぎゅつと歯を食いしばる。

「やめ……ろおお……抜いて……!」

「もちろん抜いてやるよっ」

セリーヌの喘ぎを違う意味に取ったグラマトンの聖女は、一番奥から一気にペニスを引き抜いていく。

「っは! ひいひいっ!」

愛液すら漏らしていない膣壁を強烈に刺激される不可思議な感覚に下腹を支配されて、セリーヌの背が弓なりに反っていく。

その反りが限界に至つたのと同時、龟头が抜けそうなくらいにまで抜いた

ペロニカは、そこから一転して挿入。

「っ、……ふあああああ……!」

今度はぐくりと、膣内から全身に流

れていく痺れがあった。

「はう、うう！ だめ、これはっ、だめええ、ひいっ！」

「ああ、止まらないっ！ あたしのおちんちん、気持ちいいっ！」

ますます乱暴に、自分勝手に、ペロニカは激しい抽送を開始している。ぶちゅん、ぶちゅんと、押し出された透明汁が弾けては畳を濡らしていく。

「こ、これじゃ……ひんんっ！ か、感じてしまっ、うううんんっ！」

少しの思考も許されない激しさで腰を振る聖女には、相手を気持ちよくさせようなどという気遣いは一切ない。

なのにセリーヌにとっても、その感覚はどんな快楽へと近づいていく。

ひとりでに膣が締めつけられ、下腹にはすぐに温かな火が灯ってしまう。

「ふあっ！ はあ、くふ！ うんんっ！ ひっ、ひあっ……！」

その息遣いには甲高い声が混じり始め、同じ女性であるペロニカに快楽の存在は隠しきれない。

「やっぱり感じるのか。ふふ、まだまだこんなものじゃないのに！ ほら、ここは弱いでしょ！」

「やめっ、そこはっ……！」

クリトリスが荒々しい手つきで摘み上げられた。ぬめり汁を浴びていた陰核をすり潰されてしまう。

「かはあっ……！ あ、あうっ、きやひいひいひいっ！」

ざざざと全身が粟立ち、一瞬遅れて強烈な快感が走る。セリーヌは瞳

涙を浮かべて絶叫していた。

「あははっ、あのセリーヌがこんなに弱々しい悲鳴をあげるなんて！ ますます興奮しちゃう！」

ペロニカも興に乗り、下腹を突き上げるような角度で何度も何度も抽送。ごりゅごりゅと膣壁がえぐられる感覚に、セリーヌは翻弄されて息を継ぐことすらできない。

もはやセリーヌの膣内を濡らしているのはペロニカの液体だけではない。きゅんつきゅんつと律動を始めた膣肉からは彼女自身の愛液が漏れており、ますます量を増した液体が膣口でぶちゅぶちゅと泡立っている。

「こっ、こんなのお……！ ひやうっ！ お、おかし、んんんっ！ ダメだ、やめ……ひいひいっ！」

女性から犯されることに違和感があるのに。むしろ身体は敏感になり、いつもより急激に火照りを増していく。

自分の下で喘ぎを激しくする仇敵に満足げなペロニカは、こらえられないといったように目を細める。

「そんなこと言っ、気付いてるんだよ。さつきから尻の穴までヒツつかせて……！ イセリアの騎士つてのは尻の経験まであるみたいだな！」

「そ、それはあ……！ ひっ、おしっ、り……ひいあああっ！」

何が起こったのかわからない。突如として身体を持ち上げられたと思つた瞬間、ひっくり返されて畳に突っ伏す形に。しかしそれだけではなく、

崩れた四つん這いで持ち上がった尻を掴まれ、再び挿入の気配を感じたのは……膣穴だけではなかった。

「お尻の穴、まるで吸い込まれるみたいにあたしのチンポが飲み込まれてくよ！ イセリアの騎士団長殿がこんないやらしいアナルの持ち主だったなんて、ふふっ、お笑いだよ！」

「ひあああああああっ！ おしりっ、らめえっ！ そこはっ、そこは、んんんうーっ！ な、なんでっ、ひいひいひいっ！ りよ、両方に……！」

後ろから犯すペロニカの股間には二本目のペニスが生え出ていた。反り返った肉棒で前後の穴を穿り返され、セリーヌはたまらず逃れようとする。

にゆるぶぶぶぶっ！

「ひぎひいひいひいっ！」

だが、もちろんそれは叶わない。反ったペニスが楔のように打ち込まれ、尻を持ち上げた格好のまま、セリーヌは畳をざりつと引つ掻くだけ。

かつて何度も犯されてしまっている肛門も、逃れようとする意思とは裏腹にペニスに食いついて離れない。

二本のペニスを引かれると全身から力が抜けていき、押し込まれると四肢の先までがピンと張りつめる。

「こ、こんなので気持ちよくなるなんて……いやっ！」

叫びそうになった言葉は心の中だけに押し込め、しかし感覚までは押し殺すことができずに目を震わせる。

「わかるよっ……イキそうなんだろう？」

ははっ、こうなつてしまえばセリーヌもただの牝豚じゃないか！」

ペロニカはますます抽送を速くし、セリーヌの背に覆い被さつてきた。

膣口も肛門も無理な角度にひしゃげて、グボグボと卑猥な音を立ててしまっている。飛び散った粘つきのある雫に両者の股間はドロドロだ。

「あたしもこんなに気持ちいい！ ああ、出してやる！ お前のせいで、あはははあああっ！」

鬱屈した思いを吐き出すペロニカの腰がグイッと引き出され、

「ふあっ!? あ——」

セリーヌがその予感に震え、怯えたように背後を窺おうとする。

しかしそうする間もなくペニスの動きは反転してしまい、

ぐぶちゅううううっ！

二本のペニスが最奥まで、同時に突き込まれる。

「ひ……！ あ……！」

その瞬間、セリーヌは抑えようもない感覚が到来してしまつたのを感じた。ゾクゾクツと下腹を甘い痺れで満たしたものが、全身に爆散して――。

「イッ、ひ……！ イクッ、イッ……く……うひあああああああっ！」

ヴァギナとアナルがきゅつと縮こまつて痙攣すると同時に、セリーヌは絶頂を叫んでしまつていた。

独特の温かさがお腹の中に広がって
いて、しかしそれは――。

「ひあああ！ な、何で……と、止ま
らなっ、ひ！ 中がっ、私のなかっ、
いっぱいにつ、つひいいいっ！」
どくんどくんっ！ びゅるびゅるる
るっ、どぶぶぶぶっ！

射精は一向に止まる気配がない。

「つはあああ……出るっ！ あたしの
おちんぼっ、まだまだ出るううっ！」
ペロニカの呆けた顔がますます蕩け、
一方で絶頂の直後だったセリーヌの顔
はみるみる強ばっていく。

「くふ！ は、はやっ、抜いて……！
きひっ、うあああああっ！」

多いのは先走りだけでなく、精液自
体もそうらしい。

教皇の影響下にあることを示す魔精
液が次々と生み出され、吐き出される。
その量たるや、あつという間に腔内を
満たし、あるいは腸に逆流するほど。
ぼっこりと膨らんでいくお腹に違和
感を覚えた次の瞬間には、すでにそれ
が切迫感となつてセリーヌを苛む。

「ぐふあっ、く、くるし……！ まだ
出て……!? こんなっ、ひ……！」

前のめりに崩れたセリーヌが、たま
らずお尻を振って畳を這いずる。

「あつ、ああああああつ！ らめっ、
ひっ、おしりっ、動かせなっ、ひっ！」
下腹内部を掻き回され、強烈な脱力
にへなへなと氣力までが萎える。

もう動けない。動いたら――。

しかしペロニカは満足げな溜め息を
ついて、ようやく脈動の収まりつつあ
るペニスを抜いていく。

「……だめっ、ダメダメダメ……！」

力を込めるのに、絶頂の余韻と全身
の脱力感が邪魔してままならない。

「さすがに漏らすのは恥ずかしいん
だ？ よかった、そんな姿が見られて」
ペロニカから冷酷な言葉をかけられ
ても、睨むことすらできなかった。ヌ
ルヌルと抜け出ていくペニスを、自分
はどうすることもできない。

ただぎゅっとな拳を握って全身で力み

……やがてペニスが完全に抜けたと同
時、そんな努力はまったく意味をなさ
ないことをセリーヌは知り、その脳裏

にはかつての似たような経験がフラッ
シュバックする。その時に感じた解放
感と、その快感も……。

「やつ、ああああああああつ！ ら
めえっ！ 漏れっ、漏れてしまう、う
うううっつ！ あああああつ！」

抜け出ていくペニスを見送ったふた
つの穴が一瞬だけ締まり、ひくんっ！
と尻が跳ねたその次には。

ぶちゅっ！
尻からは、わずかに濁った液体が。

どぼぼっ！
そして腔口からは、真っ白な粘液が

ドロリと垂れ落ちるように。

ぶちゅううっ！ ぶぼっ、ぶちゅう
ううううっ！

「ひいいひいいひ……っ！ でっ、
出るううううううっ！」

畳の上に大量の汚液を撒き散らしな
がら、セリーヌは全身を緩やかに包む
解放感に酔いしれていた。

※

セリーヌがペロニカに犯されていた
のと同時刻。少し離れた奥座敷では、
別の声が響いている。

高い天井の梁には縄が結ばれている。
その先端は直下にいる少女の手首を縛
りつけてつま先立ちを強要し、さらに
はその儂い裸身に巻きついていた。

手首の縄は首の横を通って乳房を絞
り上げ、そして股間へと向かう。

「はっ、はっ……ううう」
少女の吐息は荒い。

縄に恥裂を割られ、さらには汗みず
くの全身を柔らかな感触に延々と何時
間も責め立てられていたからだ。

まだ発育の余地を感じさせる胸の谷
間につうつと汗が流れる。それを教皇
はペロリと舐めて。

「くくっ、いい味になったわい。ほれ、
次はこつちも搾り出してみせよ」

ホカゲの股間に渡った縄が思いきり
引っ張り上げられた。

「ひんんっ！ はっ、はああつ、はふ
ううう……っ！」

ぐにゅつと食い込んだ恥裂の縄の感
触に、線の細い少女の瞳が大きく開く。

「くくく……」

先日より若返つたように見える教皇
は、そのまま身体を舐め落ちていつて、
両の手で少女の恥裂を割り開いた。

「ひい！ やっ、触っちゃだめえ……」

……！ 擦れっ、ふああ……！」

そして陰核を擦り上げながら縄をず
らし、まだ陰毛すら薄い彼女にぼっか
りと開いた穴に目を細める。

つい先日処女を失ったその小穴から
は、美味しそうな愛液の流れがトロト
ロと畳まで続いていた。

「お前は濡れやすいようじゃの。ほれ、
こんなに溢れて……たまらんわ」

教皇は顔を股間に寄せて、舌で掬い
取るように密着させる。

じゅるるるっ！

今分泌されたばかりの愛液を吸り舐
めた男が、ヒクヒクと腔口を震わせる

少女を見上げてにやりと笑う。

「くふふ、さすがメイズの守り手。い
い下僕を手に入れたものの……」

ホカゲの陰部は真っ赤に充血してし
まっている。それは縄に擦れたせいでは
なく、グリグリと美味しそうな陰唇

も、さつきからひくつきっぱなしの腔
口も、性感の深さを物語っていた。

「どれ、お前はどようして欲しい？」
立ち上がった教皇が少女に尋ねる。

「はあつ、はあ……」

どこかぼんやりした目でホカゲは眼
前の老人を見やる。自分を穢し、辱め、
今もこうやって苦しめている男を。

その瞳にわずかな躊躇が見えてから、
彼女は口を開いた。

「わ、私は……何も望みません」
それだけで精いっぱいというように、
ぎゅっつと目と口を閉じてしまう。

「そうかの」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>